**IBM Marketing Software Reports** 

バージョン 10 リリース 1 2017 年 10 月

# インストールおよび構成ガイド



- 注記 -

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、 169 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Marketing Platform バージョン 10、リリース 1、モディフィケーション 0、および新しい版で明記さ れていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示さ れたりする場合があります。

- 原典: IBM Marketing Software Reports Version 10 Release 1 October 2017 Installation and Configuration Guide
- 発行: 日本アイ・ビー・エム株式会社
- 担当: トランスレーション・サービス・センター
- © Copyright IBM Corporation 1999, 2017.

## 目次

第1章 インストールの概要	• 1 • 1 • 5 • 6 • 6
第 2 章 IBM Marketing Software レポー トのインストールの計画	. <b>9</b>
eMessage レポートの前提条件	. 11
第 <b>3</b> 章 レポート・コンポーネントのイン ストール	13
ユーサーへの役割の割り当て、またはユーサーからの外割の削除	10
	13
IBM Marketing Software システムへのレポート・	. 13
スキーマのインストール・・・・・・・・・・	. 14
JDBC データ・ソースの作成 .........	. 15
第 4 章 IBM Cognos BI のインストール	
およびテスト	17
IBM Cognos BI のインストール・オプション. .	. 17
IBM Cognos BI Web アプリケーションと Web サ	
- <i>ĭ</i>	. 18
ーバー	. 18 . 18
ーバー	. 18 . 18
ーバー	18 18
-バー	18 18 <b>21</b>
-バー	18 18 <b>21</b>
-バー	18 18 <b>21</b> 21
<ul> <li>ーバー</li></ul>	. 18 . 18 <b>21</b> . 21
<ul> <li>ーバー</li></ul>	18 18 <b>21</b> 21 21
<ul> <li>ーバー</li></ul>	<ul> <li>18</li> <li>18</li> <li>21</li> <li>21</li> <li>22</li> <li>23</li> </ul>
<ul> <li>ーバー</li></ul>	18 18 <b>21</b> 21 22 22 23 24
<ul> <li>ーバー</li></ul>	. 18 . 18 <b>21</b> . 21 . 22 . 22 . 23 . 24
ーバー	. 18 . 18 <b>21</b> . 21 . 22 . 23 . 24 . 25
<ul> <li>ーバー</li></ul>	. 18 . 18 <b>21</b> . 21 . 22 . 23 . 24 . 25
ーバー	. 18 . 18 <b>21</b> . 21 . 22 . 23 . 24 . 25 . 25
<ul> <li>ーバー</li></ul>	<ul> <li>18</li> <li>18</li> <li>21</li> <li>21</li> <li>22</li> <li>23</li> <li>24</li> <li>25</li> <li>25</li> </ul>
<ul> <li>ーバー</li></ul>	18 18 21 21 22 23 24 25 25 25 27
<ul> <li>ーバー</li></ul>	<ul> <li>18</li> <li>18</li> <li>21</li> <li>21</li> <li>22</li> <li>23</li> <li>24</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>27</li> </ul>
ーバー	18 18 21 22 22 23 23 24 25 25 25 25 27 28
ーバー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	18 18 21 22 22 23 24 25 25 25 25 25 27 28 28
ーバー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	18 18 21 22 23 23 24 25 25 25 25 27 28 28 30
ーバー	<ul> <li>18</li> <li>18</li> <li>21</li> <li>21</li> <li>22</li> <li>23</li> <li>24</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>27</li> <li>28</li> <li>28</li> <li>30</li> </ul>
ーバー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	<ul> <li>18</li> <li>18</li> <li>21</li> <li>21</li> <li>22</li> <li>23</li> <li>24</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>27</li> <li>28</li> <li>28</li> <li>30</li> <li>31</li> </ul>
ーバー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	<ul> <li>18</li> <li>18</li> <li>21</li> <li>21</li> <li>22</li> <li>23</li> <li>24</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>25</li> <li>27</li> <li>28</li> <li>30</li> <li>31</li> </ul>

語設定の変更	33
Interact の場合のみ: ビューまたは具体化された	
	33
Interact の場合のみ: レポート・テーブルの作成	
およびデータ設定	34
Cognes Connection $\Delta O V $	00
V#_ b	26
	. 30
	- 37
レボート内の内部リンクの有効化	38
データ・ソース名の確認と公開	39
Marketing Platform での Cognos レポート・プロ	
パティーの構成	39
レポート・フォルダー権限の設定	40
レポート・フォルダー権限の構成	40
eMessage の場合のみ: ストアード・プロシージャー	
をスケジュールして実行する方法	41
Orada のフトアード・プロシージャーの構成例	12
	43
Microsoft SQL Server 用ストノート・ノロジー	
シャーの構成例	45
IBM DB2 用ストアード・ブロシージャーに対す	
る権限の付与...............	46
Interact イベント・パターン・レポート用のストア	
ード・プロシージャー	49
Interact イベント・パターン・レポート用ストア	
ード・プロシージャーの使用可能化	52
Interact イベント・パターン・レポートの並列実行	02
	<b>E</b> 1
の反日いの友文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	54
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ	
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ.	55
UARI_DELTA_REFRESH_LOG       テーブル内のログ・メッセ         ージ	55 57
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ	55 57
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ	55 57 58
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ.         記証を有効にする前の構成のテスト         IBM Marketing Software 認証を使用するように         IBM Cognos を構成する方法         レポート・システム・ユーザーの作成	55 57 58 59
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ	55 57 58 59
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ	55 57 58 59
<ul> <li>Interact イインド・パス シーレホ 「トに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ</li></ul>	55 57 58 59 59
<ul> <li>Interact イインド・パス シーレホ 「トに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ</li></ul>	55 57 58 59 59
<ul> <li>Interact イインド・バス シーレホ 「トに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ.</li> <li>認証を有効にする前の構成のテスト</li> <li>IBM Marketing Software 認証を使用するように</li> <li>IBM Cognos を構成する方法</li> <li>レポート・システム・ユーザーの作成</li> <li>IBM Marketing Software での Cognos 認証プロパティーの構成</li> <li>IBM Marketing Software Authentication</li> <li>Provider を使用するための IBM Cognos の構成.</li> </ul>	55 57 58 59 59 61
<ul> <li>Interact キャスクト・ハス シーレホ トに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ.</li> <li>認証を有効にする前の構成のテスト</li> <li>IBM Marketing Software 認証を使用するように</li> <li>IBM Cognos を構成する方法</li> <li>レポート・システム・ユーザーの作成</li> <li>IBM Marketing Software での Cognos 認証プロパティーの構成</li> <li>IBM Marketing Software Authentication</li> <li>Provider を使用するための IBM Cognos の構成.</li> <li>Marketing Platform の追加設定の構成</li> </ul>	55 57 58 59 61 62
<ul> <li>Interact キャスクト・ハス シーレホ トに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ.</li> <li>認証を有効にする前の構成のテスト</li> <li>IBM Marketing Software 認証を使用するように</li> <li>IBM Cognos を構成する方法</li> <li>レポート・システム・ユーザーの作成</li> <li>IBM Marketing Software での Cognos 認証プロパティーの構成</li> <li>IBM Marketing Software Authentication</li> <li>Provider を使用するための IBM Cognos の構成.</li> <li>Marketing Platform の追加設定の構成</li> <li>認証が構成された状態での構成のテスト</li> </ul>	55 57 58 59 59 61 62 63
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ	55 57 58 59 61 62 63
<ul> <li>Interact キャスク ド・パス シーレホ ドに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ.</li> <li>認証を有効にする前の構成のテスト</li> <li>IBM Marketing Software 認証を使用するように</li> <li>IBM Cognos を構成する方法</li> <li>レポート・システム・ユーザーの作成</li> <li>IBM Marketing Software での Cognos 認証プロパティーの構成</li> <li>IBM Marketing Software Authentication</li> <li>Provider を使用するための IBM Cognos の構成</li> <li>認証が構成された状態での構成のテスト</li> <li>第 6 章 レポート作成の構成方法</li> </ul>	55 57 58 59 59 61 62 63 <b>65</b>
<ul> <li>Interact キャスク ド・パス シーレホ ドに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ.</li> <li>認証を有効にする前の構成のテスト</li> <li>IBM Marketing Software 認証を使用するように</li> <li>IBM Cognos を構成する方法</li> <li>レポート・システム・ユーザーの作成</li> <li>IBM Marketing Software での Cognos 認証プロパティーの構成</li> <li>IBM Marketing Software Authentication</li> <li>Provider を使用するための IBM Cognos の構成</li> <li>認証が構成された状態での構成のテスト</li> <li>第 6 章 レポート作成の構成方法</li> </ul>	55 57 58 59 61 62 63 <b>65</b> 66
<ul> <li>Interact キャンプド・パメ シーレホ ドに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ.</li> <li>認証を有効にする前の構成のテスト</li> <li>IBM Marketing Software 認証を使用するように</li> <li>IBM Cognos を構成する方法</li> <li>レポート・システム・ユーザーの作成</li> <li>IBM Marketing Software での Cognos 認証プロパティーの構成</li> <li>IBM Marketing Software Authentication</li> <li>Provider を使用するための IBM Cognos の構成.</li> <li>Marketing Platform の追加設定の構成</li> <li>認証が構成された状態での構成のテスト</li> <li>第6章 レポート作成の構成方法</li> <li>レポート・フォルダー権限</li> </ul>	55 57 58 59 61 62 63 <b>65</b> 66 66
<ul> <li>Interact キャンティング シャンホ ドに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ.</li> <li>認証を有効にする前の構成のテスト</li> <li>IBM Marketing Software 認証を使用するように</li> <li>IBM Cognos を構成する方法</li> <li>レポート・システム・ユーザーの作成</li> <li>IBM Marketing Software での Cognos 認証プロ パティーの構成</li> <li>IBM Marketing Software Authentication</li> <li>Provider を使用するための IBM Cognos の構成</li> <li>Marketing Platform の追加設定の構成</li> <li>認証が構成された状態での構成のテスト</li> <li>第6章 レポート作成の構成方法</li> <li>レポート・フォルダー権限</li> <li>IBM Marketing Software Authentication</li> </ul>	55 57 58 59 61 62 63 <b>65</b> 66
UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ. 認証を有効にする前の構成のテスト IBM Marketing Software 認証を使用するように IBM Cognos を構成する方法 レポート・システム・ユーザーの作成 IBM Marketing Software での Cognos 認証プロ パティーの構成 IBM Marketing Software Authentication Provider を使用するための IBM Cognos の構成 Marketing Platform の追加設定の構成 Marketing Platform の追加設定の構成 Uポートおよびセキュリティー. レポート・フォルダー権限 IBM Marketing Software Authentication	55 57 58 59 61 62 63 <b>65</b> 66 66 66
Interact キャンティス シャレホ ドに対する UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ	55 57 58 59 61 62 63 <b>65</b> 66 66 66 67 69
<ul> <li>Interact キャンティング シャンホートに対する</li> <li>UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセージ.</li> <li>認証を有効にする前の構成のテスト</li> <li>IBM Marketing Software 認証を使用するように</li> <li>IBM Cognos を構成する方法</li> <li>レポート・システム・ユーザーの作成</li> <li>IBM Marketing Software での Cognos 認証プロパティーの構成</li> <li>IBM Marketing Software なしたの構成</li> <li>IBM Marketing Software Authentication Provider を使用するための IBM Cognos の構成</li> <li>第6章 レポート作成の構成方法</li> <li>第6章 レポート作成の構成方法</li> <li>IBM Marketing Software Authentication Provider と IBM Cognos BI システム</li> </ul>	55 57 58 59 61 62 63 66 66 66 66 67 69 70
Interact キャンティング シャンホートに対する UARI_DELTA_REFRESH_LOG テーブル内のログ・メッセ ージ	55 57 58 59 61 62 63 <b>65</b> 66 66 66 67 69 70

レポート配置オプション..........	70
レポートのコントロール・グループおよびターゲ	
ット・グループ.............	72
オーディエンス・レベルとレポート	72
レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キ	
—	72
パーティションとレポート・スキーマ	73
Framework Manager データ・モデル	73
Report Authoring $\forall \vec{x} - b$	74
フォルダー、サブフォルダー、およびアクセス設	
定	74
レポートのスタイルと外観	75
レポート生成スケジュールのセットアップ	75
レポート・スキーマのカスタマイズ方法.....	76
コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メト	
リックの追加...............	76
カスタム属性の追加 .............	77
レスポンス・タイプの追加	78
コンタクト・ステータス・コードの追加....	78
パフォーマンス・レポートのカレンダー期間の指	
定	79
パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴	
のオーディエンス・レベルの構成 . . . . .	79
追加のオーディエンス・レベルまたはパーティショ	
ンのレポート・スキーマ	80
キャンペーン・オファーのレスポンスの詳細スキ	
ーマの作成	81
キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータ	
スの詳細スキーマの作成..........	82
オファー・パフォーマンス・スキーマの作成	82
キャンペーン・パフォーマンス・スキーマの作成	83
キャンペーン・カスタム属性スキーマの作成	84
対話実績スキーマの作成	85
IBM Cognos モデルのカスタマイズ方法	86
データ・モデルにある既存のビューまたはテーブ	
ルへの属性の追加	86
IBM Cognos データ・モデルへのビューの追加	87
IBM Marketing Software アプリケーション用に	
Cognos レポートをカスタマイズおよび作成する方	
法	89
Campaign レポートの作成に関するガイドライン	89
インタラクション・ポイント・パフォーマンス・	
ダッシュボード・ポートレットの構成方法	90
カスタム・ダッシュボード・レポートの作成に関	
するガイドライン	91
第 7 章 Cognos のフォルダーおよびレ	
ポートに対するユーザー権限・・・・・・	93
CIAP セキュリティーを実装する方法	94
CIAP に備えて Cognos 環境をバックアップする	94
プロパティー・ファイルの編集と同期	95
Cognos での新しい名前空間プロバイダーの構成	96
同期の検査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	97
新しい役割に対する Cognos の権限の割り当て	98
Cognos の System Administrators 役割からの	
Everyone グループの削除	98

パブリック・フォルダー内の読み取り専用アクセ	
ス権をレポート・ユーザーに付与する	. 99
パブリック・フォルダーのセキュリティー保護	100
Cognos でのユーザー権限の検証	100
環境からの CJAP 実装の削除	101

#### 第8章 複数のパーティションに対応す

る IBM Cognos レポートの構成方法10	)3
複数パーティションのための前提条件 10	03
レポート・パーティション・ツールを実行してレポ	
ート・アーカイブ .zip ファイルのコピーを作成す	
3	04
Campaign 用の Cognos モデルのコピーの作成 10	05
eMessage 用の Cognos モデルのコピーの作成 10	06
IBM Marketing Software「構成」ページでの各パ	
ーティションのレポート・プロパティーの更新 10	07

## 第9章 レポートをアップグレードする

方法 ...............1(	09
アップグレードの前提条件	09
ビュー、具体化されたビュー、またはテーブルをド	
ロップする SQL の生成および製品データベースで	
の SQL の実行	10
Marketing Platform でのレポート・スキーマのア	
ップグレード	12
Marketing Platform でのレポート・テンプレート	
のアップグレード.............	13
IBM Marketing Software 統合コンポーネントのア	
ップグレード	13
eMessage および Interact のルックアップ・テーブ	
ルの更新	15
製品データベースでのビューまたはテーブルのアッ	
プグレード	15

#### 第 10 章 8.x または 9.x モデルのアッ プグレードおよび新しいレポートのイン ストール.....117

### 第11章 レポート作成の構成プロパテ

́ イー <b>1</b>	23
レポート   統合   Cognos [バージョン]	123
レポート   スキーマ   [製品]   [スキーマ名]	
SQL 構成	127
レポート   スキーマ   Campaign	128
レポート   スキーマ   Campaign   オファー・	
パフォーマンス	128
レポート   スキーマ   Campaign   [スキーマ名]	
列   [コンタクト・メトリック]	129
レポート   スキーマ   Campaign   [スキーマ名]	
列   [レスポンス・メトリック]	131
レポート   スキーマ   Campaign   キャンペー	
ン・パフォーマンス	132
レポート   スキーマ   Campaign   キャンペー	
ン・オファー・レスポンスの詳細	133

レポート   スキーマ   Campaign   キャンペー	
ン・オファー・レスポンスの詳細   列   [レスポ	
ンス・タイプ]	. 134
レポート   スキーマ   Campaign   キャンペー	
ン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細 .	. 135
レポート   スキーマ   Campaign   キャンペー	
ン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細	
列   [コンタクト・ステータス]	. 136
レポート   スキーマ   Campaign   キャンペー	
ン・カスタム属性   列   [キャンペーン・カスタ	
ム列]	. 137
レポート   スキーマ   Campaign   キャンペー	
ン・カスタム属性   列   [オファー・カスタム列]	. 138
レポート   スキーマ   Campaign   キャンペー	
ン・カスタム属性   列   [セル・カスタム列] .	. 139
レポート   スキーマ   Interact	. 139
レポート   スキーマ   Interact   対話実績	. 140
レポート   スキーマ   eMessage	. 141
Campaign   partitions   partition[n]   reports	142
第 12 章 Cognos レポートの書式設定	145

	~~ •	-	~ ~	_	140
グローバル・レポートのスタイル					. 145
レポートのページ・スタイル .					. 147
リスト・レポート・スタイル .					. 147
クロス集計レポートのスタイル					. 149

チャートのスタ1	ル									150
ダッシュボード・	レ	ポー	- ト	の	スタ	マイ	ル	•		152

## 第 13 章 Campaign、eMessage、およ

び Interact の Cognos レポー	- ト	の	書	式	
設定					153
グローバル・レポートのスタイル					. 153
リスト・レポート・スタイル					. 156
クロス集計レポートのスタイル					. 158
チャートのスタイル					. 158
ダッシュボード・レポートのスタイル					. 159

#### 第14章 製品別のレポートおよびレポ

ート・スキーマ	161
eMessageレポートおよびレポート・スキーマ	. 164
Interact レポートおよびレポート・スキーマ	. 164

## IBM 技術サポートへのお問い合わせの前

に	•	•	•	•	•	•	•			•	•	•	•	•	•	•	•	•	1	67
特詞	]事	項	Ī.								•					•			1	169
商標 プラ	・ イノ	・ バシ	/		ポ	リミ	/-	・ -お	・ よ	び	利	用者	. 条在	牛に	こ関	ます	- 7	3津		171
慮事	項.				•	•			•			•	•	•	•				•	171

## 第1章 インストールの概要

IBM<sup>®</sup> Marketing Software レポートのインストールは、IBM Cognos<sup>®</sup> BI をインス トールして、それを IBM Marketing Software アプリケーション用に構成すると完 了します。本書では、IBM Cognos BI を構成し、IBM Cognos BI を IBM Marketing Software に統合する方法について詳しく説明します。

eMessage レポートを使用している場合、レポートをインストールまたはアップグレ ードする追加のステップを実行する必要があります。また、eMessage レポートをイ ンストールまたはアップグレードするプロセスには、データベース管理者の関与が 必要です。

インストール・ロードマップを使用して、IBM Marketing Software レポートのた めのインストール・プロセスについて理解してください。

#### インストール・ロードマップ

このインストール・ロードマップを使用すると、IBM Marketing Software レポートのインストールに必要な情報を素早く見つけることができます。

レポートのインストール・プロセスには、以下のステップが含まれます。

- レポート・コンポーネントのインストール。
- IBM Cognos BI のインストールおよびテスト。
- Cognos システムへの IBM Marketing Software 統合コンポーネントおよびレポ ート・モデルのインストール。
- レポートのカスタマイズ。

次の表は、IBM Marketing Software レポートのインストール・プロセスの概要 を、関係ステップの要旨と詳細手順の参照先情報とともにまとめたものです。

表 1. レポート・コンポーネントをインストールするためのロードマップ

ステップ	説明	詳細の参照先
前提条件について理解す	レポートのインストールに必要なシステム前提条件につい	<b><i>IBM Marketing Software</i></b>
る。	て理解します。	Products Recommended
	重要: eMessage については、eMessage レポートをインス	Software Environments and
	トールするための追加の前提条件も理解する必要がありま	Minimum System
	す。	<i>Requirements</i> 」を参照。
		eMessage については、
		11 ページの『eMessage レ
		ポートの前提条件』も参
		照。
IBM Marketing Software	レポートで使用するデータを提供する製品をインストール	個別の製品インストール・
製品をインストールする。	します。	ガイドを参照。

表 1. レポート・コンポーネントをインストールするためのロードマップ (続き)

ステップ	説明	詳細の参照先
システム・ユーザーをセッ トアップする。	「設定」 > 「構成」ページ、および「設定」 > 「レポー ト <b>SQL</b> ジェネレーター」ページに対するアクセス権限を 持つユーザーを構成します。レポート・プロパティーを構 成するときと、レポート・スキーマの作成に使用される SQL を生成するときは、このユーザーとしてログインしま す。	13 ページの 『ReportsSystem 役割を持 つユーザーの構成』を参照 してください。
Marketing Platform がイ ンストールされているマシ ンにレポート・スキーマを インストールする。	IBM マスター・インストーラーとレポート・パック・イン ストーラーを同じディレクトリーに配置し、マスター・イ ンストーラーを起動します。	14 ページの『IBM Marketing Software システ ムへのレポート・スキーマ のインストール』 を参照し てください。
JDBC データ・ソースを作 成する。	Marketing Platform が配置されているアプリケーション・ サーバーで、レポートに使用する製品用のシステム・テー ブル・データベースへの JDBC データ・ソース接続を作成 します。	15 ページの『JDBC デー タ・ソースの作成』を参 照。

表 2. IBM Cognos BI をインストールしてテストするためのロードマップ

ステップ	説明	詳細の参照先
IBM Cognos BI をインス	IBM Cognos 資料の指示に従ってインストールを行ってか	17 ページの『第 4 章
トールする。	ら、システムをテストします。	IBM Cognos BI のインスト ールおよびテスト』を参
		照。

表 3. Cognos システムに IBM Marketing Software 統合コンポーネントおよびレポート・モデルをインストールする ためのロードマップ

ステップ	説明	詳細の参照先
Marketing Platform シス	Marketing Platform で使用する JDBC ドライバーを、	21 ページの『Marketing
テム・テーブル用の JDBC	Cognos Content Manager がインストールされているマシ	Platform システム・テーブ
ドライバーを入手する。	ンにコピーします。 IBM 認証が実装されている場合、	ル用の JDBC ドライバーの
	Cognos はユーザー情報を入手する際にこの認証を使用し	入手』を参照。
	ます。	
Cognos システムにレポー	IBM Marketing Software マスター・インストーラー、	22 ページの『IBM
ト・モデルと統合コンポー	Marketing Platform インストーラー、および製品のレポー	Cognos システムへのレポ
ネントをインストールす	ト・パックのインストーラーを、Cognos Content	ート・モデルと統合コンポ
る。	Manager がインストールされているマシン上の同じディレ	ーネントのインストール』
	クトリーに配置します。次に、マスター・インストーラー	を参照。
	を起動します。	
IBM Marketing Software	Cognos アプリケーションでは、レポートのために IBM	23 ページの『IBM
アプリケーション・データ	Marketing Software アプリケーション・データ・ソース	Marketing Software アプリ
ベース用の Cognos デー	に対する接続が必要です。 Cognos Connection の「管	ケーション・データベース
タ・ソースを作成する。	理」セクションを使用して、こうしたデータ・ソースを作	用の IBM Cognos デー
	成します。	タ・ソースの作成』を参
		照。
E メール通知をセットアッ	レポートを E メール添付ファイルとして送信するオプシ	24 ページの『オプション:
プする。	ョンを有効にする場合、Cognos Configuration で通知を	E メール通知のセットアッ
	構成します。	プ』を参照。

表 3. Cognos システムに IBM Marketing Software 統合コンポーネントおよびレポート・モデルをインストールする ためのロードマップ (続き)

ステップ	説明	詳細の参照先
Cognos ファイアウォール を構成する。	Cognos Configuration で、IBM Marketing Software シ ステムを有効なドメインまたはホストとして指定します。	25 ページの『IBM Cognos Application Firewall for IBM Marketing Software の構
eMessage のために、ステ ージング表、索引、および ストアード・プロシージャ ーを作成するためのスクリ プトを実行する。	eMessage レポート用のステージング表、索引、およびス トアード・プロシージャーを作成するために必要なスクリ プトを実行します。	成』を参照。 <b>27</b> ページの『eMessage の場合のみ: ストアード・ プロシージャー、ステージ ング表および索引の作成』 を参照してください。
レポート SQL ジェネレー ターのテンプレートをロー ドする。	Campaign、eMessage、および Interact にレポートを実装 するには、レポートがレポート可能データを抽出するレポ ート・ビューまたはテーブルを作成します。これらのビュ ーまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成する 際にレポート SQL ジェネレーターが使用するテンプレー トは、レポート・パックに含まれています。このステップ では、こうしたテンプレートを Marketing Platform シス テム・テーブル・データベースにロードします。	28 ページの『レポート SQL ジェネレーターのテン プレートのロード』を参 照。
ビューまたはテーブルの作 成スクリプトを生成する。	いくつかの必要な構成プロパティーを設定し、レポート SQL ジェネレーターを使用して、レポート・ビューまたは レポート・テーブルを作成するための SQL を生成しま す。	28 ページの『ビューまた はテーブルの作成スクリプ トの生成』を参照。
レポート・ビューまたはレ ポート・テーブルを作成す る。	IBM Marketing Software 製品システム・テーブル・デー タベースにビューまたはテーブルを作成します。	<ul> <li>以下のいずれかのトピックを参照。</li> <li>31 ページの 『Campaign の場合のみ: レポート・テーブルの作成およびデータ設定』</li> <li>34 ページの『Interact の場合のみ:レポート・テーブルの作成およびデータ設定』</li> <li>32 ページの 『Campaign および eMessage の場合のみ: ビューまたは具体化されたビューの作成』</li> <li>33 ページの『Interact の場合のみ:ビューまた は具体化されたビューの 作成』</li> </ul>
レポート・フォルダーをイ ンポートする。	Cognos Connection で、レポートの圧縮ファイルをインポ ートします。	36 ページの『Cognos Connection へのレポート・ フォルダーのインポート』 を参照。

表 3. Cognos システムに IBM Marketing Software 統合コンポーネントおよびレポート・モデルをインストールする ためのロードマップ (続き)

ステップ	説明	詳細の参照先
データ・モデルを構成して 公開する。	Cognos データ・ソースを作成したときに IBM Marketing Software システム・テーブルの所有者以外としてデータ・ ソースにログインした場合は、このステップを実行する必 要があります。	37 ページの『データ・モ デルの構成および公開』を 参照。
レポート内の内部リンクを 有効にする。	IBM Marketing Software レポートには、標準リンクがあ ります。それらを有効にするには、Cognos データ・モデ ルでリダイレクト URL を構成する必要があります。	38 ページの『レポート内 の内部リンクの有効化』を 参照。
データ・ソース名を確認し て公開する。	このステップは、Cognos Connection でデフォルトのデー タ・ソース名を使用したかどうかによって異なります。	39 ページの『データ・ソ ース名の確認と公開』を参 照。
IBM Marketing Software で Cognos レポート・プ ロパティーを構成する。	IBM Marketing Software にログインし、Cognos レポー ト・プロパティーを設定します。	39 ページの『Marketing Platform での Cognos レ ポート・プロパティーの構 成』を参照。
レポート・フォルダー権限 を構成する。	ユーザーに IBM Marketing Software アプリケーション内 からレポートを実行する権限を付与するには、デフォルト の ReportsUser 役割を適切なユーザー・グループまたはユ ーザーに割り当てます。	40 ページの『レポート・ フォルダー権限の設定』を 参照。
eMessage のために、スト アード・プロシージャーを 実行およびスケジュールす る。	eMessage レポートでは、デルタ・リフレッシュ操作を実 行するストアード・プロシージャーによって設定される、 ステージング表に入れられたデータを使用します。プロシ ージャーのスケジューリングは、ご使用のデータベースに 応じて決まります。プロシージャーのスケジューリング は、IBM Campaign 環境および eMessage 環境や、ビジ ネス要件に精通したデータベース管理者が行う必要があり ます。 注:ストアード・プロシージャーを実行するまで、 eMessage レポートのデータは確認できません。	41 ページの『eMessage の場合のみ:ストアード・ プロシージャーをスケジュ ールして実行する方法』 を 参照してください。
Interact イベント・パター ン・レポート用のストアー ド・プロシージャー。	Interact イベント・パターン・レポートは、ステージン グ・テーブルに格納されているデータを使用します。この データは、ストアード・プロシージャーによって設定され ます。ストアード・プロシージャーは、デルタ・リフレッ シュ操作を実行します。 Interact ETL は、自動的にレポート・データの集計をトリ ガーするので、デルタ・リフレッシュを実行するデータベ ース・ジョブを構成する必要はありません。	49 ページの『Interact イ ベント・パターン・レポー ト用のストアード・プロシ ージャー』 を参照してくだ さい。
Interact イベント・パター ン・レポート用ストアー ド・プロシージャーを使用 可能にする。	Interact イベント・パターン・レポートでは、レポートの レンダリングを高速にするため、データの集計としてデル タ・リフレッシュ処理を使用します。	52 ページの『Interact イ ベント・パターン・レポー ト用ストアード・プロシー ジャーの使用可能化』 を参 照してください。
Interact イベント・パター ン・レポートにおける並列 実行の度合いを変更する。	Interact イベント・パターン・レポートの集計処理におい て並列実行の度合いを高めると、高速になり、パフォーマ ンスが改善されます。	54 ページの『Interact イ ベント・パターン・レポー トの並列実行の度合いの変 更』 を参照してください。

表 3. Cognos システムに IBM Marketing Software 統合コンポーネントおよびレポート・モデルをインストールする ためのロードマップ (続き)

ステップ	説明	詳細の参照先
認証を有効にせずに構成を テストする。	レポートをインストールして構成した後で、認証を有効に する前に、いくつかのレポートを実行してセットアップを テストします。	57 ページの『認証を有効 にする前の構成のテスト』 を参照。
IBM Marketing Software 認証を使用するように Cognos を構成する。	IBM Marketing Software Authentication Provider を使用 すると、Cognos アプリケーションは IBM Marketing Software 認証を使用して、スイート内のもう 1 つのアプ リケーションであるかのように Marketing Platform と通 信できるようになります。	58 ページの『IBM Marketing Software 認証を 使用するように IBM Cognos を構成する方法』 を参照。
認証を構成して構成をテス トする。	IBM Marketing Software 認証を使用するように Cognos を構成した後、システムを再びテストします。	63 ページの『認証が構成 された状態での構成のテス ト』を参照。

表 4. レポートをカスタマイズするためのロードマップ

ステップ	説明	詳細の参照先
カスタマイズ・ステップを	この時点で、レポートは適切に機能し、サンプル・レポー	76 ページの『レポート・
実行する。	トはデフォルトの状態にあります。 Campaign、Interact、	スキーマのカスタマイズ方
	または Marketing Operations のレポートやレポート・ス	法』を参照。
	キーマをカスタマイズしなければならない場合がありま	
	す。	

## インストーラーの機能

どの IBM Marketing Software 製品をインストールまたはアップグレードする場合 も、スイート・インストーラーおよび製品インストーラーを使用する必要がありま す。例えば をインストールする場合は、IBM Marketing Software スイート・イン ストーラーおよび IBM インストーラーを使用する必要があります。

IBM Marketing Software スイート・インストーラーおよび製品インストーラーを 使用する前に、以下のガイドラインを確認してください。

- スイート・インストーラーおよび製品インストーラーは、製品のインストール先のコンピューターの同じディレクトリーにある必要があります。ディレクトリー内にマスター・インストーラーと共に複数のバージョンの製品インストーラーがある場合、マスター・インストーラーは常に製品の最新バージョンを、インストール・ウィザードの IBM Marketing Software 製品画面に表示します。
- IBM Marketing Software 製品のインストール直後にパッチをインストールする 場合は、パッチのインストーラーがスイートおよび製品のインストーラーと同じ ディレクトリーにあるようにしてください。
- IBM Marketing Software インストールのデフォルトの最上位ディレクトリーは /IBM/IMS (UNIX) または C:¥IBM¥IMS (Windows) です。ただし、このディレク トリーはインストール時に変更できます。

### インストールのモード

IBM Marketing Software スイート・インストーラーは、GUI モード、コンソー ル・モード、またはサイレント・モード (無人モードとも呼ぶ) のいずれかのモード で実行できます。 をインストールする際は要件に見合ったモードを選択してくださ い。

アップグレードの場合は、初期インストール時に実行するタスクと同じ多くのタス クをインストーラーを使用して実行します。

#### **GUI** モード

グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して をインストールするには、 Windows の GUI モード、または UNIX の X Window System モードを使用し ます。

#### コンソール・モード

コマンド・ライン・ウィンドウを使用して をインストールするには、コンソール・ モードを使用します。

注: コンソール・モードでインストーラー画面を正しく表示するには、UTF-8 文字 エンコードをサポートするように端末ソフトウェアを構成してください。 ANSI な どその他の文字エンコードでは、テキストが正しくレンダリングされず、一部の情 報が読み取れなくなります。

#### サイレント・モード

を複数回インストールするには、サイレント・モード (無人モード) を使用します。 サイレント・モードは、インストールに応答ファイルを使用し、インストール・プ ロセスの間にユーザー入力を必要としません。

注: クラスター化された Web アプリケーションやクラスター化されたリスナー環境 では、サイレント・モードはアップグレード・インストールでサポートされていま せん。

#### インストール・ファイル

全 IBM Marketing Software 製品のインストール・ファイルは、製品のバージョン およびその製品をインストールする必要のあるオペレーティング・システム (UNIX を除く) に従って命名されています。UNIX の場合、X Window System モードと コンソール・モードでは、インストール・ファイルが異なります。

以下の表で、オペレーティング・システムごとのインストール・ファイルの命名規 則について説明します。

表 5. インストール・ファイル

オペレーティング・システム	インストール・ファイル
Windows: GUI およびコンソール・モード	製品に応じて、インストール・ファイルは
	<i>Product_N.N.N.N_</i> win64.exe または
	Product_N.N.N.N_win.exe (ここで、Product
	はご使用の製品の名前、N.N.N.N はその製品
	のバージョン番号) のようになります。
UNIX: X Window System モード	製品に応じて、インストール・ファイルは
	Product_N.N.N.N_solaris64.bin または
	<i>Product_N.N.N.</i> solaris.bin (ここで、
	Product はご使用の製品の名前、N.N.N.N は
	その製品のバージョン番号)のようになりま
	す。
UNIX: コンソール・モード	Product_N.N.N.N.bin。ここで、Product はご
	使用の製品の名前、N.N.N.N はその製品のバ
	ージョン番号です。すべての UNIX ベース
	のオペレーティング・システムで、このファ
	イルをインストールに使用できます。

## 第2章 IBM Marketing Software レポートのインストールの計 画

IBM Marketing Software レポートをインストールするには、システムのセットア ップおよび環境の構成を正しく行う必要があります。

前提条件を注意深く確認してください。 eMessage を使用する場合は、eMessage に固有の前提条件についても確認します。

## 前提条件

IBM Marketing Software 製品をインストールまたはアップグレードするには、その前に、ご使用のコンピューターがすべてのソフトウェアおよびハードウェアの前 提条件を満たしていることを確認する必要があります。

#### システム要件

システム要件について詳しくは、「Recommended Software Environments and Minimum System Requirements」ガイドを参照してください。

Opportunity Detect が DB2 データベースに接続するには、DB2 インストール済み 環境でクライアント・マシン上の /home/db2inst1/include ディレクトリー内にイ ンストール・ヘッダー・ファイルが含まれている必要があります。インストール済 み環境にヘッダー・ファイルを組み込むには、DB2 のインストール時に「カスタ ム・インストール (Custom Install)」オプションを選択し、「基本アプリケーショ ン開発ツール」機能を選択します。

#### **DB2** 要件

Opportunity Detect が DB2 データベースに接続するには、DB2 インストール済み 環境でクライアント・マシン上の home/db2inst1/include ディレクトリー内にイン ストール・ヘッダー・ファイルが含まれている必要があります。インストール済み 環境にヘッダー・ファイルを組み込むには、DB2 のインストール時に「カスタム・ インストール (Custom Install)」オプションを選択し、「基本アプリケーション開 発ツール」機能を選択します。

#### ネットワーク・ドメイン要件

スイートとしてインストールされる IBM Marketing Software 製品は同じネットワ ーク・ドメインにインストールする必要があります。これは、クロスサイト・スク リプティングで生じ得るセキュリティー・リスクを制限することを目的としたブラ ウザー制限に準拠するためです。

#### JVM 要件

スイート内の IBM Marketing Software アプリケーションは、専用の Java<sup>™</sup> 仮想 マシン (JVM) に配置しなければなりません。IBM Marketing Software 製品は、 Web アプリケーション・サーバーによって使用される JVM をカスタマイズしま す。JVM に関連するエラーが発生する場合、IBM Marketing Software 製品専用の Oracle WebLogic または WebSphere<sup>®</sup>ドメインを作成する必要があります。

#### 知識要件

IBM Marketing Software 製品をインストールするには、製品をインストールする 環境全般に関する知識が必要です。この知識には、オペレーティング・システム、 データベース、および Web アプリケーション・サーバーに関する知識が含まれま す。

#### インターネット・ブラウザー設定

ご使用のインターネット・ブラウザーが、以下の設定に準拠していることを確認してください。

- ブラウザーで Web ページをキャッシュしない。
- ブラウザーはポップアップ・ウィンドウをブロックしてはなりません。

#### アクセス権限

インストール作業を完了するため、以下のネットワーク権限を保持していることを 確認してください。

- 必要なすべてのデータベースに対する管理権限。
- Web アプリケーション・サーバーおよび IBM Marketing Software コンポーネ ントを実行するために使用するオペレーティング・システム・アカウントの関連 ディレクトリーおよびサブディレクトリーに対する読み取りおよび書き込みアク セス権限
- 編集する必要があるすべてのファイルに対する書き込み権限
- インストール・ディレクトリーやバックアップ・ディレクトリー (アップグレードを行う場合)など、ファイルを保存する必要があるすべてのディレクトリーに対する書き込み権限
- インストーラーを実行するための適切な読み取り、書き込み、および実行権限

Web アプリケーション・サーバーの管理パスワードを保持していることを確認して ください。

UNIX の場合、IBM 製品のすべてのインストーラー・ファイルはフル権限 (例えば、rwxr-xr-x) が必要です。

#### JAVA\_HOME 環境変数

IBM Marketing Software 製品をインストールするコンピューターに JAVA\_HOME 環 境変数が定義されている場合、サポートされる JRE のバージョンがこの変数で指定 されていることを確認してください。システム要件について詳しくは、「IBM Marketing SoftwareRecommended Software Environments and Minimum System Requirements」ガイドを参照してください。

JAVA\_HOME 環境変数が正しくない JRE を指している場合、IBM Marketing Software インストーラーを実行する前に、その JAVA\_HOME 変数をクリアする必要 があります。 以下のいずれかの方法により、JAVA\_HOME 環境変数をクリアできます。

- Windows: コマンド・ウィンドウで、set JAVA\_HOME= (空のままにする) と入力 して、Enter キーを押します。
- UNIX: 端末で、export JAVA\_HOME= (空のままにする) と入力して、Enter キー を押します。

IBM Marketing Software インストーラーは、IBM Marketing Software インスト ール環境の最上位ディレクトリーに JRE をインストールします。個々の IBM Marketing Software アプリケーションのインストーラーは、JRE をインストールし ません。その代わりに、IBM Marketing Software インストーラーによってインス トールされた JRE の場所を指定します。 すべてのインストールが完了した後に環 境変数を再設定することができます。

サポートされる JRE について詳しくは、「*IBM Marketing Software* 推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」ガイドを参照してください。

## eMessage レポートの前提条件

eMessage レポートを使用する場合、レポートをインストールするためのシステム要 件に加えて、特定の前提条件に準拠する必要があります。

パフォーマンスを向上させるには、一時テーブル・スペースとしてデータ・サイズ の 40% が必要になります。データベース管理者と協力し、定期的にデータベース を微調整してください。最良の結果を得るため、別個の非共有ディスクにマウント された別個のテーブル・スペースに、eMessage システム・テーブルを保管すること ができます。

#### IBM DB2<sup>®</sup>の設定

IBM DB2 を使用する場合は、バージョン 9.7.8 以上を使用する必要があります。

重要: eMessage レポートの適用を開始する前に、以下の値を設定する必要があります。

db2set DB2 COMPATIBILITY VECTOR=ORA

#### **DB2** のサイズ例

大部分のデータ設定がレポート・テーブル (UCC\_\*) に行われる、約 600 GB の IBM DB2 Campaign データベースの場合、以下の設定を使用できます。

- テーブル・スペース・ページ・サイズ: 16K
- 一時テーブル・スペース: 250 GB
- db2 update db cfg using auto\_reval DEFERRED\_FORCE;
- db2 update db cfg using decflt\_rounding ROUND\_HALF\_UP;
- db2 update db config using LOGFILSIZ 102400;
- db2 update db config using logprimary 13;
- db2 update db config using LOGSECOND 25;
- db2stop force
- db2start

重要:トランザクション・ログのサイズは、レポート処理に影響を与える場合があり ます。データベース管理者と共に、データベース環境要件、特にトランザクショ ン・ログのサイズについて検討してください。

#### **Oracle** 用の設定

Oracle を使用する場合、バージョン 11g 以上を使用する必要があります。データ ベース管理者と共に、環境要件を検討してください。

#### Oracle のサイズ例

大部分のデータ設定がレポート・テーブル (UCC\_\*) に行われる、約 650 GB の Oracle Campaign データベースの場合、以下の設定を使用できます。

- 一時テーブル・スペース: 250 GB
- REDO ログのサイズ: 2 GB
- REDO ログの数:4

#### Microsoft SQL Server の設定

Microsoft SQL を使用する場合は、SQL Server 2008 以上を使用する必要があり須 磨。データベース管理者と共に、環境要件を検討してください。

Microsoft SQL Server のサイズ例

大部分のデータ設定がレポート・テーブル (UCC\_\*) に行われる、約 520 GB の Microsoft SQL Server データベースの場合、以下の設定を使用できます。

• 一時テーブル・スペース: 250 GB

#### **Internet Explorer** 用の設定

Internet Explorer を使用する場合は、ブラウザーのセキュリティー設定で、ファイ ルのダウンロードの自動プロンプトが許可されていることを確認してください。以 下のステップを実行して、ブラウザーでファイルのダウンロードの自動プロンプト が許可されていることを確認します。

- 1. Internet Explorer を開いて、「ツール」 > 「インターネット オプション」に 移動します。
- 2. 「セキュリティー」タブで、「レベルのカスタマイズ」をクリックします。
- 3. 「ダウンロード」セクションまでスクロールダウンします。
- 「ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示」オプションが「有効 にする」に設定されていることを確認します。

## 第3章 レポート・コンポーネントのインストール

ご使用の製品に IBM Marketing Software レポートをインストールするには、レポ ート・コンポーネントをインストールする必要があります。

レポート・コンポーネントには、以下のアイテムが含まれています。

- IBM Marketing Software 統合コンポーネント
- IBM Cognos システムのレポート・モデル
- レポート・スキーマ

## ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除

「役割の編集」ウィンドウは、ユーザーに役割を割り当てたり、ユーザーから役割 を削除したりするために使用します。

#### 手順

以下のタスクを実行して、ユーザーに役割を割り当てる、またはユーザーから役割 を削除します。

- 1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
- 2. 作業対象のユーザー・アカウントの名前をクリックします。
- 3. 「役割の編集」をクリックします。

ユーザーに割り当てられていない役割が、左側の「選択可能な役割」ボックスに 表示されます。ユーザーに現在割り当てられている役割が、右側の「選択した役 割」ボックスに表示されます。

- 4. 「選択可能な役割」ボックスで役割を選択します。以下のいずれかのタスクを実行します。
  - ユーザーに役割を割り当てる場合は、「選択可能な役割」ボックスで役割を 選択して、「追加」をクリックします。
  - ユーザーから役割を削除する場合は、「選択した役割」ボックスで役割を選 択して、「削除」をクリックします。
- 5. 「変更の保存」をクリックしてから、「OK」をクリックします。

#### ReportsSystem 役割を持つユーザーの構成

ReportsSystem 役割を持つユーザーを構成する必要があります。この役割は、レポ ート・プロパティーを構成する場合、およびレポート・スキーマの作成に使用され る SQL スクリプトを生成する場合に使用されます。

#### このタスクについて

ReportsSystem 役割を持つユーザーは、「構成」ページおよび「レポート SQL ジ ェネレーター」ページにアクセスできます。 IBM Marketing Software の「設定」 > 「構成」ページ、および「設定」 > 「レポート SQL ジェネレーター」ページに 対するアクセス権限を持つユーザーを構成する必要があります。こうすることで、 このユーザーとしてログインして、レポート・プロパティーを構成したり、レポー ト・スキーマの作成に使用される SQL スクリプトを生成したりすることができる ようになります。

ReportsSystem 役割を持つユーザーを構成するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. ユーザーを作成します。

注: platform\_admin ユーザーを使用することもできます。

- 2. 「ユーザーの役割と権限」 > 「レポート」 > 「**Partition***N*」に移動して、その ユーザーに ReportsSystem 役割を割り当てます。
- 3. ユーザーが「設定」 > 「構成」ページおよび「設定」 > 「レポート SQL ジ ェネレーター」ページに対するアクセス権限を保持していることを確認します。

## IBM Marketing Software システムへのレポート・スキーマのインストール

IBM Marketing Software スイート・マスター・インストーラーおよびレポート・ パッケージ・インストーラーを使用して、Marketing Platform がインストールされ ているコンピューターにレポート・スキーマをインストールします。

#### このタスクについて

レポート・スキーマをインストールするには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 「Reports Pack 製品 コンポーネント (Reports Pack *Product* Components)」 ウィンドウで、「レポート・スキーマ」を選択します。
- 「スキーマ・タイプ選択」ウィンドウに複数のオプションが表示される場合、それは IBM アプリケーションにカスタム属性がプリパッケージされていることを 意味します。カスタム属性の有無に応じて、以下のいずれかの手順を実行します。
  - カスタム属性を含むレポート・スキーマをインストールするには、「カスタム」を選択します。 Campaign のサンプル・レポートは、カスタム属性を使用するように構成されています。Campaign レポート・パッケージをインストールする場合、サンプル・レポートが正しく機能するためには、「カスタム」を選択する必要があります。
  - カスタム属性を含まないレポート・スキーマ (eMessage を除く) をインスト ールするには、「基本」を選択します。 eMessage では、常に「カスタム」 を選択してください。

インストーラーはレポート・スキーマをファイル・システムに配置し、スキーマ を Marketing Platform に登録します。

3. 以下の手順を実行して、レポート・スキーマが Marketing Platform に登録され ていることを検証します。

- a. IBM Marketing Software スイートに platform\_admin ユーザーとしてログ インします。
- b. 「選択」>「構成」と移動します。
- c. 「レポート」>「スキーマ」>「<製品名>」を展開します。

アプリケーションのスキーマ構成プロパティーが表示されたら、インストール完 了です。

アプリケーションのスキーマ構成プロパティーが表示されない場合は、レポート・パッケージが登録されていません。この場合は、手動でレポート・パッケージを登録する必要があります。次のステップに進んでください。

- 4. オプション:以下の手順を実行して、構成プロパティーを手動で登録します。
  - a. レポート・パッケージ・インストール済み環境の tools ディレクトリー で、import\_all スクリプトを開きます。
  - b. MANAGER\_TOOLS\_BIN\_DIR 変数の値を、Marketing Platform インストール済 み環境の tools/bin ディレクトリーに設定します。
  - c. import\_all.bat (Windows の場合) または import\_all.sh (Unix の場合) を実行します。

このスクリプトによって、Marketing Platform **configTool** ユーティリティ ーが開始され、スキーマが登録されます。

d. スキーマ構成プロパティーが存在することを確認します。

#### JDBC データ・ソースの作成

レポートを使用可能にする IBM Marketing Software アプリケーションごとに、 JDBC データ・ソースを構成する必要があります。

#### このタスクについて

IBM Marketing Software レポート SQL ジェネレーター・ツールは、レポート・ テーブルを作成する SQL スクリプトを生成するために、IBM Marketing Software アプリケーション・データベースに接続できなければなりません。レポート SQL ジェネレーターは、アプリケーション・データベースにアクセスすることなくビュ ーや具体化されたビューを作成する SQL スクリプトを生成することができます。 しかし、SQL ジェネレーターはデータ・ソース接続をせずに SQL コードを検証す ることはできません。

このタスクに関してさらにヘルプが必要な場合は、アプリケーションの資料を参照 してください。

JDBC データ・ソースを作成するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

JDBC データ・ソースを構成するときは、次の表にリストされているデフォルトの JNDI 名を使用してください。 注: デフォルトの JNDI 名を使用しない場合は、使用する名前を書き留めておいて ください。 SQL ジェネレーター・ツールを実行するときには、データ・ソースの 正しい名前を指定する必要があります。

表 6. デフォルトの JNDI 名

IBM アプリケーション	デフォルトの JNDI 名
Campaign	campaignPartition1DS
	パーティションが複数存在する場合は、パーティションごと にデータ・ソースを作成します。
Interact	• 設計時データベース用: campaignPartition1DS
	• ランタイム・データベース用: InteractRTDS
	• 学習テーブル用: InteractLearningDS

## 第4章 IBM Cognos BI のインストールおよびテスト

IBM Cognos BI インストール・ファイルをダウンロードするためには、IBM との 使用許諾契約書で IBM Cognos BI ライセンスが付与されていなければなりませ ん。 IBM Cognos BI はアプリケーション、サーバー、サービスの集合であり、多 階層アーキテクチャーで編成されています。

#### **IBM Cognos BI** アプリケーション

IBM Cognos BI を IBM Marketing Software スイートと一緒に使用する際、以下 の Cognos BI アプリケーションのサブセットを使用します。

- IBM Cognos BI サーバーは、レポート、フォルダー、照会、メタデータ・モデ ル、および Content Manager 用のストレージを提供します。
- IBM Cognos Connection は、レポートのインポート、構成、スケジュールに使用する Web アプリケーションです。このアプリケーションでは、以下のコンポーネントにアクセスすることもできます。
  - Cognos Viewer は、IBM Marketing Software アプリケーションでレポート を表示します。
  - Report Authoring を使用することにより、レポートのカスタマイズおよび作 成が可能です。
  - Cognos Administration を使用して、データ・ソースを構成できます。
- IBM Cognos Framework Manager はメタデータ・モデリング・ツールであり、 IBM Marketing Software アプリケーションの IBM Cognos BI レポートをサポ ートする Cognos データ・モデルの構成とカスタマイズに使用します。
- IBM Cognos Configuration は、個々の Cognos BI コンポーネントの構成に使用する構成ツールです。

## IBM Cognos BI のインストール・オプション

IBM Cognos BI アプリケーションは、分散環境にインストールすることも、1 つの コンピューターにインストールすることもできます。

IBM Cognos BI をインストールする前に、「*IBM Cognos BI* アーキテクチャーお よび実装ガイド」で、推奨されるコンポーネント、インストール・オプション、お よび構成アプローチについて確認してください。

この IBM Cognos 資料では、分散環境と単一コンピューターの 2 つのカテゴリー でインストールを説明しています。最良の結果を得るために、PoC (概念検証) 用か デモンストレーション環境用でない限り、1 台のコンピューターに全コンポーネン トをインストールしないでください。

IBM レポートが使用する IBM Cognos BI アプリケーションのサブセットをインス トールするためには、2 つの IBM Cognos インストーラーを使用する必要がありま す。1 つのインストーラーは IBM Cognos BI サーバー、Content Manager、Cognos Configuration、および Web ベースのユーザー・インターフェ

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

ースをインストールするためのものです。別のインストーラーは、メタデータ・モ デリング・ツールである Framework Manager をインストールするために使用しま す。このツールは Windows コンピューターにインストールする必要があるためで す。

インストールについて詳しくは、Cognos の資料を参照してください。

## IBM Cognos BI Web アプリケーションと Web サーバー

Cognos Connection および IBM Cognos BI Web アプリケーションをホストする には、Microsoft Internet Information Services (IIS) かまたは Apache HTTP Web サーバーを使用します。

IBM は、Cognos Connection および他の IBM Cognos BI Web アプリケーション をホストする Web サーバーを提供していません。Windows の場合、IBM Cognos の資料は Microsoft IIS を使用することを想定した記述になっていますが、Apache HTTP を使用することもできます。

Apache HTTP Server を使用する場合は、Apache httpd.conf ファイルの VirtualHost 構成ディレクティブで Cognos Web アプリケーションの Web 別名 を正しくセットアップしてください。最も固有性の高い別名 (スクリプト別名) を最 初にリストし、別名ごとにディレクトリー権限を設定します。

#### httpd.conf コード・スニペットの例

次の例は、Windows システム上の Apache インストール済み環境のものです。 Apache サーバーは、デフォルト・ポート 80 で稼働しています。

```
<VirtualHost *:80>
ScriptAlias /ibmcognos/cgi-bin "C:/cognos/cgi-bin"
<Directory "C:/cognos/cgi-bin">
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
Alias /ibmcognos "C:/cognos/webcontent"
<Directory "C:/cognos/webcontent">
Order allow,deny
Aliow from all
</Directory>
</VirtualHost>
```

注: httpd.conf ファイル・スニペットは、例の目的としてのみ提供されています。 ご使用のシステムに応じて Web 別名を構成してください。

## IBM Cognos BI とロケール

ローカライズ・バージョン (英語以外) の IBM Marketing Software アプリケーシ ョンのレポート・パッケージをインストールするには、アプリケーション・レポー ト・パッケージの言語に合わせて製品の言語を設定します。

Cognos Content Manager を実行するシステムで、IBM Cognos Configuration を 開き、「操作」>「グローバル設定を編集」を選択して、IBM Cognos BI システム のロケールを構成します。詳しくは、「*IBM Cognos Configuration* ユーザー・ガイ ド」を参照してください。この資料は、Configuration Manager の「ヘルプ」メニ ューから利用できます。

特定のユーザーに対して製品の言語を変更するには、アプリケーション・レポー ト・パッケージの言語に合わせて製品の言語を設定します。製品の言語を設定する には、Cognos Connection を開き、「ユーザー設定」で、対応する製品の言語を設 定します。コンテンツの言語は変更しないでください。コンテンツの言語を変更す る場合は、対応するレポートの XPath も変更する必要があります。

# 第5章 IBM Marketing Software と Cognos の統合ロードマップ

IBM Cognos をインストールした後、IBM Marketing Software スイートを IBM Cognos と統合する必要があります。

以下のリストは、IBM Cognos を IBM Marketing Software アプリケーションと統 合する方法の概要を示しています。

- 1. IBM Cognos データ・ソースを作成します。
- 2. IBM Cognos アプリケーション・ファイアウォールを構成します。
- 3. ストアード・プロシージャーを構成します。
- 4. ビューまたは具体化されたビューを作成します。
- 5. レポート・テーブルを作成し、データを設定します。
- 6. Marketing Platform で Cognos レポート・プロパティーを構成します。
- 7. IBM Marketing Software 認証を使用するように IBM Cognos を構成し、テストします。

注: 統合する IBM Marketing Software アプリケーションに応じて、実行する必要 がある作業が異なります。

## Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手

Cognos が Marketing Platform システム・テーブルからユーザー情報を取得でき るようにするため、Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバ ーを入手する必要があります。 Cognos は、IBM Marketing Software の認証のた めにユーザー情報を必要とします。

このタスクについて

JDBC ドライバーを入手するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- IBM Marketing Software システムをセットアップしたときに Marketing Platform システム・テーブルの JDBC データ・ソースを構成するために使用し た JDBC ドライバーおよび必要な関連ファイルを入手します。
- 2. 後で IBM Marketing Software 認証を使用できるように Cognos を構成しま す。
- Cognos Content Manager がインストールされているコンピューターの、 Cognos インストール済み環境にある webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥1ib ディレク トリーに、JDBC ドライバーをコピーします。

重要: JDBC ドライバーが webapps¥p2pd¥WEB-INF¥1ib ディレクトリーに存在す る場合、それを webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥1ib ディレクトリーにコピーする必 要はありません。

## IBM Cognos システムへのレポート・モデルと統合コンポーネントのイン ストール

IBM Cognos システムに、レポート・モデルおよび統合コンポーネントをインスト ールする必要があります。Cognos のインストール環境が分散環境の中にある場合 は、Cognos をインストールしたサーバーにレポート・パッケージをインストール する必要があります。

#### 始める前に

重要: IBM DB2 に eMessage レポート・パックをインストールする場合、 eMessage レポートの適用を開始する前に、以下の値を設定していることを確認して ください。

db2set DB2\_COMPATIBILITY\_VECTOR=ORA

#### このタスクについて

レポート・パックをインストールするには、以下の手順を実行します。

#### 手順

- Cognos Content Manager がインストールされているサーバーで、単一のディ レクトリーに以下の IBM Marketing Software インストーラーを配置します。
  - IBM Marketing Software マスター・インストーラー
  - Marketing Platform
  - レポート・パック・インストーラーまたはレポート作成機能を実装する製品のインストーラー
- 2. IBM Marketing Software マスター・インストーラーを実行します。インストー ルする Marketing Platform、およびレポート・パッケージを選択します。
- プロンプトに従い、Marketing Platform システム・テーブル・データベースの 接続情報を入力します。 Marketing Platform インストーラーが起動し、「プラ ットフォーム・インストール・コンポーネント (Platform Installation Components)」ウィンドウが表示されます。
- 「Reports for IBM Cognos 10 BI」オプションを選択し、その他のオプション は選択を外します。 JDBC ドライバーのパスを入力するためのプロンプトが、 Marketing Platform インストーラーにより表示されます。
- Cognos システムにコピーした JDBC ドライバーの完全修飾パスを入力します。 IBM Cognos のインストール場所を入力するためのプロンプトが、 Marketing Platform インストーラーにより表示されます。
- 6. IBM Cognos インストール環境の最上位ディレクトリーを入力または参照しま す。

このフィールドで提供されるデフォルト値は、ご使用の IBM Cognos システム の実際のファイル構造に基づかない静的な値です。 レポート・パック・インス トーラーにより、インストール・オプションが表示されます。

7. インストール・オプションの「製品 Reports Package」を選択し、レポート・ スキーマのオプションの選択を外します。 このオプションは、レポート・アーカイブを Cognos コンピューターにコピー します。後ほど、このアーカイブをインポートする必要があります。

# **IBM Marketing Software** アプリケーション・データベース用の **IBM** Cognos データ・ソースの作成

IBM Cognos アプリケーションには、IBM Marketing Software アプリケーショ ン・レポート用のデータのソースを識別する独自のデータ・ソースが必要です。

このタスクについて

IBM Marketing Software レポート・パッケージで提供される IBM Cognos デー タ・モデルは、以下の表に示されるデータ・ソース名を使用するように構成されて います。

表 7. Cognos データ・ソース

<b>IBM Marketing Software</b> ア	
プリケーション	Cognos データ・ソース名
Campaign	CampaignDS
eMessage	eMessageTrackDS
Interact	• 設計時データベース用: InteractDTDS
	• ランタイム・データベース用: InteractRTDS
	• 学習データベース用: InteractLearningDS
	• ETL データベース用: InteractETLDS
Marketing Operations	MarketingOperationsDS
Distributed Marketing	• Distributed Marketing データベース用: CollaborateDS
	• 顧客データベース用: CustomerDS
	• Campaign データベース用: CampaignDS

Cognos データ・ソースの構成について詳しくは、「*IBM Cognos* 管理およびセキュ リティー・ガイド」および Cognos オンライン・ヘルプを参照してください。

IBM アプリケーション・データベースに対応する Cognos データ・ソースを作成す るには、以下のガイドラインを使用してください。

#### 手順

- Cognos Connection の「管理」セクションを使用します。
- Cognos データ・ソース・テーブルで示されるデフォルトのデータ・ソース名を 使用して、データ・モデルを変更しなくても済むようにします。
- 選択するデータベース・タイプは、IBM アプリケーション・データベースのデー タベース・タイプと一致していなければなりません。 Cognos の資料を参考に、 データベース固有のフィールドにどのように入力するかを判断してください。

注: Campaign および eMessage の場合、適切なデータベースは Campaign です。

- Cognos Content Store ではなく、必ず IBM Marketing Software アプリケーション・データベースを指定してください。
- 「サインオン」セクションを構成する際に、「パスワード」オプションと「'すべてのユーザー'グループで使用できるサインオンを作成」オプションを選択します。
- 「サインオン」セクションで、IBM Marketing Software アプリケーション・データベース・ユーザーのユーザー資格情報を指定します。
- Cognos データ・ソース・テーブルを調べ、構成するレポートのデータ・モデル が必要とするすべてのデータ・ソースを作成してください。 例えば、Interact 用 のレポート・データは 3 つのデータベースにあるので、データベースごとに別 々の Cognos データ・ソースを作成する必要があります。
- Campaign システムに複数のパーティションがある場合は、パーティションごと に別々のデータ・ソースを作成します。 例えば、Campaign および eMessage が複数パーティション用に構成されている場合、パーティションごとに別々の Campaign および eMessage データ・ソースを作成します。
- 「テスト接続」機能を使用して、各データ・ソースが正しく構成されていること を確認します。

## オプション: E メール通知のセットアップ

IBM Marketing Software レポートを E メールの添付ファイルとして送信するよう に IBM Cognos を構成できます。このタスクはオプションです。

#### 始める前に

E メール通知をセットアップするには、その前に、以下の情報を入手してください。

- SMTP サーバーのホスト名または IP アドレス
- そのサーバーのアカウントのユーザー名およびパスワード
- デフォルトの送信者の E メールの E メール・アドレス

#### このタスクについて

IBM Cognos レポートが IBM Marketing Software インターフェースに表示される 場合、ウィンドウの Cognos Viewer ツールバーには、レポートを E メール内の添 付ファイルとして送信するオプションが表示されます。

E メール通知をセットアップするには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 「Cognos Configuration」ウィンドウで、「データ・アクセス」 > 「通知」を 選択します。
- 次のいずれかのフォーマットを使用して、SMTP メール・サーバーのホスト名 または IP アドレスとポートを指定します。
  - hostname:port
  - IPAddress:port

例えば、serverX:25 か、または 192.168.1.101:25 を入力します。通常、デフ オルトの SMTP ポートは 25 です。

- アカウントのユーザー名とパスワードを設定するには、「値」列をクリックし、 鉛筆アイコンをクリックして「値」ダイアログ・ボックスを開きます。
- 4. user@company.com フォーマットを使用して、デフォルト送信者を指定します。

## IBM Cognos Application Firewall for IBM Marketing Software の構成

IBM Cognos Application Firewall は、IBM Cognos サーバーで要求が処理される 前に、その要求を分析し、検証します。

このタスクについて

IBM Cognos Application Firewall for IBM Marketing Software を構成するに は、IBM Marketing Software システムを有効なドメインまたはホストとして指定 する必要があります。

IBM Cognos Application Firewall for IBM Marketing Software を構成するに は、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 「Cognos Configuration」ウィンドウで、「セキュリティー」 > 「IBM Cognos Application Firewall」と選択します。
- 「有効なドメインまたはホスト」プロパティー・ウィンドウに、Marketing Platform が稼働しているコンピューターの完全修飾コンピューター・ホスト名 (ドメインおよびポートを含む)を入力します。 以下に例を示します。

serverXYZ.mycompany.com:7001

重要: 分散環境では、Cognos レポートを提供する IBM Marketing Software アプリケーション (Marketing Platform、Campaign、Marketing Operations な ど) がインストールされているコンピューターごとに、このステップを実行する 必要があります。

- 3. 構成を保存します。
- 4. IBM Cognos サービスを再始動します。

## eMessage の場合のみ: デルタ処理のためのストアード・プロシージャー

IBM eMessage レポートには、eMessage システム・テーブルに関連付けられたス テージング・テーブルが必要です。システム・テーブルは、Campaign スキーマの 一部です。 eMessage レポートで使用するメッセージ応答データを処理するための ストアード・プロシージャーを、定期的に実行する必要があります。

スキーマの変更について詳しくは、「IBM eMessage System Tables and Data Dictionary」を参照してください。

eMessage ストアード・プロシージャーの初回セットアップは、以下のデータベー ス・スクリプトに依存しています。

• acer\_indexes\_DB 名.sql

- acer\_tables\_DB 名.sql
- acer\_scripts\_DB 名.sql

Oracle、IBM DB2、および Microsoft SQL Server データベースの場合、データベ ース・スクリプトは *Campaign\_reportspack\_home*¥cognos10¥emessage-dd1 ディレク トリー内にあります。

このスクリプトで、索引、テーブル、ビュー、およびストアード・プロシージャー がセットアップされます。ストアード・プロシージャーは、ステージング・テーブ ルにデータを設定するためにメッセージ・データをリフレッシュします。バッチ・ プロシージャーを定期的に実行して、ステージング・テーブルにデータを設定する 必要があります。このストアード・プロシージャーを実行する操作を、デルタ処理 といいます。

eMessage ストアード・プロシージャーの初回の実行は、テーブルに入れられている データの量によっては、完了までに長時間を要する可能性があります。後続のデル タ処理も、完了までに長時間を要する可能性があります。ストアード・プロシージ ャーによって処理されるメール配信インスタンス (コンテナー)の数を制限すること により、処理時間を大幅に削減することができます。

デフォルトでは、データは過去 90 日間について処理されます。ただし、eMessage 用の SQL スクリプトを実行する前または後に、デフォルト値を変更できます。

#### **Oracle** の場合の例

Oracle データベースを対象とした次の例は、処理を過去 30 日のみに制限するため に acer\_tables スクリプトに加えることができる変更を示しています。

注: この変更には、UARE MAILING MASTER ビューの変更も含まれます。

現行ビューの定義

CREATE VIEW UARE\_MAILING\_MASTER AS ( (SELECT UCC\_CONTAINER.CAMPAIGNID,UCC\_CONTAINER.CONTAINERID, substr(UCC\_CONTAINERATTR.STRINGVALUE,1,100) AS CAMPAIGN\_NAME, UCC\_CONTAINER.CONTAINERNAME AS MAILING\_INST, UCC\_CONTAINER.CREATED AS MAILING\_CREATED, UCC\_CONTAINER.CONTAINERTYPEID CONTAINERTYPEID, UCC\_CONTAINER.CONTCHANNELTYPEID CONTCHANNELTYPEID FROM UCC\_CONTAINER,UCC\_CONTAINERATTR WHERE UCC\_CONTAINERATTR.CONTAINERID=UCC\_CONTAINER.CONTAINERID AND UCC\_CONTAINERATTR.ATTRIBUTENAME='CampaignName' AND UCC\_CONTAINER.CREATED >= sysdate - 91 )

変更後のビューの定義

CREATE VIEW UARE\_MAILING\_MASTER AS ( SELECT UCC\_CONTAINER.CAMPAIGNID, UCC\_CONTAINER.CONTAINERID, substr(UCC\_CONTAINERATTR.STRINGVALUE,1,100) AS CAMPAIGN\_NAME, UCC\_CONTAINER.CONTAINERNAME AS MAILING\_INST, UCC\_CONTAINER.CREATED AS MAILING\_CREATED FROM UCC\_CONTAINER,UCC\_CONTAINERATTR WHERE UCC\_CONTAINERATTR.CONTAINERID=UCC\_CONTAINER.CONTAINERID AND UCC\_CONTAINERATTR.ATTRIBUTENAME='CampaignName' AND UCC\_CONTAINER.CREATED >= sysdate - 30 )

使用可能なレポート・データをすべて表示するには、UARE\_MAILING\_MASTER ビュー を変更してビューから日付フィルターを削除します。次に、Oracle または DB2 の 具体化されたビューをすべてリフレッシュします。例えば、上記のビュー作成のサ ンプルの場合は、次の行を削除します。

UCC\_CONTAINER.CREATED >= sysdate - 30

## eMessage の場合のみ:ストアード・プロシージャー、ステージン グ表および索引の作成

レポート・テンプレートをインストールまたはアップグレードした後、eMessage レ ポートを生成する前に特定の SQL スクリプトを実行する必要があります。この SQL スクリプトはストアード・プロシージャーとステージング・テーブルを作成し ます。

このタスクについて

*Campaign\_reportspack\_home*¥cognos10¥emessage-ddl ディレクトリーは、IBM Cognos Content Manager のホスト・サーバー上にあります。このディレクトリー には、Oracle、IBM DB2、および Microsoft SQL Server 用の以下のデータベー ス・スクリプトが含まれています。

- acer\_indexes\_DB 名.sql
- acer\_tables\_DB 名.sql
- acer\_scripts\_DB 名.sql

Campaign データベースに対し、以下のスクリプトをこの順序で実行します。

#### 手順

1. acer\_indexes\_DB 名.sql

スクリプトが完了するまでに十分な時間がかけられることを確認してください。 所要時間は、eMessage システム・テーブルに保管されているデータ量に応じて 異なります。

2. acer\_tables\_DB 名.sql

このスクリプトは、eMessage システム・スキーマにデルタ処理ステージング表 を作成します。

3. acer\_scripts\_DB 名.sql

重要: DB2 データベースの場合は、終了文字を; (セミコロン) から! (感嘆符) に変更してください。

このスクリプトは、eMessage にレポートをインストールした後で構成する必要 があるストアード・プロシージャーを作成します。

#### 次のタスク

注: このストアード・プロシージャーを定期的に実行されるように構成して、ステー ジング・テーブルにデータを設定する必要があります。 eMessage レポート用のス トアード・プロシージャーを実行するまで、レポートのデータは確認できません。

ストアード・プロシージャーの実行とスケジューリングについて詳しくは、 41 ペ ージの『eMessage の場合のみ: ストアード・プロシージャーをスケジュールして実 行する方法』を参照してください。

## レポート SQL ジェネレーターのテンプレートのロード

レポート・スキーマを使用する IBM Marketing Software レポート・パッケージに は、テンプレート SQL select ステートメントを uar\_common\_sql テーブルにロー ドする SQL スクリプトが含まれます。レポート SQL ジェネレーターは、レポー ト・ビューまたはレポート・テーブルを作成する SQL スクリプトを生成する際 に、これらのテンプレートを使用します。

#### このタスクについて

テンプレートをロードするスクリプトを実行するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. レポート・パック・インストール済み環境の下の schema ディレクトリーを参照 し、templates\_sql\_load.sql スクリプトを見つけます。
- この templates\_sql\_load.sql スクリプトを Marketing Platform データベース で実行します。

## ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成

レポートを生成するときは、レポート・ビューまたはレポート・テーブルからレポ ート可能データを抽出します。ビューまたはテーブルの作成スクリプトを使用し て、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成することができます。レポ ート SQL ジェネレーターを使用して、ビューまたはテーブルの作成スクリプトを 作成します。

#### このタスクについて

注: eMessage レポートの場合は、Campaign データベースに対して SQL スクリプ トを実行して、ステージング表とバッチ・プロシージャーを作成しておく必要があ ります。詳しくは、 27 ページの『eMessage の場合のみ: ストアード・プロシージ ャー、ステージング表および索引の作成』を参照してください。

ビューまたはテーブルの作成スクリプトを作成するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. ReportsSystem 役割を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログ インします。 JDBC データ・ソースにデフォルトの JNDI 名を使用した場合は、ステップ 3 に進んでください。

- 2. JDBC データ・ソースにデフォルトの JNDI 名を使用しなかった場合は、ステ ップ a および b を実行してください。
  - a. 「設定」 > 「構成」 > 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「製品名」を選 択します。
  - b. JNDI プロパティーのデフォルト値を、JDBC 接続で使用した JNDI 名に 一致するように変更します。

重要: JNDI データ・ソース名が正しくない、または構成されていない場合、 SQL ジェネレーターは、テーブルを作成する SQL スクリプトを検証できません。

- 3. 「設定」 > 「レポート SQL ジェネレーター」 を選択します。
- 4. 「製品」フィールドで、適切な IBM Marketing Software アプリケーションを 選択します。
- 5. 「スキーマ」フィールドで1つ以上のレポート・スキーマを選択します。
- 6. 「データベース・タイプ」を選択します。
- 7. 「生成タイプ」フィールドで、データベース・タイプに合ったオプションを選 択します。
  - データベース・タイプが Microsoft SQL Server の場合は、具体化されたビューは選択できません。
  - eMessage の場合のみ:
    - Oracle および IBM DB2 の場合、eMessage には具体化されたビューが 必要です。
    - SQL Server の場合、eMessage にはビューが必要です。

eMessage のビューまたは具体化されたビューの作成について詳しくは、 32 ページの『Campaign および eMessage の場合のみ: ビューまたは具体 化されたビューの作成』を参照してください。

- 8. 「Drop 文を生成しますか?」を「いいえ」に設定しておきます。
- 生成された SQL スクリプトを調べるには、「生成」をクリックします。 SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ブラウザー・ウィンドウにそのスク リプトが表示されます。
- 10. 「ダウンロード」をクリックします。

SQL ジェネレーターによってスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所 を尋ねるプロンプトが出されます。単一のレポート・スキーマを選択した場 合、スクリプト名はスキーマの名前と一致します (例えば、 eMessage\_Mailing\_Performance.sql)。複数のレポート・スキーマを選択する と、スクリプト名には製品名 (例: Campaign.sql) が使用されます。

注: DB2 データベースで具体化されたビューを作成するスクリプトを実行する と、次のエラーが表示される場合があります。

SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するために使用できません。

この場合でも、具体化されたビューは正常に作成されます。

- 11. スクリプトを保存する場所を指定して、「保存」をクリックします。ファイル の名前を変更する場合は、必ず選択したスキーマを明確に示す名前を使用して ください。
- 12. 生成する各スクリプトについて、ステップ 5 から 11 までを繰り返します。

注: Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。デ ータ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

#### データソース別の SQL スクリプト

各データ・ソース用にビューまたは具体化されたビューを作成するには、別個の SQL スクリプトを使用します。

次の表には、各データ・ソース用に生成する必要のあるスクリプト、結果として生 成されるスクリプト名、およびビューまたは具体化されたビューを作成するために IBM Marketing Software アプリケーション・データベースに対して実行する必要 のあるスクリプトに関する情報が示されます。

注:

- この表には、データ・ソースと生成されるスクリプトのデフォルト名をリストしています。実際の名前は異なる可能性があります。
- Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

表 8. データソース別の SQL スクリプト

レポート・スキーマ	データ・ソースおよびデフォルト名	デフォルト・スクリプト名
すべての Campaign レポート・スキ	Campaign システム・テーブル	Campaign.sql (レポート・スキーマご
-7	campaignPartition1DS	とに別のスクリプトを生成していない 場合)。別のスクリプトを生成してい
		る場合、各スクリプトの名前は個々の スキーマに基づいて付けられます。
eMessage メール配信パフォーマンス	eMessage は、Campaign システム・ テーブルに関する表を追跡します。	eMessage_Mailing_Performance.sql
	campaignPartition1DS	
Interact 配置履歴、Interact パフォー	Interact 設計時間データベース	Interact.sql
マンス、および Interact ビュー	campaignPartition1DS	
Interact 学習	Interact 学習テーブル	Interact_Learning.sql
	InteractLearningDS	
Interact ランタイム	Interact ランタイム・データベース	Interact_Runtime.sql
	InteractRTDS	
# Campaign の場合のみ: レポート・テーブルの作成およびデータ設定

SQL スクリプトを使用して、Campaign 用のレポート・テーブルを作成し、データ を設定することができます。レポート・アプリケーションは、レポート・テーブル を使用して、レポート可能データを抽出します。

このタスクについて

Campaign 用のレポート・テーブルを作成してデータを設定するには、以下のステ ップを実行します。

#### 手順

- 1. レポート・データベースを作成します。
- 2. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。
- データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当する アプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。
- DB2 データベースを使用する Campaign の場合は、DB2 ヒープ・サイズを 10240 以上に増やします。デフォルトのヒープ・サイズは 2048 です。次のコマ ンドを使用して、ヒープ・サイズを増やします。

db2 update db cfg for *databasename* using stmtheap 10240

databasename は、Campaign データベースの名前です。

ヒープ・サイズを増やすことで、ユーザーが収支サマリー・レポートのようなレ ポートの実行時にキャンペーンをすべて選択した場合でも、IBM Cognos が SQL エラー・メッセージを表示することがなくなります。

- Marketing Platform インストール・ディレクトリーの db/calendar サブディレ クトリーで、データベース・タイプに合った ReportsCalendarPopulate スクリ プトを見つけます。 ReportsCalendarPopulate スクリプトで、次のテーブルが 作成されます。
  - UA\_Calendar
  - UA\_Time
- テーブル作成スクリプトを使用して作成した新規データベースで ReportsCalendarPopulate スクリプトを実行します。
- 7. DB2 の場合のみ、以下のタスクを実行します。
  - 次のコマンドを使用して、コマンド・プロンプトからスクリプトを実行します。
    - db2 -td0 -vf ReportsCalendarPopulate\_DB2.sql
  - DB2 クライアント・インターフェースを使用する場合は、「ステートメント 終了文字」フィールドで終了文字を @ 文字に変更します。
- 8. データベース管理ツールを使用して、新規テーブルに実稼働システム・データベ ースからの適切なデータを設定します。

注: このステップでは、お客様所有のツールを使用する必要があります。SQL は SQL ジェネレーターでは生成されません。

次のタスク

35 ページの『データ同期のセットアップ』を続行してください。

## **Campaign** および eMessage の場合のみ: ビューまたは具体化さ れたビューの作成

SQL スクリプトを使用して、Campaign および eMessage 用のビューまたは具体 化されたビューを作成することができます。レポート・アプリケーションは、ビュ ーまたは具体化されたビューを使用して、レポート可能データを抽出します。

#### このタスクについて

注: Oracle および DB2 の場合、eMessage には具体化されたビューが必要です。 SQL Server の場合、eMessage にはビューが必要です。

Campaign または eMessage 用のビューまたは具体化されたビューを作成するに は、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。
- データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当する アプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

注: DB2 データベースで具体化されたビューを作成するスクリプトを実行する と、次のエラーが表示される場合があります。

SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するため に使用できません。

この場合でも、具体化されたビューは正常に作成されます。

DB2 データベースを使用する Campaign の場合は、ステップ 3 に進みます。

eMessage の場合は、ステップ 4 に進みます。

 DB2 データベースを使用する Campaign の場合は、DB2 ヒープ・サイズを 10240 以上に増やします。デフォルトのヒープ・サイズは 2048 です。次のコマ ンドを使用して、ヒープ・サイズを増やします。

db2 update db cfg for  $\mathit{databasename}$  using stmtheap 10240

databasename は、Campaign データベースの名前です。

ヒープ・サイズを増やすことで、ユーザーが収支サマリー・レポートのようなレ ポートの実行時にキャンペーンをすべて選択した場合でも、IBM Cognos が SQL エラー・メッセージを表示することがなくなります。

- 4. eMessage の場合は、以下のステップを実行します。
  - a. レポート・パック・インストール済み環境の ReportsPackCampaign¥tools
     ディレクトリーで、uare\_lookup\_create\_DB\_type.sql スクリプトを見つけ
     ます。ここで、DB\_type は、Campaign のインストール済み環境用のデータ
     ベース・タイプです。

- b. スクリプトの該当するバージョンを編集して drop table ステートメントを 除去し、スクリプトを保存します。
- c. Campaign システム・テーブル・データベースに対して、スクリプトの該当 するバージョンを実行します。

#### 次のタスク

35 ページの『データ同期のセットアップ』を続行してください。

## Interact の場合のみ: Oracle および DB2 での言語設定の変更

Interact 用のビューまたは具体化されたビューを作成する前に、lookup\_create SQL スクリプトを実行するコンピューターの言語設定で UTF-8 エンコード方式が有効に なっていることを確認してください。

#### このタスクについて

言語設定を変更するには、ご使用のデータベース・タイプに応じて、ステップ1またはステップ2のどちらかを実行します。

#### 手順

- 1. Oracle データベースの場合は、以下のステップを実行します。
  - a. 開いている Oracle セッションがあれば、すべて閉じます。
  - b. 「レジストリー エディター」を開きます。
  - c. 「HKEY\_LOCAL\_MACHINE」 > 「SOFTWARE」 > 「ORACLE」と参 照して、Oracle ホームのフォルダー (例えば、KEY\_OraDb10g\_home1) を開き ます。
  - d. NLS\_LANG 設定を検索します。
  - e. 指定されている値の最後の部分が UTF8 であることを確認します。 例え ば、AMERICAN\_AMERICA.UTF8 です。
- 2. DB2 データベースの場合は、以下のステップを実行します。
  - a. スクリプトを実行する、DB2 クライアントがインストールされているコン ピューターから、DB2 コマンド・ウィンドウが開きます。
  - b. 以下のコマンドを実行します。

db2set

- c. 出力で、次の変数と値のペアを探します。
   DB2C0DEPAGE=1208
- d. DB2CODEPAGE=1208 変数が設定されていない場合、以下のコマンドを実行し ます。

db2 db2set db2codepage=1208

e. 変更を有効にするために、セッション・ウィンドウを閉じます。

## Interact の場合のみ: ビューまたは具体化されたビューの作成

SQL スクリプトを使用して、Interact 用のビューまたは具体化されたビューを作成 することができます。レポート・アプリケーションは、ビューまたは具体化された ビューを使用して、レポート可能データを抽出します。

#### 始める前に

Interact 用のビューまたは具体化されたビューを作成するには、その前に、 lookup\_create SQL スクリプトを実行するコンピューターの言語設定で UTF-8 エン コード方式が有効になっていることを確認してください。 33 ページの『Interact の場合のみ: Oracle および DB2 での言語設定の変更』を参照してください。

#### このタスクについて

Interact 用のビューまたは具体化されたビューを作成するには、以下のステップを 実行します。

#### 手順

- 1. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。
- データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当する アプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

注: DB2 データベースで具体化されたビューを作成するスクリプトを実行する と、次のエラーが表示される場合があります。

SQL20059W マテリアライズ照会表 table-name は、照会の処理を最適化するため に使用できません。

この場合でも、具体化されたビューは正常に作成されます。

- レポート・パッケージのインストール・ディレクトリー内の tools サブディレクトリーで、データベース・タイプに合った lookup\_create スクリプトを見つけます。 例えば、SQL Server 用のスクリプトの名前は uari\_lookup\_create\_MSSQL.sql、というようになっています。
- lookup\_create スクリプトを Interact 設計時データベースで実行します。使用 するデータベース・ツールが、変更を確実にコミットするようにしてください。 例えば、データベースの自動コミット・オプションを true に設定しなければな らない場合があります。
- 5. <*Interact\_ReportPack\_Installer\_Home*>¥Cognos10¥interact-dd1¥<*DB Type*>¥ フ ォルダーを参照します。
- 6. DB2 の場合は、db2set DB2\_COMPATIBILITY\_VECTOR=ORA パラメーターを設定し ます。
- 7. ETL データベースで acir\_tables\_<DB Type>.sql スクリプトを実行します。

次のタスク

35 ページの『データ同期のセットアップ』を続行してください。

## Interact の場合のみ: レポート・テーブルの作成およびデータ設定

SQL スクリプトを使用して、Interact 用のレポート・テーブルを作成し、データを 設定することができます。レポート・アプリケーションは、レポート・テーブルを 使用して、レポート可能データを抽出します。

#### このタスクについて

Interact 用のレポート・テーブルを作成してデータを設定するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. レポート・データベースを作成します。
- データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当する アプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。
- lookup\_create スクリプトを Interact 設計時データベースで実行します。使用 するデータベース・ツールが、変更を確実にコミットするようにしてください。 例えば、データベースの自動コミット・オプションを true に設定しなければな らない場合があります。
- レポート・パッケージのインストール・ディレクトリー内の tools サブディレ クトリーで、データベース・タイプに合った lookup\_create スクリプトを見つ けます。 例えば、SQL Server 用のスクリプトの名前は uari\_lookup\_create\_MSSQL.sql、というようになっています。
- 5. データベース管理ツールを使用して、新規テーブルに実稼働システム・データベ ースからの適切なデータを設定します。

注: このステップでは、お客様所有のツールを使用する必要があります。SQL は SQL ジェネレーターでは生成されません。

#### 次のタスク

『データ同期のセットアップ』を続行してください。

## データ同期のセットアップ

データベース管理ツールを使用して、必ず IBM Marketing Software アプリケーションの実動データベースと具体化されたビューの間の定期的なデータ同期をスケジュールしてください。

#### このタスクについて

データ同期をセットアップするには、ご使用のアプリケーションおよびデータベー ス・タイプに応じて、以下のガイドラインを使用してください。

#### 手順

- Campaign の場合は、スケジュールされた抽出、変換、およびロード (Extraction、Transformation、および Load (ETL)) 方式または任意のカスタム方 式を使用して、実動データベースと新規レポート・テーブルの間の定期的なデー タ同期をスケジュールします。
- eMessage の場合、Oracle および DB2 用の具体化されたビューは、ストアード・プロシージャーによってリフレッシュされます。ストアード・プロシージャーはまた、uare delta refresh log テーブルも更新します。

DB2 のリフレッシュ・プロセスが失敗した場合、ログ・テーブルにエラーが表示 されます。 ストアード・プロシージャーについては、 41 ページの『eMessage の場合のみ: ストアード・プロシージャーをスケジュールして実行する方法』を参照してくだ さい。

- Oracle または DB2 データベース上の Interact の場合は、スケジュールされた 抽出、変換、およびロード (Extraction、Transformation、および Load (ETL)) 方式または任意のカスタム方式を使用して、実動データベースと新規レポート・ テーブルの間の定期的なデータ同期をスケジュールします。
- SQL Server 上の Interact の場合は、スケジュールされた抽出、変換、およびロード (Extraction、Transformation、および Load (ETL)) 方式または任意のカスタム方式を使用して、実動データベースと新規レポート・テーブルの間の定期的なデータ同期をスケジュールします。

# Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート

IBM Marketing Software アプリケーション・レポートは、レポート・パッケー ジ・インストーラーによって IBM Cognos コンピューターにコピーされる圧縮 (.zip) ファイルに入っています。この圧縮ファイルを Cognos Connection にインポ ートする必要があります。

#### このタスクについて

レポートが入っている圧縮ファイルを Cognos Connection にインポートするに は、以下のステップを実行します。

#### 手順

- IBM Cognos コンピューター上のレポート・パッケージ・インストール済み環境の Cognosnn ディレクトリーを参照します。ここで、nn はバージョン番号を示します。
- 圧縮レポート・アーカイブ・ファイル (例えば、Unica Reports for Campaign.zip) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリー にコピーします。分散 IBM Cognos 環境では、これは Content Manager を 実行しているシステム上にあります。

デフォルトの場所は IBM Cognos インストール済み環境の下の配置ディレク トリーです。デフォルトの場所は、Cognos Content Manager と一緒にインス トールされる Cognos Configuration ツールで指定されています。例えば、 cognos¥deployment です。

- 3. Cognos コンピューターでレポート・パッケージ・インストール済み環境の下の Cognos*nn*¥ProductNameModel サブディレクトリーを見つけます。
- サブディレクトリー全体を、Cognos Framework Manager を実行しているシ ステム上の、Framework Manager がアクセスできる任意の場所にコピーしま す。
- 5. Cognos Connection を開きます。
- 「ようこそ」ページで、「Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)」をクリックします。

「ようこそ」ページがオフになっている場合は、Cognos Connection ユーザー 設定でオンに戻してください。

- 7. 「構成」タブをクリックします。
- 8. 「コンテンツ管理」を選択します。
- 9. ツールバーの「新規インポート」 (1) アイコンをクリックします。
- 10. 「インポートの新規作成ウィザード」で一連の操作を行う際には、以下のガイ ドラインに従ってください。
  - a. 前の手順でコピーしたレポート・アーカイブを選択します。
  - b. パブリック・フォルダーの内容リストで、パッケージそのもの (青のフォ ルダーで示される) を含めて、すべてのオプションを選択します。
  - c. まだユーザーにパッケージおよびそのエントリーにアクセスさせない場合 は、「インポート後に無効化」を選択します。 IBM Marketing Software アプリケーション・ユーザーがレポートを使用できるようにする前にその レポートをテストする場合、この選択を行います。

## データ・モデルの構成および公開

データ・ソースのセットアップ時にアプリケーション・システム・テーブルの所有 者でないユーザーとしてログインした場合のみ、データ・モデルを構成して公開す る必要があります。

#### このタスクについて

注: IBM Marketing Software アプリケーション・システム・テーブルの所有者とし てデータ・ソースにログインした場合、データ・モデルを構成して公開する必要は ありません。

注: eMessage レポートでは、このタスクはオプションです。

データ・モデルを構成して公開するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- レポート・パッケージ・インストール済み環境にある Model ディレクトリー で、Model ディレクトリー内のすべてのファイルを Cognos Framework Manager インストール・ディレクトリーにコピーします。ファイルは、アプリ ケーション固有のデータ・モデルを構成します。
- Framework Manager でプロジェクト・ファイルを開きます。プロジェクト・ファイルの拡張子は .cpf であり、ファイル名には IBM Marketing Software アプリケーション名が含まれます (例えば、製品名 Model.cpf)。
- 3. アプリケーションのデータ・モデルを開き、以下のステップを実行します。
  - a. プロジェクト・ビューアーで「データ・ソース」を展開します。
  - b. アプリケーションのデータ・ソースをクリックします。
  - c. ご使用のデータベース・タイプに応じて、データ・ソースを更新します。

表 9. データ・ソース:

データベース	フィールド
SQL Server	<ul> <li>カタログ: IBM Marketing Software アプリケーション・データベー スの名前を入力します。</li> </ul>
	<ul> <li>スキーマ: IBM Marketing Software アプリケーション・データベー ス・スキーマの名前を入力します。例えば、dbo と入力します。</li> </ul>
Oracle	<ul> <li>スキーマ: IBM Marketing Software アプリケーション・データベー ス・スキーマの名前を入力します。</li> </ul>
DB2	<ul> <li>スキーマ: IBM Marketing Software アプリケーション・データベー ス・スキーマの名前を入力します。</li> </ul>

4. パッケージを保存し、再公開します。

IBM Cognos でのパッケージの公開の詳細については、「*Cognos Framework Manager* ユーザー・ガイド」を参照してください。

## レポート内の内部リンクの有効化

IBM Marketing Software アプリケーション・レポートには、標準リンクがありま す。リンクが適切に機能できるようにするには、IBM Cognos Application Firewall を構成する必要があります。また、IBM Marketing Software アプリケーション・ レポートの Cognos データ・モデルでリダイレクト URL を構成することも必要で す。

#### このタスクについて

注: このステップは、eMessage レポートの場合は不要です。

Cognos データ・モデル内で IBM Marketing Software アプリケーション・レポー ト用にリダイレクト URL を構成するには、以下のステップを実行します。

## 手順

- Cognos Framework Manager で、Framework Manager ディレクトリー構造 にコピーした <productName>Model サブディレクトリーを参照します。 .cpf フ ァイル (例えば CampaignModel.cpf) を選択します。
- 2. 「パラメーター・マップ」 > 「環境」を選択します。
- 3. 「環境」を右クリックし、「定義の編集」を選択します。
- 「リダイレクト URL (Redirect URL)」セクションで、「値」フィールドを選択します。サーバー名とポート番号を編集して IBM Marketing Software スイート用の正しいサーバー名およびポート番号にし、残りの URL はそのままにしておきます。規則として、ホスト名にはドメイン・ネームが含まれます。

例えば、Campaign の場合は次のようになります。

http://serverX.ABCompany.com:7001/Campaign/ redirectToSummary.do?external=true&

例えば、Marketing Operations の場合は次のようになります。

http://serverX.ABCompany.com:7001/plan/callback.jsp?

- 5. 以下のステップを実行して、モデルを保存し、パッケージを公開します。
  - a. ナビゲーション・ツリーから、モデルの「パッケージ」ノードを展開しま す。
  - b. パッケージ・インスタンスを右クリックし、「パッケージを発行」を選択します。

## データ・ソース名の確認と公開

モデルでレポートのデータ・ソースとして指定する名前は、Cognos Connection で 作成したデータ・ソースの名前と一致している必要があります。モデルを Framework Manager から Cognos Content Store に公開する前に、データ・ソー ス名が一致していることを確認する必要があります。

#### このタスクについて

デフォルトのデータ・ソース名を使用した場合、データ・ソース名は一致します。 デフォルトのデータ・ソース名を使用しなかった場合、モデルのデータ・ソース名 を変更する必要があります。

モデル内のデータ・ソース名を確認および変更するには、以下のステップを実行し ます。

#### 手順

- 1. Cognos Connection で、作成したデータ・ソースの名前を判別します。
- 2. Framework Manager で、「プロジェクトを開く」を選択します。
- Framework Manager ディレクトリー構造にコピーした <productName>Model サブディレクトリーを参照します。.cpf ファイル (例えば CampaignModel.cpf) を選択します。
- 4. 「データ・ソース」項目を展開し、データ・ソースの名前を調べます。それら が、Cognos Connection で付けた名前と一致することを確認します。
- 5. 名前が一致しない場合は、データ・ソース・インスタンスを選択し、「プロパティー」セクションで名前を編集します。変更を保存します。
- 6. パッケージを Cognos Content Store に公開します。

# Marketing Platform での Cognos レポート・プロパティーの構成

IBM Marketing Software には、レポート作成を構成するためのプロパティーのセットがいくつかあります。一部のプロパティーは、Marketing Platform のレポート・コンポーネントのパラメーター値を定義します。一部のプロパティーは、IBM Cognos システムの URL およびその他のパラメーターを定義します。パラメーター値を定義するプロパティーは、ビューまたはテーブルを作成するスクリプトを生成するときに指定します。 IBM Cognos システムの URL およびその他のパラメ ーターを定義するプロパティーは、必ず、指定する必要があります。

#### 始める前に

Cognos 構成ユーティリティーの「ローカル構成」 > 「環境」で、「ポータル URL」および「ディスパッチ URL」を見つけます。ステップ 5 とステップ 6 で、 この情報が必要になります。

#### このタスクについて

IBM Cognos システムの URL およびその他のパラメーターを定義するプロパティーを構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

- 1. platform\_admin ユーザー、または ReportsSystem の役割を持つ別のユーザー として IBM Marketing Software にログインします。
- 「設定」 > 「構成」 > 「レポート」 > 「統合」 > 「Cognos version」を選 択します。
- 3. 「有効」プロパティーの値を True に設定します。
- 4. 「ドメイン」プロパティーの値を、IBM Cognos システムが稼働している会社のドメインの名前に設定します。 例: xyzCompany.com

会社でサブドメインを使用している場合は、このフィールドの値に会社のドメイ ンとサブドメインが含まれている必要があります。

 「ポータル URL」プロパティーの値を、Cognos Connection ポータルの URL に設定します。「ドメイン」プロパティーで指定したドメインおよびサブドメイ ンを含む、完全修飾ホスト名を使用します。

例: http://MyCognosServer.xyzCompany.com/cognos10/cgi-bin/cognos.cgi

6. 「ディスパッチ URL」フィールドで、1 次 Cognos Content Manager ディス パッチャーの URL を指定します。「ドメイン」プロパティーで指定したドメ インおよびサブドメインを含む、完全修飾ホスト名を使用します。

例: http://MyCognosServer.xyzCompany.com:9300/p2pd/servlet/dispatch

- 7. 現時点では、「認証モード」の設定を 匿名 のままにします。
- 8. 設定を保存します。

## レポート・フォルダー権限の設定

ユーザーごとに認証済みモードを使用するようにレポート・システムを構成した場 合、適切な IBM ユーザーが IBM Marketing Software アプリケーションからレポ ートを実行できることを確認してください。これを実行する最も簡単な方法は、デ フォルトの ReportsUser 役割を適切なユーザー・グループまたはユーザーに割り当 てる方法です。

## レポート・フォルダー権限の構成

「分析」メニュー項目とオブジェクト・タイプ (例えばキャンペーンやオファー)の 「分析」タブへのアクセスを制御することに加えて、レポートのグループの権限 を、それらのレポートが物理的に保管される IBM Cognos システム上のフォルダー 構造に基づいて構成することができます。

#### 始める前に

「レポート・フォルダー権限の同期」を実行する前に、以下の条件が満たされてい ることを確認する必要があります。

- レポート作成が有効になっている。
- レポートを構成する Cognos サーバーが稼働している。

#### 手順

以下のステップを実行して、レポート・フォルダー権限を構成します。

- 1. ReportSystem 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。
- 「設定」>「レポート・フォルダー権限の同期 (Sync report folder Permissions)」と選択します。

システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにある フォルダーの名前を取得します。 (これは、いずれかのパーティションのフォ ルダー権限を構成することに決めた場合、それをすべてのパーティションに対 して構成する必要があることを意味します。)

- 3. 「設定」>「ユーザーの役割と権限」>「キャンペーン」と選択します。
- 4. 「キャンペーン」ノードの下の最初のパーティションを選択します。
- 5. 「役割の追加と権限の割り当て」を選択します。
- 6. 「権限の保存および編集」を選択します。
- 7. 「権限」フォームで、「レポート」を展開します。

「レポート」エントリーは、「レポート・フォルダー権限の同期」オプション の初回実行後に表示されます。

- 8. 「パフォーマンス・レポート」の権限に適切な役割を付与します。
- 9. レポート・フォルダーのアクセス設定を適切に構成し、変更を保存します。
- 10. パーティションごとに、ステップ 4 から 8 を繰り返します。

eMessage の場合のみ:ストアード・プロシージャーをスケジュールして実 行する方法

> eMessage レポートでは、ストアード・プロシージャーによって設定されるステージ ング表に含まれるデータを使用します。ストアード・プロシージャーは、デルタ・ リフレッシュ操作を実行します。ストアード・プロシージャーは、1 日 1 回以上実 行します。それ以上の頻度でプロシージャーを実行する場合、デルタ・リフレッシ ュ方式では、複数同時に実行することはできません。

次の表には、ストアード・プロシージャーと、それによって実行されるタスクに関 する情報が示されます。

表 10. eMessage 用のストアード・プロシージャー

ストアード・プロシージャー	タスク
sp_runid	固有の実行 ID を作成します。実行 ID のリストは、
	UARE_Runid テーブルに保管されます。

表 10. eMessage 用のストアード・プロシージャー (続き)

ストアード・プロシージャー	タスク
<pre>sp_update_ucc_tables_stats</pre>	<b>ucc_*</b> テーブルの統計を更新します。このスクリプト は、 <b>sp_populate_*</b> スクリプトの前に実行できま す。
<pre>sp_populate_mailing_contacts</pre>	ストアード・プロシージャーの前回の実行以降に受信 したメール配信のコンタクト・データを処理します。
sp_populate_mailing_responses	ストアード・プロシージャーの前回の実行以降に受信 したメール配信のレスポンス・データを処理します。
<pre>sp_populate_sms_contacts</pre>	SMS 機能が有効になっている場合:ストアード・プロ シージャーの前回の実行以降に受信した SMS コンタ クト・データを処理します。
sp_populate_sms_responses	SMS 機能が有効になっている場合: ストアード・プロ シージャーの前回の実行以降に受信した SMS レスポ ンス・データを処理します。
<pre>sp_get_delta_mailing_contacts</pre>	<b>sp_populate_mailing_contacts</b> プロシージャーによって内部的に呼び出されます。ストアード・プロシージャーの前回の実行以降に送信されたメール配信のコンタクトの取得を担当します。
<pre>sp_generate_mailing_contacts</pre>	sp_populate_mailing_contacts プロシージャーによ って内部的に呼び出されます。ストアード・プロシー ジャーの前回の実行以降に実行されたメール配信でコ ンタクトを受けた顧客のメール配信とリンク・レベル のカウントの取得を担当します。
<pre>sp_get_delta_mailing_responses</pre>	<b>sp_populate_mailing_responses</b> プロシージャーによって内部的に呼び出されます。ストアード・プロシージャーの前回の実行以降に受信したレスポンスの取得を担当します。
<pre>sp_generate_mailing_responses</pre>	sp_populate_mailing_responses プロシージャーによ って内部的に呼び出されます。ストアード・プロシー ジャーの前回の実行以降のメール配信およびリンク・ レベルのレスポンスの取得を担当します。
<pre>sp_get_delta_sms_contacts</pre>	sp_populate_sms_contacts プロシージャーによって 内部的に呼び出されます。ストアード・プロシージャ ーの前回の実行以降の SMS の取得を担当します。
<pre>sp_generate_sms_contacts</pre>	sp_populate_sms_contacts プロシージャーによって 内部的に呼び出されます。ストアード・プロシージャ ーの前回の実行以降にコンタクトを受けた顧客のメー ル配信とリンク・レベルのカウントの取得を担当しま す。
sp_get_delta_sms_responses	<b>sp_populate_sms_responses</b> プロシージャーによって 内部的に呼び出されます。ストアード・プロシージャ ーの前回の実行以降の SMS レスポンスの取得を担当 します。
sp_generate_sms_responses	<b>sp_populate_sms_responses</b> プロシージャーによって 内部的に呼び出されます。ストアード・プロシージャ ーの前回の実行以降のメール配信およびリンク・レベ ルの SMS レスポンスの取得を担当します。

表 10. eMessage 用のストアード・プロシージャー (続き)

ストアード・プロシージャー	タスク
<pre>sp_populate_mobile_responses</pre>	ストアード・プロシージャーの前回の実行以降に受信
sp_get_delta_mobile_responses	sp_populate_mobile_responses フロシーシャーによ って内部的に呼び出されます。ストアード・プロシー ジャーの前回の実行以降に受信したレスポンスの取得 を担当します。
<pre>sp_generate_mobile_responses</pre>	sp_populate_mobile_responses プロシージャーによって内部的に呼び出されます。ストアード・プロシージャーの前回の実行以降のモバイル・レスポンスの取得を担当します。

#### ストアード・プロシージャーの実行に関するガイドライン

ストアード・プロシージャーを実行するときは、以下のガイドラインに従ってくだ さい。

- インストール・ファイルと共に提供されるスクリプトを使用して、データベース 用にストアード・プロシージャーを作成する必要があります。
- インストール済み環境のテーブルおよび索引のサイズを考慮します。テーブルが 大きいほど、更新により多くの時間が必要です。コンタクト・データおよびレス ポンス・データを処理するのに十分な時間を割り当ててください。初回の実行 は、以降の実行に比べてより多くの時間を要する傾向があります。
- ストアード・プロシージャーは長時間実行される場合があるので、システム・ア クティビティーが減少する夜間などの時間帯にプロシージャーを実行することを 検討してください。
- 処理されるレポート・データの有効範囲を制限することにより、レポート・デー タのリフレッシュに必要な時間を削減することができます。
- sp\_runid をスケジュールした 10 分以上後に実行されるように、
   sp\_populate\_mailing\_contacts および sp\_populate\_mailing\_responses をスケ ジュールする必要があります。

スクリプトが正常に実行されると、最終戻りコード 0 が表示されます。

## Oracle のストアード・プロシージャーの構成例

Oracle データベース用ストアード・プロシージャーを構成する際は、以下のガイド ラインを使用してください。

ストアード・プロシージャーの構成に関するガイドライン

- IBM は、Oracle Automatic Memory Management (AMM) の使用を推奨しま す。詳しくは、http://docs.oracle.com/cd/B28359\_01/server.111/b28310/ memory003.htm を参照してください。
- SQL Plus などのデータベース・ユーティリティーを使用して、ストアード・プロシージャーを作成します。
- 他のスクリプトの少なくとも 10 分前に実行されるように sp\_runid プロシージ ャーをスケジュールします。

#### 実行 ID の作成例

次の例では、ジョブを作成し、実行 ID を生成する方法について説明します。この 例ではまた、ジョブ完了時のジョブ ID についても説明します。

この例は、毎日 21:00 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示しています。 このジョブは、2014 年 11 月 29 日に開始されます。

declare
jobno number;

```
BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_runid;',
next_date => to_date('29-Nov-2014 21:00','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/
```

#### E メール・コンタクト・データの処理例

次の例では、コンタクト・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方 法を示しています。このジョブは、毎日 21:10 に実行されます。

declare jobno number;

```
BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_mailing_contacts;',
next_date => to_date('29-Nov-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/
```

## E メール・レスポンス・データの処理例

次の例では、レスポンス・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方 法を示しています。このジョブは、毎日 21:10 に実行されます。

declare jobno number;

```
BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_mailing_responses;',
next_date => to_date('29-Nov-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/
```

## SMS コンタクト・データの処理例

重要: SMS 機能は、デフォルト・レポート・オファリングには含まれておらず、こ の機能のライセンスを別個に購入する必要があります。しかし、デルタ配置は、 SMS 機能を購入しているかどうかにかかわらず発生します。

次の例では、毎日 21:00 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示していま す。このジョブは、2014 年 11 月 29 日に開始されます。

```
BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_SMS_contacts;',
next_date => to_date('29-Nov-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/
```

## SMS レスポンス・データの処理例

次の例では、毎日 21:00 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示していま す。このジョブは、2014 年 11 月 29 日に開始されます。 BEGIN DBMS\_JOB.submit (job =>:jobno, what => 'sp\_populate\_SMS\_responses;', next\_date => to\_date('29-Nov-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI'), interval => 'sysdate+1'); commit; END; / **モバイル・レスポンス・データの処理例** 

次の例では、毎日 21:00 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示していま す。このジョブは、2014 年 11 月 29 日に開始されます。

```
BEGIN
DBMS_JOB.submit (job =>:jobno,
what => 'sp_populate_MOBILE_responses;',
next_date => to_date('29-Aug-2014 21:10','DD-MON-YYYY HH24:MI' ),
interval => 'sysdate+1');
commit;
END;
/
```

## Microsoft SQL Server 用ストアード・プロシージャーの構成例

Microsoft SQL Server データベース用ストアード・プロシージャーを構成する際 は、以下のガイドラインを使用してください。

ストアード・プロシージャーの構成に関するガイドライン

- SQL Server Agent を使用して、ストアード・プロシージャーごとに新規ジョブ を作成します。
- 少なくとも毎日実行されるようにジョブをスケジュールします。他のスクリプトの少なくとも 10 分前に実行されるように sp\_runid をスケジュールする必要があります。
- SQL Server Agent インターフェースでのジョブごとに、ステップ・タイプを Transact-SQL スクリプト (T-SQL) として指定し、Campaign データベースを選 択する必要があります。

実行 ID の作成例

次の例は、実行 ID の作成方法を示しています。

```
DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_RUNID]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO
```

#### E メール・コンタクト・データの処理例

次の例は、E メール・コンタクト・データの処理方法を示しています。実行 ID を 生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジ ュールします。

DECLARE @return\_value int EXEC @return\_value = [dbo].[SP\_POPULATE\_MAILING\_CONTACTS] SELECT 'Return Value' = @return\_value GO

## E メール・レスポンス・データの処理例

次の例は、E メール・レスポンス・データの処理方法を示しています。実行 ID を 生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジ ュールします。

```
DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_POPULATE_MAILING_RESPONSES]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO
```

#### SMS コンタクト・データの処理例

次の例は、SMS コンタクト・データの処理方法を示しています。

```
DECLARE @return_value int
EXEC @return_value = [dbo].[SP_POPULATE_SMS_CONTACTS]
SELECT 'Return Value' = @return_value
GO
```

#### SMS レスポンス・データの処理例

次の例は、SMS レスポンス・データの処理方法を示しています。

DECLARE @return\_value int EXEC @return\_value = [dbo].[SP\_POPULATE\_SMS\_RESPONSES] SELECT 'Return Value' = @return\_value GO

モバイル・レスポンス・データの処理例

次の例は、モバイル・レスポンス・データの処理方法を示しています。

DECLARE @return\_value int EXEC @return\_value = [dbo].[SP\_POPULATE\_MOBILE\_RESPONSES] SELECT 'Return Value' = @return\_value GO

## IBM DB2 用ストアード・プロシージャーに対する権限の付与

IBM DB2 用ストアード・プロシージャーを構成する前に、権限を付与する必要があります。

このタスクについて

権限を付与するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 次のステップを実行して、レジストリーを有効にします。
  - a. DB2\_ATS\_ENABLE レジストリー変数を、次のいずれかの値に設定します。
    - YES
    - TRUE
    - 1
    - ON
  - b. 変数の設定後に、DB2 データベースを再始動します。
- 2. SYSTOOLSPACE 表スペースを作成します。

このスペースは、SYSADM グループまたは SYSCTRL グループに属するユーザ ーが作成できます。次の照会を使用して、このスペースが存在することを検証し ます。

SELECT TBSPACE FROM SYSCAT.TABLESPACES WHERE TBSPACE = 'SYSTOOLSPACE'

- 権限を付与します。次の例の値を、ご使用の環境に合わせて置き換えてください。
  - EMESSAGE: eMessage システム・テーブルを含んでいるデータベース
  - USER1: EMESSAGE データベースの所有者
  - DB2ADMIN: DB2 管理ユーザー
  - Administrator: スーパーユーザー
- 4. 管理ユーザーとして DB2 に接続し、以下の GRANT コマンドを実行します。
  - db2 grant dbadm on database to user db2admin
  - db2 GRANT DBADM ON DATABASE TO USER USER1
  - db2 grant all on table SYSTOOLS.ADMINTASKS to USER1
  - db2 grant all on table SYSTOOLS.ADMINTASKS to DB2ADMIN
- 5. SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD テーブルが存在する場合は、以下の GRANT コマン ドを実行します。
  - db2 grant execute on procedure SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD to USER1
  - db2 grant execute on procedure SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD to DB2ADMIN

#### IBM DB2 用ストアード・プロシージャーの構成例

IBM DB2 データベース用ストアード・プロシージャーを構成する際は、以下のガイドラインを使用してください。

#### ストアード・プロシージャーの構成に関するガイドライン

- データベースは DB2 バージョン 9.7.8 以上でなければなりません。
- DB2 Administrative Task Scheduler (ATS) で新規ジョブを作成します。
- 少なくとも毎日実行されるようにジョブをスケジュールします。他のスクリプトの少なくとも 10 分前に実行されるように sp\_runid をスケジュールする必要があります。

#### 実行 ID の作成例

次の例では、毎日 20:50 (終了日なし) にジョブ番号を入手する方法を示しています。

call SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD('RunID\_Job',null,null, null,'50 20 \* \* \*','USER1','SP\_RUNID',null,null,null)

## メーリング・コンタクト・データの処理例

次の例では、コンタクト・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方 法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。実行 ID を 生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジ ュールします。

call SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD('Email\_Contact\_Job',null,null,'00 21 \* \* \*', 'USER1','SP\_POPULATE\_MAILING\_CONTACTS',null,null,null)

#### メーリング・レスポンス・データの処理例

次の例では、レスポンス・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方 法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。実行 ID を 生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジ ュールします。

call SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD('Email\_Response\_Job',null,null, null,'00 21 \* \* \*','USER1','SP\_POPULATE\_MAILING\_RESPONSES',null, null,null)

#### SMS コンタクト・データの処理例

次の例では、コンタクト・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方 法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。実行 ID を 生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジ ュールします。

call SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD('SMS\_Contact\_Job',null,null,null,'00 21 \* \* \*', 'USER1','SP\_POPULATE\_SMS\_CONTACTS',null,null,null)

#### SMS レスポンス・データの処理例

次の例では、レスポンス・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方 法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。

call SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD('SMS\_Response\_Job',null,null, null,'00 21 \* \* \*','USER1','SP\_POPULATE\_SMS\_RESPONSES',null, null,null)

#### E メール・コンタクト・データの処理例

次の例では、コンタクト・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方 法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。実行 ID を 生成するジョブから少なくとも 10 分たった後に実行されるようにジョブをスケジ ュールします。

call SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD('SMS\_Response\_Job',null,null,null,'00 21 \* \* \*', 'USER1','SP\_POPULATE\_MAILING\_RESPONSES',null,null,null)

#### モバイル・レスポンス・データの処理例

次の例では、レスポンス・データを処理するバッチ・ジョブをスケジュールする方 法を示しています。この例では、ジョブは毎日 21:00 に実行されます。

call SYSPROC.ADMIN\_TASK\_ADD('MOBILE\_Response\_Job',null,null, null,'00 21 \* \* \*','USER1','SP\_POPULATE\_MOBILE\_RESPONSES',null, null,null)

## Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシージャー

Interact イベント・パターン・レポートは、ステージング・テーブルに格納されて いるデータを使用します。このデータは、ストアード・プロシージャーによって設 定されます。ストアード・プロシージャーは、デルタ・リフレッシュ操作を実行し ます。

Interact イベント・パターン・レポートのデータは、次の 2 つのステップで処理されます。

- 1. Interact ETL プロセスによってオーディエンス blob データが変換され、ETL データベース表に読み込まれます。
- 2. レポート統合機能により、事前に構成された並列実行でデータがパターン・タイ プごとに増分的に集計されます。これは、Interact レポート・パック固有の機能 です。

この両方のプロセスは、UACI\_ETLPATTERNSTATERUN テーブルに対するデータベー ス・トリガーと統合されています。このトリガーは ETL の実行が成功すると起動 され、レポート・データを集計するデータベース・ジョブをサブミットします。

次の表には、ストアード・プロシージャーと、それによって実行されるタスクに関 する情報が示されます。

表 11. Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシージャー

ストアード・プロシージャー	タスク
SP_GENERATE_PATTERN_MATCHALL	SP_POPULATE_PATTERN_MATCHALL プロシージャーによ って内部的に呼び出されます。ストアード・プロシー ジャーの前回の実行以降に実行された「すべて一致」 パターンのデータの取得を担当します。
SP_GENERATE_PATTERN_COUNTER	<b>SP_POPULATE_PATTERN_COUNTER</b> プロシージャーによっ て内部的に呼び出されます。ストアード・プロシージ ャーの前回の実行以降に実行された「カウンター」パ ターンのデータの取得を担当します。
SP_GENERATE_PATTERN_WC	SP_POPULATE_PATTERN_WC プロシージャーによって内 部的に呼び出されます。ストアード・プロシージャー の前回の実行以降に実行された「重みづけカウンタ ー」パターンのデータの取得を担当します。
SP_POPULATE_PATTERN_MATCHALL	ストアード・プロシージャーの前回の実行以降に受信 した「すべて一致パターン」タイプのデータを処理し ます。

表 11. Interact イベント・パターン・レポート用のストアード・プロシージャー (続き)

ストアード・プロシージャー	タスク
SP_POPULATE_PATTERN_COUNTER	ストアード・プロシージャーの前回の実行以降に受信
	した「カウンター・パターン」タイプのデータを処理
	します。
SP_POPULATE_PATTERN_WC	ストアード・プロシージャーの前回の実行以降に受信
	した「重みづけカウンター・パターン」タイプのデー
	タを処理します。
SP_UPDATE_UACI_TABLES_STATS	トリガーによって呼び出され、データベース統計を更
	新し、レポート・データの集約のためのデータベー
	ス・ジョブをサブミットします。
	以下の ETL テーブルの統計を更新します。
	• UACI_ETLPATTERNSTATE
	• UACI_ETLPATTERNSTATEITEM
	• UACI_ETLPATTERNEVENTINFO
SP POPULATE PATTERN LOCK	構成された並列実行の度合いで UARI PATTERN LOCK
 (p_parallel_degree)	テーブルを更新します。
	<b>p_parallel_degree</b> は、並列に実行される集計処理の
	度合いです。
SP_AGGR_RUN_STATUS	集計処理が始まる前に Interact ETL プロセスによっ
	て呼び出され、実行中のストアード・プロシージャー
	のロック状況を検査します。 UARI_PATTERN_LOCK テ
	ークルに対して実行されます。
SP_REFRESH_PATTERNINFO	Oracle および DB2 の場合のみ
	UARI PATTERNSTATE INFO テーブルをリフレッシュし
	 て、IC とカテゴリーの状態およびオーディエンス・
	レベル情報を取得します。
	このノロシーシャーは、集計ノロシーシャーが開始。
	る前に下リカーによりて呼び出されより。
	Mviews は SQL Server ではサポートされないため、
	Mviews は SQL Server ではサポートされないため、 このプロシージャーは SQL Server には適用されませ
	Mviews は SQL Server ではサポートされないため、 このプロシージャーは SQL Server には適用されません。
SP_UARI_REBIND_PACKAGES	Mviews は SQL Server ではサポートされないため、 このプロシージャーは SQL Server には適用されません。 DB2 の場合のみ
SP_UARI_REBIND_PACKAGES	Mviews は SQL Server ではサポートされないため、 このプロシージャーは SQL Server には適用されません。 DB2 の場合のみ 集計トリガーおよびプロシージャーに関連付けられた
SP_UARI_REBIND_PACKAGES	<ul> <li>Mviews は SQL Server ではサポートされないため、 このプロシージャーは SQL Server には適用されません。</li> <li>DB2 の場合のみ</li> <li>集計トリガーおよびプロシージャーに関連付けられた パッケージを再バインドします。</li> </ul>
SP_UARI_REBIND_PACKAGES	Mviews は SQL Server ではサポートされないため、 このプロシージャーは SQL Server には適用されません。 DB2 の場合のみ 集計トリガーおよびプロシージャーに関連付けられた パッケージを再バインドします。 SP UPDATE UACI TABLES STATS プロシージャー呼び出
SP_UARI_REBIND_PACKAGES	<ul> <li>Mviews は SQL Server ではサポートされないため、 このプロシージャーは SQL Server には適用されません。</li> <li>DB2 の場合のみ</li> <li>集計トリガーおよびプロシージャーに関連付けられたパッケージを再バインドします。</li> <li>SP_UPDATE_UACI_TABLES_STATS プロシージャー呼び出しの後に、トリガーによって呼び出されます。</li> </ul>

表 12. Oracle および DB2 でのデータベース・シーケンス

ストアード・プロシージャー	タスク
SQ_UARI_RUN	固有の実行 ID を作成します。実行 ID のリストは、
	UARI_RUNS テーブルに保管されます。

SQL Server では、RunId 列の IDENTITY プロパティーを使用して RunID が生成され、実行のたびに新しい ID が生成されます。

表 13. データベース・トリガー

ストアード・プロシージャー	タスク
TR_AGGREGATE_DELTA_PATTERNS	値 3 で UACI_ETLPATTERNSTATERUN テーブル が更新された後 データ集計のストアード・プロシー
	ジャーを呼び出すジョブをサブミットすることによ
	り、トリガーを起動します。

#### ETL プロセス

最初の実行時は、ETL は UARI\_DELTA\_PATTERNS テーブルのそれぞれの PatternID に対して何も値を挿入しません。すべてのパターンが新規またはデルタであるため です。レポート集計処理では、ETL テーブルからすべての PatternID が収集さ れ、それらが UARI\_DELTA\_PATTERNS テーブルに挿入されます。

ETL プロセスは、SP\_AGGR\_RUN\_STATUS プロシージャーを呼び出します。 SP\_AGGR\_RUN\_STATUS プロシージャーは、UARI\_PATTERN\_LOCK テーブルを検査して、 次の JobID に基づいて実行中のジョブを調べます。

JobID 值	理由
Y	ジョブは実行中。シナリオは実行中か失敗。
N	失敗したジョブ。

ETL プロセスは常に、サブミットされたジョブの状況を検査することにより、レポート集計の状況を検査します。ETL は、レポート集計が実行中であることを検出すると、実行を開始しません。スケジュールに従って ETL が再度開始されます。

ETL プロセスは、UARI\_PATTERN\_LOCK テーブルを検査して、値が Y の JobID の数 を調べます。値が Y の JobID がまったくない場合のみ、ETL プロセスが開始され ます。いずれかの JobID の値が Y であれば、ETL プロセスはスキップされ、スケ ジュールされた次の間隔で実行されます。 ETL プロセスに関する詳細は、「*IBM Interact* 管理者ガイド」を参照してください。

2 回目の実行以降、ETL プロセスは、更新された PatternID について、 UARI\_DELTA\_PATTERNSテーブルの更新フラグを更新します。

- 更新されたデータの場合は、PatternID に U のマークが付けられます。
- 削除されたデータの場合は、PatternID に D のマークが付けられます。
- 新しく追加されたデータの場合、PatternID はレポート集計コードで識別され、
   P のマークが付けられます。

集計処理は、U フラグまたは D フラグのマークが付けられた PatternID のみを対象に実行されます。

# Interact イベント・パターン・レポート用ストアード・プロシージ ャーの使用可能化

レポートを使用可能にするために実行したステップに加えて、Interact イベント・ パターン・レポートを使用可能にする必要があります。Interact イベント・パター ン・レポートでは、レポートのレンダリングを高速にするため、データの集計とし てデルタ・リフレッシュ処理を使用します。

#### 始める前に

Administrative Task Scheduler (ATS) は、履歴データおよび構成情報を格納する ための表スペースを必要とします。データベースに表スペースが定義されているか どうかを確認するには、または表スペースを作成するには、次の情報を参照してく ださい。

http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/dm-0809see/

スケジュールされたジョブをタスク・スケジューラーから実行するには、データベースがアクティブであることが必要です。 developerWorks の次の記事を参照して ください。

http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/dm-0809see/

ADMIN\_TASK\_STATUS は、ADMIN\_TASK\_ADD プロシージャーが初めて呼び出されたとき に作成される管理ビューです。これらのビューがデータベースに存在する必要があ ります。ビューがない場合は、データベース管理者に相談してビューを作成してく ださい。ADMIN\_TASK\_STATUS 管理ビューに対するアクセス特権が必要です。詳しく は、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/api/content/ SSEPGG\_9.7.0/com.ibm.db2.luw.admin.gui.doc/doc/t0054396.html および http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/dm-0809see/ を 参照してください。

#### このタスクについて

Interact イベント・パターン・レポート用ストアード・プロシージャーを使用可能 にするには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. <*Interact\_ReportPack\_Installer\_Home*>¥Cognos10¥interact-dd1¥<*DB Type*>¥ フ ォルダーを参照します。
- 2. DB2 の場合は、以下のパラメーターを設定します。
  - db2set DB2\_COMPATIBILITY\_VECTOR=ORA
  - db2set DB2\_ATS\_ENABLE=YES
- 3. インスタンスを再始動するときは、以下のコマンドをリスト順に実行して、DB2 をアクティブにする必要があります。
  - a. db2 force application all このインスタンス上のアプリケーションを停止 します。
  - b. db2stop force DB2 を停止します。
  - c. db2start データベースを開始します。

d. db2 activate db <dbname> データベースを明示的にアクティブにします。

次のメッセージが表示されるはずです:

DB20000I ACTIVATE DATABASE コマンドが正常に完了しました。

e. db2 list active databases データベースがアクティブになったことを確認 します。

次の例のような出力が表示されるはずです。

Active Databases Database name = <dbname> Applications connected currently = 0 Database path = /data04/<DB instance owner>/NODE0000/SQL00001/

- 4. ETL データベースに対して、以下のスクリプトをリスト順に実行します。
  - a. acir\_tables\_<DB Type>.sql
  - b. acir\_scripts\_<DB Type>.sql

注: acir\_tables\_<DB Type>.sql スクリプトがまだ実行されていなければ、実行 する必要があります。

注: ターゲット・データベースで acir\_scripts\_db2.sql スクリプトを実行した 後で例外がスローされる場合、トリガーを削除し、適切なデータベース・ユーザ ーで再作成します。

SQL Server の場合は、acir\_jobs\_sqlserver.sql スクリプトを実行します。こ のスクリプトでは、度合い 2 のデータベース・ジョブが作成されます。度合い を変更するには、 54 ページの『Interact イベント・パターン・レポートの並列 実行の度合いの変更』を参照してください。

注: SQL Server エージェント・サービスが実行中であることを確認してください。

- ETL プロセスの開始前に、UARI\_PATTERN\_LOCK テーブルに並列バッチ度合いレ コードを作成する必要があります。これらのレコードを作成するには、次のいず れかのコマンドを ETL データベースに対して実行します。
  - Oracle の場合: execute SP\_POPULATE\_PATTERN\_LOCK(2)
  - DB2 の場合: call SP\_POPULATE\_PATTERN\_LOCK(2)
  - SQL Server の場合: EXEC [dbo].[SP\_POPULATE\_PATTERN\_LOCK] @p\_parallel\_degree = 2

この例の中の2は、集計処理の並列実行の度合いです。

UARI\_PATTERN\_LOCK テーブルに、ストアード・プロシージャーが度合いの値とと もに取り込まれます。度合いの値は構成可能です。Interact イベント・パター ン・レポートの集計処理において並列実行の度合いを高めると、経過時間が減少 します。度合いの設定値を大きくすると、ハードウェア・リソース要件もそれに 比例して増大します。データ集計のために実行されるプロシージャー数は、度合 いの値に応じて決まります。

- オプション: ETL 機能の実行中は、トリガーを無効にして、レポート集計が呼び出されないようにすることができます。トリガーを無効にしてレポート集計処理をオフにするには、データベース・タイプに応じて以下のいずれかのコマンドを実行します。
  - DB2 の場合は、http://www.ibm.com/developerworks/data/library/ techarticle/0211swart/0211swart.html を参照してください。
  - Oracle の場合: alter trigger TR\_AGGREGATE\_DELTA\_PATTERNS disable;
  - SQL Server の場合: Disable Trigger TR\_AGGREGATE\_DELTA\_PATTERNS on uaci\_etlpatternstaterun
- オプション: トリガーを有効にしてレポート集計処理をオンにするには、データ ベース・タイプに応じて以下のいずれかのコマンドを実行します。
  - DB2 の場合は、http://www.ibm.com/developerworks/data/library/ techarticle/0211swart/0211swart.html を参照してください。
  - Oracle の場合: alter trigger TR\_AGGREGATE\_DELTA\_PATTERNS enable;
  - SQL Server の場合: Enable Trigger TR\_AGGREGATE\_DELTA\_PATTERNS on uaci\_etlpatternstaterun

#### タスクの結果

ETL が正常に完了すると、UACI\_ETLPATTERNSTATERUN テーブルの状況が 3 に更新 され、トリガー TR\_AGGREGATE\_DELTA\_PATTERNS が呼び出されます。そのトリガーに より、並列実行の度合いを設定するストアード・プロシージャーが呼び出されま す。

注: システムが初めてすべてのデータを集計するときのレポート集計処理に要する時 間は、その後の集計より長くなる場合があります。

# Interact イベント・パターン・レポートの並列実行の度合いの変更

並列実行の度合いの値を構成することができます。Interact イベント・パターン・ レポートの集計処理において並列実行の度合いを高めると、経過時間が減少しま す。この度合いを高い値に設定すると、ハードウェア・リソースの要件もそれに比 例して高くなります。

#### このタスクについて

Interact イベント・パターン・レポートのレンダリングが高速になるように、集計 処理実行の度合いを構成します。

度合いの値が 3 のデータベース・ジョブを構成するには、ご使用のデータベースに 応じて、以下のいずれかのステップを実行します。

#### 手順

- Oracle の場合: Interact ETL データベースに対して、 execute SP\_POPULATE\_PATTERN\_LOCK(3) コマンドを実行します。
- IBM DB2 の場合: Interact ETL データベースに対して、 call SP\_POPULATE\_PATTERN\_LOCK(3) コマンドを実行します。

 SQL Server の場合: デフォルトの acir\_jobs\_sqlserver.sql スクリプトを実行 して、度合いの値が 1 および 2 のデータベース・ジョブを作成します。度合い の値が 1 および 2 のパターンが、UARI\_PROCESSED\_PATTERNS テーブルに集約さ れます。

Match All Pattern (すべて一致パターン)を度合い 3 に変更するには、度合い 1 のサンプル・コードをコピーし、以下の手順を実行します。

- 1. @job\_name の値を JOB\_MA\_3 に設定します。
- 2. Op parallel degree の値を 3 に設定します。

Interact の ETL データベースに対して、次のコマンドを実行します。

DECLARE @jobId BINARY(16), @status int, @schedule\_name varchar(16), @dbname varchar(100) set @dbname= (SELECT DB\_NAME()); EXEC msdb.dbo.sp\_add\_job @job\_name=N'JOB\_MA\_3', @job\_id = @jobId OUTPUT; EXEC msdb.dbo.sp\_add\_jobstep @job\_id=@jobId, @step\_name=N'first', @command=N'EXEC [dbo].[SP\_POPULATE\_PATTERN\_MATCHALL] @p\_parallel\_degree = 3', @database\_name=@dbname; EXEC msdb.dbo.sp\_add\_jobserver @job\_id=@jobId, @server\_name=N'(local)'; G0

Counter Pattern (カウンター・パターン) および Weighted Counter Pattern (重みづけカウンター・パターン) の度合いを作成し、コマンドを ETL データベ ースに対して実行できます。

Counter Pattern を度合い 3 に変更するには、度合い 1 のサンプル・コードを コピーして、次の手順を実行します。

- 1. @job\_name の値を JOB\_C\_3 に設定します。
- 2. @p\_parallel\_degree の値を 3 に設定します。

Weighted Counter Pattern を度合い 3 に変更するには、度合い 1 のサンプ ル・コードをコピーして、次の手順を実行します。

- 1. @job name の値を JOB WC 3 に設定します。
- 2. @p\_parallel\_degree の値を 3 に設定します。

**Interact** イベント・パターン・レポートに対する UARI\_DELTA\_REFRESH\_LOG テーブル内のログ・メッセージ

UARI\_DELTA\_REFRESH\_LOG テーブルには、すべてのプロシージャーのロギング情報が 含まれています。

#### 集計処理の状況

集計処理の状況を確認するには、次のテキストを見つけます。

#### MESSAGE\_LINE:

<patterntype> patterns delta refresh started for parallel degree <degree value>
<patterntype> patterns delta refresh completed for parallel degree <degree value>

ここで、

- ・ *<patterntype>* は、Match All、Counter、または Weighted Counter です。
- <degree value> は、パターンの並列処理に関する値です。

例えば、度合いの値が 2 の場合は、以下のメッセージがログに記録されます。

MatchAll patterns delta refresh started for parallel degree 1 MatchAll patterns delta refresh completed for parallel degree 1 MatchAll patterns delta refresh started for parallel degree 2 MatchAll patterns delta refresh completed for parallel degree 2

#### **UARI\_PATTERNSTATE\_INFO** テーブル

UARI\_PATTERNSTATE\_INFO テーブルが更新されたかどうかを確認するには、次のテキ ストを見つけます。

#### MESSAGE\_LINE:

Pattern State information refresh procedure started --The procedure to refresh the data in UARI\_PATTERNSTATE\_INFO is running.

#### MESSAGE\_LINE:

Pattern State information refresh procedure completed --The procedure to refresh the data in UARI\_PATTERNSTATE\_INFO is completed.

#### **SP\_AGGR\_RUN\_STATUS** プロシージャーによってリセットされたロック・ フラグ

SP\_AGGR\_RUN\_STATUS プロシージャーによってロック・フラグがリセットされたかど うかを確認するには、次のテキストを見つけます。

#### MESSAGE\_LINE:

patterns lock has been reset for parallel degree <degree value>

UARI\_DELTA\_REFRESH\_LOG テーブルの OBJECT 列には、ロックがリセットされたプロ シージャーの名前が含まれます。

ここで、<degree value> は、パターンの並列処理に関する値です。

例えば、度合いの値が 1 の場合は、次のメッセージがログに記録されます。

patterns lock has been reset for parallel degree 1

#### **DB2** の場合のみ: パッケージの再バインド

DB2 の場合のみ: パッケージの再バインドが完了したことを確認するには、次のテキストを見つけます。

#### MESSAGE\_LINE:

Rebind of packages started --Rebinding of the packages started

#### MESSAGE\_LINE:

Rebinding of packages completed successfully on <datetime> --Rebinding of the packages completed successfully on the given date.

#### ETL テーブルの統計の更新

ETL テーブルの統計が更新されたかどうかを確認するには、次のテキストを見つけます。

#### MESSAGE\_LINE:

Table statistics update started --Update statistics on the ETL tables is in process

#### MESSAGE\_LINE:

Statistics on Tables UACI\_ETLPATTERNSTATE UACI\_ETLPATTERNSTATEITEM UACI\_ETLPATTERNEVENTINFO and indexes have been updated successfully on <datetime> --Statistics are updated on the mentioned ETL tables on the given date.

#### 並列実行の度合い

並列実行の度合いを確認するには、次のテキストを見つけます。

#### MESSAGE\_LINE:

Pattern aggregation processing Parallel degree is set to <degree value> --Parallel degree with which report aggregation will run is set to <degree value>.

例えば、度合いの値が 2 の場合は、次のメッセージがログに記録されます。

Pattern aggregation processing Parallel degree is set to 2.

## 認証を有効にする前の構成のテスト

レポートをインストールして構成した後で、認証を有効にする前に構成をテストす る必要があります。レポートのサンプルを実行することで、構成をテストできま す。

#### 始める前に

IBM Marketing Software が実行されていること、および IBM Cognos BI サービ スが実行されていることを確認します。

#### このタスクについて

認証を有効にする前に構成をテストするには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. アプリケーション・アクセス権限を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログインします。
- 2. レポートに表示するためのデータを何か作成します。

- 3. Cognos Connection を開きます。
- インポートしたレポート・フォルダーを参照し、基本レポートへのリンクをクリックします。 例えば、Campaign の場合、「共有フォルダー」 > 「キャンペーン」 > 「キャンペーン」 > 「キャンペーン」 > 「キャンペーン・サマリー」を選択します。

レポートが失敗する場合、IBM Marketing Software アプリケーション・データ ベース用の Cognos データ・ソースが正しく構成されていることを確認してく ださい。 23 ページの『IBM Marketing Software アプリケーション・データ ベース用の IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照してください。

5. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 38 ページの『レポート内の内部リンクの有効化』を参照してください。

6. アプリケーション・アクセスを持つユーザーとして IBM Marketing Software アプリケーションにログインし、「分析」ページを参照します。

IBM Marketing Software アプリケーションの URL を指定する際、会社のドメ イン (必要に応じてサブドメインも) を含めた完全修飾ホスト名を使用してくだ さい。以下に例を示します。

http://serverX.ABCompany.com:7001/unica

7. Cognos でテストしたものと同じレポートへのリンクをクリックします。

レポートを表示できない場合には、おそらく IBM Cognos ファイアウォールが 正しく構成されていません。 25 ページの『IBM Cognos Application Firewall for IBM Marketing Software の構成』を参照してください。

注: eMessage レポートを表示できない場合は、eMessage ストアード・プロシ ージャーが実行されたことを確認してください。

8. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 38 ページの『レポート内の内部リンクの有効化』を参照してください。

 個々の項目を開き、「分析」タブをクリックして、レポートが正しいことを確認 します。

## **IBM Marketing Software** 認証を使用するように **IBM Cognos** を構成す る方法

IBM Marketing Software Authentication Provider を使用すると、Cognos アプリ ケーションは IBM Marketing Software 認証を使用して、スイート内のもう 1 つ のアプリケーションであるかのように IBM Marketing Software スイートと通信で きるようになります。

IBM Marketing Software 認証を使用するように IBM Cognos を構成する前に、 「認証済み」と「ユーザーごとに認証済み」のどちらの認証モードを構成すること にするかを判断しておいてください。

## レポート・システム・ユーザーの作成

認証モードには、認証済みとユーザーごとに認証済みの 2 つがあります。「ユーザ ーごとに認証済み」モードを使用する場合は、レポート・システム・ユーザーを作 成する必要はありません。「認証済み」モードを使用する場合は、レポート・シス テム・ユーザーを作成する必要があります。レポート・システム・ユーザーを作成 するときには、ユーザーを作成し、IBM Cognos BI 資格情報を使用してそのユーザ ー用のデータ・ソース資格情報を作成できます。

#### このタスクについて

レポート・システム・ユーザーを作成するときには、そのユーザー用に以下のログ イン資格情報を構成できます。

- IBM Marketing Software スイート用のログイン資格情報 1 セット: ユーザー名 とパスワードは、レポート・システム・ユーザー (cognos\_admin) に対して指定 されます。
- IBM Cognos BI 用のログイン資格情報 1 セット: ユーザー名とパスワードは、 レポート・システム・ユーザーのデータ・ソース資格情報として指定されます。

レポート・システム・ユーザーを作成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

- 1. IBM Marketing Software に platform\_admin ユーザーとしてログインしま す。
- 2. 「設定」 > 「ユーザー」を選択します。
- 3. 以下の属性を持つ IBM ユーザーを作成します。
  - a. ユーザー名: cognos\_admin
  - b. パスワード: admin
- 4. このユーザー用に、以下の属性を持つデータ・ソースを作成します。
  - a. データ・ソース: Cognos
  - b. データ・ソース・ログオン (Data Source Logon): cognos\_admin

データ・ソースのユーザー名は、ステップ 3 で作成した IBM ユーザーの ユーザー名と正確に一致するようにしてください。

- c. データ・ソース・パスワード: admin
- 5. レポート・システム役割をユーザーに追加します。
- IBM Marketing Software でユーザー・パスワードの有効期限切れが構成されて いる場合、ログアウトし、レポート・システム・ユーザー (cognos\_admin) と して再びログインします。このステップを実行すると、後のタスクでこのユーザ ーとして IBM Cognos にログインする前に、必ず IBM セキュリティーによる 「パスワードの変更」チャレンジと対話して、パスワードを再設定することにな ります。

## IBM Marketing Software での Cognos 認証プロパティーの構成

IBM Marketing Software と Cognos のアプリケーションを別々のネットワーク・ ドメインにインストールした場合は、IBM Marketing Software で Cognos の認証 プロパティーを構成する必要があります。この操作によって、IBM Marketing Software アプリケーションが Cognos アプリケーションと通信できるようにしま す。

#### このタスクについて

「フォーム認証の有効化」プロパティーの設定は、Cookie の代わりにフォーム・ベースの認証を IBM Marketing Software セキュリティーで使用することを示します。次のいずれかに当てはまる場合は、このプロパティーを True に設定します。

- IBM Marketing Software が Cognos アプリケーションと同じネットワーク・ド メインにインストールされていない。
- IBM Marketing Software アプリケーションと Cognos インストール済み環境の 両方が同じコンピューター上にあっても、Cognos へのアクセスに、(IBM Marketing Software アプリケーションへのアクセスに使用する) 完全修飾ホスト 名ではなく (同じネットワーク・ドメインの) IP アドレスを使用する。

値が True の場合、Cognos Connection へのログイン・プロセスはログイン名とパ スワードを平文で渡すため、SSL 通信を使用するように Cognos と IBM Marketing Software を構成しないと、安全ではありません。

しかし、SSL を構成した場合でも、表示されたレポートのソースを表示すると、ユ ーザー名とパスワードが HTML ソース・コード内に平文で表示されます。このた め、Cognos と IBM Marketing Software は、同じネットワーク・ドメインにイン ストールする必要があります。

IBM Marketing Software で Cognos 認証プロパティーを構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

- 1. IBM Marketing Software に platform\_admin ユーザーとしてログインしま す。
- 2. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 3. 「レポート」 > 「統合」 > 「Cognos version」を展開します。
- 認証済み または ユーザーごとに認証済み を選択することによって、「認証モ ード」プロパティーの値を設定します。

認証済み モードの場合、ステップ 5 に進みます。

ユーザーごとに認証済み モードの場合、ステップ8 に進みます。

- 認証済みモードの場合:「認証ユーザー名」および「認証データ・ソース名」フィールドの値を、前のタスク(59 ページの『レポート・システム・ユーザーの 作成』)で作成したユーザーおよびデータ・ソースに一致させます。
- 6. 「フォーム認証を有効にする」プロパティーの値を設定します。

注:「フォーム認証を有効にする」プロパティーを True に設定した場合は、 「認証モード」プロパティーが、「認証済み」に設定された場合のように自動的 に動作します。このモードを使用するために必要な手順(59 ページの『レポー ト・システム・ユーザーの作成』を参照)を実行する必要があります。

7. 新しい設定を保存します。

 ユーザーごとに認証済みモードの場合: デフォルトの asm\_admin ユーザーに Report User 役割を割り当てます。レポートをテストするには、IBM Marketing Software アプリケーションとレポート・データの両方にアクセスで きるユーザーが必要です。 platform\_admin ユーザーは IBM Marketing Software アプリケーション機能へのアクセス権限を持っていません。

## **IBM Marketing Software Authentication Provider** を使用する ための **IBM Cognos** の構成

Cognos Configuration アプリケーションおよび Cognos Connection アプリケーションを使用して、IBM Cognos BI アプリケーションが IBM Marketing Software Authentication Provider を使用するように構成する必要があります。

#### このタスクについて

分散システムの場合のみ: IBM Cognos システムにフェイルオーバー・サポートの ためのバックアップ Content Manager が構成されている場合、Content Manager がインストールされているサーバーごとにこの作業を実行します。

IBM Marketing Software 認証プロバイダーを使用するように IBM Cognos を構成 するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

- Cognos Content Manager を実行しているコンピューターで、Cognos Configuration を開きます。
- 2. 「ローカル構成」 > 「セキュリティー」 > 「認証」を選択します。
- 3. 「認証」を右クリックし、「リソースの新規作成」 > 「ネームスペース」を 選択します。
- 4. フィールドに以下のように入力して、「OK」をクリックします。
  - a. 名前: Unica
  - b. タイプ: カスタム Java プロバイダー
- 5. 「リソース・プロパティー」ページで、以下のようにフィールドに入力し、変 更内容を保存します。
  - a. ネームスペース ID: Unica
  - b. Java クラス名: com.unica.report.adapter.UnicaAuthenticationProvider
- 6. IBM Cognos BI サービスを停止し、再始動します。

Windows システムでは、Cognos インターフェースにおいて、サービスが停止していないのに停止していると示される場合があります。サービスを確実に 停止させるには、Windows 管理ツールを使用してサービスを停止します。

7. 「ローカル構成」>「セキュリティー」>「認証」の下で、「Unica」を右クリ ックして「テスト」を選択します。

Cognos Connection でエラーが表示される場合、Cognos インストール済み環 境の logs ディレクトリーにある cogserver.log ファイルを調べて、問題を判 別してください。

8. IBM Marketing Software Authentication Provider が正しく構成されているこ とを検査するために、以下のように Cognos Connection にログインします。

- IBM Marketing Software 構成プロパティーで Cognos 認証モードを「認 証済み」に設定した場合、cognos\_admin (レポート・システム) ユーザーと してログインします。
- IBM Marketing Software 構成プロパティーで認証モードを「ユーザーごと に認証済み」に設定した場合、asm\_admin ユーザーとしてログインしま す。

IBM Cognos に以下のエラーが表示された場合は、エラー・メッセージを展開 してください。

The third-party provider returned an unrecoverable exception.

展開したメッセージに資格情報が無効であることが示されている場合は、ユー ザー資格情報の入力にエラーがあったということです。もう一度ログインして みてください。

展開したメッセージにパスワードの期限切れが示されている場合は、IBM Marketing Softwareのパスワードの有効期限が切れています。レポート作成シ ステム・ユーザーとして IBM Marketing Software アプリケーションにログイ ンし、パスワードを再設定してください。その後に、再度 Cognos Connection へのログインを試みてください。

それでも Cognos Connection にログインできない場合、Cognos インストー ル済み環境の logs ディレクトリーにある cogserver.log ファイルを調べてく ださい。

- 9. Cognos Connection へのログインに成功したら、Cognos Configuration を開 きます。
- 10. 「ローカル設定」 > 「セキュリティー」 > 「認証」 > 「**Cognos**」を選択し ます。
- 11. 「匿名アクセスを許可」 を false に設定することにより、IBM Cognos BI への匿名アクセスを無効にします。
- 12. 変更を保存します。
- 13. IBM Cognos サービスを停止し、再始動します。

IBM Cognos サービスは、認証プロバイダーと正常に通信できない場合、開始 できません。IBM Cognos サービスを開始できない場合は、この手順のステッ プを注意して見直して、構成を確認してください。

#### タスクの結果

以上で、Cognos システムのアプリケーションにログインしたユーザーが、IBM Marketing Software で認証されるようになりました。加えて、ログオンおよびセキ ュリティー管理タスク用の認証ネームスペース「Unica」が IBM Cognos ユーザ ー・インターフェースに表示されるようになりました。

## Marketing Platform の追加設定の構成

IBM Marketing Platform を LDAP サーバー、Windows Active Directory、また は Web アクセス制御システム (Tivoli<sup>®</sup> や Site Minder など) と統合する場合は、 追加の設定を構成する必要があります。 このタスクについて

Marketing Platform のための追加の設定を構成するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

1. Cognos Configuration で、Unica<sup>®</sup> 認証ネームスペースについて、フラグ「認 証で選択可能」を「**false**」に設定します。

このフラグを「false」に設定すると、Cognos Connection と Cognos Administration は、認証用に Unica ネームスペースにアクセスすることができ なくなります。しかし、IBM Marketing Software アプリケーションは、引き続 き Cognos SDK API を介して Unica ネームスペースにアクセスできます (ユ ーザーが IBM Marketing Software アプリケーション内から Cognos レポート を表示する場合など)。

- 2. Cognos URL への認証されたアクセスが必要な場合は、以下の手順を実行しま す。
  - a. Cognos Configuration で、バンドルされた適切な認証プロバイダーを使用 して、ネームスペースを構成します。
  - b. 「認証で選択可能」を「**true**」に設定します。
  - c. この新規ネームスペースを Cognos URL 用に使用します。

## 認証が構成された状態での構成のテスト

IBM 認証を構成した後で、IBM Cognos BI の構成をテストする必要があります。

このタスクについて

IBM Cognos BI の構成をテストするには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. IBM Marketing Software および IBM Cognos サービスが両方とも実行されて いることを確認します。
- 2. Cognos Connection を開きます。
- インポートしたレポート・フォルダーを参照し、基本レポートへのリンクをクリ ックします。 例えば、Campaign の場合、「共有フォルダー」 > 「キャンペ ーン」 > 「キャンペーン」 > 「キャンペーン・サマリー」を選択します。

レポートが失敗する場合、IBM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースが正しく構成されていることを確認してください。 23 ページの『IBM Marketing Software アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照してください。

4. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 38 ページの『レポート内の内部リンクの有効化』を参照してください。

5. IBM Marketing Software にログインし、「分析」ページを参照します。

IBM アプリケーションの URL を指定する際、会社のドメイン (必要に応じて サブドメインも) を含めた完全修飾ホスト名を使用してください。 例: http://serverX.ABCompany.com:7001/unica

6. IBM Cognos でテストしたものと同じレポートへのリンクをクリックします。

セキュリティーに関するエラー・メッセージが表示される場合、おそらく IBM Authentication Provider が正しく構成されていません。 58 ページの『IBM Marketing Software 認証を使用するように IBM Cognos を構成する方法』を 参照してください。

認証のために資格情報を入力するようプロンプトが出される場合、おそらく URL のいずれかでドメイン・ネームが欠落しています。管理権限を持つユーザ ーとして IBM Marketing Software にログインしてください。次に、「設定」 > 「構成」を選択し、以下のプロパティー内の URL に、ドメイン・ネーム と、適切なサブドメイン・ネームが含まれていることを確認してください。

- 「レポート」 > 「統合」 > 「Cognos」 > 「ポータル URL」および「ディスパッチ URL」
- IBM アプリケーションの URL プロパティー (例えば 「キャンペーン」 > 「ナビゲーション」 > 「サーバー URL」)
- 7. レポート内のリンクをクリックします。

認証のために資格情報を入力するようプロンプトが出される場合、おそらく URL のいずれかでドメイン・ネームが欠落しています。

8. 個々の項目を開き、「分析」タブをクリックして、レポートが正しいことを確認 します。

セキュリティーに関するエラー・メッセージが表示される場合、おそらく IBM Application Provider が正しく構成されていません。

#### 次のタスク

この段階で、レポートは適切に機能し、サンプル・レポートはデフォルトの状態に あります。 IBM Marketing Software アプリケーションのデータ設計 (キャンペー ン・コード、カスタム・キャンペーン属性、レスポンス・メトリックなど)の構成 を完了してください。レポートまたはレポート・スキーマをカスタマイズするに は、以下のトピックを参照してください。

- Campaign または Interact を使用する場合は、 65 ページの『第 6 章 レポー ト作成の構成方法』にあるトピックを参照してください。
- Marketing Operations を使用する場合は、「IBM Marketing Operations 管理者 ガイド」にある『レポートの使用』のトピックを参照してください。
- eMessage のレポートを設定している場合、レポートの構成は完了です。

# 第6章 レポート作成の構成方法

レポート・パッケージをインストールまたはアップグレードした後で、レポートの インストール済み環境を構成する必要があります。

レポート作成機能のために、IBM Marketing Software はサード・パーティーのビジネス・インテリジェンス・アプリケーション IBM Cognos と統合します。レポート作成は、以下のコンポーネントに依存します。

- IBM Cognos のインストール済み環境
- IBM Enterprise アプリケーションと IBM Cognos インストール済み環境を統合 する IBM Marketing Software コンポーネントのセット
- いくつかの IBM Marketing Software アプリケーションでは、アプリケーションの IBM システム・テーブルにレポート・ビューやレポート・テーブルを作成するために必要なレポート・スキーマ
- IBM Cognos Report Authoring を使用して作成された、IBM Marketing Software アプリケーションのレポートの例

IBM Marketing Software アプリケーションをインストールする場合、各アプリケ ーションは自己を Marketing Platform に登録します。登録処理時に、アプリケー ションは自身のエントリーを「分析」メニュー項目に追加します。

アプリケーションのレポート・パッケージを構成した後は、次のようにします。

- アプリケーションの「分析」メニュー項目で、クロスオブジェクト・レポートへのアクセスが提供されます。
- 該当するオブジェクトの「分析」タブに単一オブジェクト・レポートが表示されます。
- アプリケーションのダッシュボード・レポートを有効にしてダッシュボードで使用することができます。

通常、IBM Marketing Software アプリケーションのインストール時に、IBM Marketing Software 製品のレポート・パッケージがインストールされます。レポー ト・スキーマは、すべてのレポート・パッケージに含まれているわけではありませ んが、以下の IBM Cognos BI コンポーネントはすべてに含まれています。

- IBM Marketing Software アプリケーション・レポート用のカスタマイズ可能な IBM Cognos レポート・メタデータ・モデル
- IBM Cognos BI Report Authoring で作成された、カスタマイズ可能な IBM Marketing Software アプリケーション・レポート
- レポート・データ・モデルおよびレポートについて説明した参考資料

IBM Cognos モデルは、IBM Marketing Software アプリケーション・データベー ス内のレポート・ビューまたはレポート・テーブルを参照します。これにより、 IBM Marketing Software レポート・パッケージで提供される IBM Cognos レポー トでそのデータを使用することができます。 インストール直後は、レポートはデフォルトの状態にあり、サンプル・レポートと 見なすことができます。多くの IBM Marketing Software アプリケーションには、 追加やカスタマイズが可能なオブジェクト、属性、またはメトリックのセットがあ ります。例えば、Campaign では、レスポンス・タイプ、カスタム・キャンペーン 属性、追加オーディエンス・レベルを追加することができます。ご使用のシステム のデータ設計を実装した後、レポートを再表示して、レポート例をカスタマイズし たり、新しいレポートを作成したりできます。

実装のデータ設計フェーズの後でレポートを構成する方法は、IBM Marketing Software スイートに組み込まれている IBM Marketing Software アプリケーショ ンによって異なります。

- Campaign および Interact の場合、レポート・スキーマをカスタマイズしてから、インストール時に作成されたビューまたはレポート・テーブルを更新します。その時に、Cognos データ・モデルと新しく更新されたレポート・ビューを同期化し、Cognos のコンテンツ・ストアに改訂済みのモデルを公開します。これで、新規カスタム属性が、Report Authoring で使用可能になり、それらの属性をレポート例に追加したり、属性を表示する新規レポートを作成したりすることができます。
- レポート・スキーマを提供しない IBM Marketing Software アプリケーションおよび eMessage (カスタマイズ可能なスキーマを提供) については、IBMCognosレポートのみを構成します。

## レポートおよびセキュリティー

セキュリティーのため、レポート機能は特定のアクセス制御機構によって制御され ます。

以下のリストは、アクセス制御機構の説明です。

- アプリケーション・アクセス制御設定: ユーザーが IBM Marketing Software イ ンターフェースからレポートを実行可能かどうかは、IBM Marketing Software アプリケーション・アクセス設定によって付与されている権限に応じて決まりま す。さらに、Campaign、eMessage、および Interact の場合、IBM Cognos シ ステム上でのフォルダー構造に基づいて、レポートのグループへのアクセス権限 を付与または否認することができます。
- Marketing Platform アクセス制御設定: 管理者がスキーマのカスタマイズやレポ ート SQL ジェネレーターの実行を行えるかどうかは、Marketing Platform に構 成されている権限によって決まります。
- IBM Marketing Software 認証: IBM Marketing Software 認証を使用するよう に IBM Cognos BI システム構成することによって、IBM Cognosシステムから IBM アプリケーション・データへのアクセスを制御することもできます。

## レポート・フォルダー権限

IBM Cognos システムにインストールした IBM Cognos レポート・パッケージに は、フォルダーに編成された IBM アプリケーション用のレポート仕様が含まれて います。例えば、「Interact Reports」フォルダーは Interact 用のフォルダーであ り、レポート仕様は IBM Cognos システムの 「Interact Reports」 フォルダーに あります。
Campaign、eMessage、および Interact の場合、レポートのグループに対する権限 を、それらが IBM Cognos システム内で物理的に格納されているフォルダー構造に 基づいて構成することができます。

#### IBM Cognos ファイル・ディレクトリーとの同期

レポート・アプリケーションをインストールした後、IBM Cognos システム上のレ ポート・フォルダーを IBM システムに認識させる必要があります。 IBM インター フェースの「設定」メニューにある「レポート・フォルダー権限の同期」オプショ ンを実行してください。このオプションは、IBM Cognos システムに接続して、ど のフォルダーが存在するのかを判別します。その後、Campaign パーティションの ユーザー権限リストにエントリーを作成します。「レポート」という名前のエント リーが、「ログ」エントリーと「システム・テーブル」エントリーの間の権限リス トに表示されます。これで、「レポート」エントリーを展開すると、レポート・フ ォルダー名がリストされ、権限が表示されています。

新規権限のデフォルト設定は「不認可」です。したがって、「レポート・フォルダ ーの権限の同期」オプションを実行した後で、レポート・フォルダーの権限を構成 する必要があります。そうしないと、IBM Cognos レポートにアクセスできなくな ります。

#### パーティションとフォルダー・パーティション

フォルダー同期プロセスでは、すべてのパーティションについて、Cognos システムにある全フォルダーの名前を取得します。いずれかのパーティションのレポート・フォルダー権限を構成することにした場合、すべてのパーティションについて権限を構成する必要があります。

# IBM Marketing Software Authentication Provider と IBM Cognos BI システム

デフォルトでは、IBM Cognos アプリケーションにアクセスしたすべてのユーザー が IBM Marketing Software アプリケーション・データベースのデータにアクセス できるので、Cognos システムは無保護です。IBM Marketing Software Authentication Provider を使用すると、Cognos システムを保護できます。

IBM Marketing Software システムが IBM Cognos BI システムと統合されると、 IBM Cognos システムは IBM Marketing Software アプリケーション・データに次 の方法でアクセスできるようにします。

- IBM Marketing Software アプリケーションから: IBM Marketing Software イ ンターフェースからレポートが要求された場合、IBM Marketing Software シス テムは IBM Cognos システムに接続します。Cognos は、レポート・ビューま たはレポート・テーブルに照会した後、IBM Marketing Software インターフェ ースにレポートを送り返します。
- IBM Cognos アプリケーションから: Framework Manager で IBM Marketing Software アプリケーション・データ・モデルに関する作業をする場合や、Report Authoring でレポートに関する作業をする場合は、IBM Marketing Software ア プリケーションのデータベースに接続します。

IBM Cognos が IBM Marketing Software 認証を使用するように構成されると、 IBM Cognos BI システムにインストールされた IBM Marketing Software Authentication Provider が、Marketing Platform のセキュリティー層と通信して ユーザーを認証します。アクセス権限については、ユーザーは有効な IBM Marketing Software ユーザーでなければならず、また次の権限のいずれかを付与す る役割を持っている必要があります。

- report\_system は、IBM Marketing Software インターフェースのレポート構成 オプションへのアクセス権限を付与します。「ReportsSystem」役割は、この権 限を付与します。
- report\_user は、レポートへのアクセス権限を付与しますが、IBM Marketing Software インターフェースのレポート構成オプションへのアクセス権限は付与し ません。「ReportsUser」役割は、この権限を付与します。

認証モードには、次の2つのタイプがあります。

- 認証済み
- ユーザーごとに認証済み

#### 認証モード

認証モードが認証に設定されている場合、IBM Marketing Software システムと IBM Cognos システムとの間の通信は、マシン・レベルで保護されています。ユー ザーの認証モードを使用するには、レポート・システム・ユーザーを構成し、その ユーザーをレポート構成設定で識別する必要があります。

ReportsSystem 役割が割り当てられたユーザーには、すべてのレポート機能に対す るアクセス権限が付与されます。ユーザーのデータ・ソースに、IBM Cognos シス テムのログイン資格情報を格納します。データ・ソースには通常、cognos\_admin という名前が付けられます。

IBM Marketing Software Authentication Provider は、以下の方法を使用してレポ ート・システム・ユーザーを認証します。

- IBM Marketing Software ユーザーがレポートを表示しようとするたびに、 Marketing Platform は、Cognos システムとの通信で、レポート・システム・ユ ーザーのレコードに格納された資格情報を使用します。認証プロバイダーは、ユ ーザーの資格情報を検証します。
- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、レポ ート・システム・ユーザー (cognos\_admin) としてログインし、認証プロバイダ ーがユーザー資格情報を検証します。

#### ユーザーごとに認証モード

認証モードが「ユーザーごとに認証済み」に設定されている場合、レポート・シス テムはレポート・システム・ユーザーを使用せず、代わりに各ユーザーの資格情報 を評価します。IBM Marketing Software Authentication Provider は、ユーザーご とに認証済みモードで以下の方法を使用します。

 IBM Marketing Software ユーザーがレポートを表示しようとするたびに、 Marketing Platform は、そのユーザー資格情報を Cognos システムとの通信に 組み込みます。認証プロバイダーは、ユーザーの資格情報を検証します。  レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、自分 自身の資格でログインし、認証プロバイダーが資格情報を検証します。

ユーザーごとに認証済みモードでは、レポートを参照するために、すべてのユーザ ーが ReportsUser または ReportsSystem のいずれかの役割を持っている必要があ ります。通常は、1 人または 2 人の管理者に ReportsSystem の役割を割り当て、 IBM Marketing Software インターフェースでレポートを参照する必要がある IBM Marketing Software ユーザーのユーザー・グループに ReportsUser の役割を割り 当てます。

認証プロバイダーでは、レポート権限を確認する以外に、権限を検査しません。 Cognos アプリケーションにログインするレポート作成者は、レポート・フォルダ ー権限が IBM Marketing Software スイート上でどのように設定されていても、 Cognos システム上のすべてのレポートにアクセスすることができます。

# レポート権限構成プロパティー

レポート構成機能およびレポートに対するアクセス権限を付与するには、「構成」 ページの設定を構成します。

レポート構成機能にアクセスし、次の設定によってレポート自体を制御します。

ユーザー・インターフェース項目	アクセス制御
「設定」メニューの「構成」オプシ ョン 「構成」ページでレポート・スキー マを構成します。	Marketing Platform 権限「構成へのアクセス権限 (Access to Configuration)」。これは、「設定」 > 「ユーザーの役割と権限」 > 「Platform」の下にあ ります。
「設定」メニューの「レポート SQL ジェネレーター」および「レ ポート・フォルダーの権限の同期」 オプション	レポート権限「 <b>report_system</b> 」。これは、「設定」 > 「ユーザーの役割と権限」 > 「レポート」の下に あります。 標準の ReportsSystem 役割には、この権限がありま す。
分析機能のメニュー	<ul> <li>アプリケーションのアクセス設定。これは、次のとおり製品ごとに異なります。</li> <li>Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設定」&gt;「ユーザーの役割と権限」のキャンペーン・パーティション・レベルにある、「管理」&gt;「分析領域へのアクセス (Access Analysis Section)」権限です。</li> <li>Marketing Operations および Distributed Marketing については、セキュリティー・ポリシーの「分析」権限です。</li> </ul>
 「分析」タブ	個々のオブジェクトに関するセキュリティー・ポリシ ーの分析 (または解析) 権限です。
レポートで表示されるデータ	Cognos システムの認証モードが「ユーザーごとに認 証済み」である場合、ユーザーがレポート内のデータ を参照するには、ReportsSystem または ReportsUser のどちらかの役割を持っている必要があります。

# レポート・スキーマ

Campaign、Interact、および eMessage にレポートを実装するには、レポート・ビ ューまたはレポート・テーブルを作成する必要があります。レポートは、レポー ト・ビューまたはレポート・テーブルでレポート可能データを抽出できます。 Campaign、Interact、および eMessageのレポート・パッケージには、レポート・ビ ューまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成するためにレポート SQL ジェネレーターで使用されるレポート・スキーマが含まれています。

Campaign および Interact の場合は、レポートに含めるデータが表示されるように スキーマ・テンプレートをカスタマイズする必要があります。スキーマ・テンプレ ートをカスタマイズした後で、レポート SQL ジェネレーターを実行できます。 SQL ジェネレーターが生成した SQL スクリプトを実行し、そのスクリプトをアプ リケーション・データベースで実行することができます。

eMessage レポート・スキーマはカスタマイズできません。しかし、レポート・ビュ ーまたはレポート・テーブルを作成する SQL スクリプトを生成し、そのスクリプ トを eMessage データベースで実行する必要があります。

レポート・スキーマを使用すると、サード・パーティーのレポート・ツールを使用 して、より簡単に IBM アプリケーション・データを検査できるようになります。 ただし、IBM Marketing Software のユーザー・インターフェースでレポートを表 示する場合は、ご使用のシステムを IBM Cognos BI と統合する必要があります。

# レポート SQL ジェネレーター

レポート SQL ジェネレーターは、レポート・スキーマを使用して、IBM Marketing Software アプリケーションのデータベースからデータを抽出するために 必要な分析ロジックを判別します。次に、レポート SQL ジェネレーターは SQL スクリプトを生成します。このスクリプトにより、分析ロジックを実装し、ビジネ ス・インテリジェンス・ツールによるレポート作成用データの抽出を可能にする、 ビューまたはレポート・テーブルが作成されます。

インストールおよび構成時に、システム実装者が IBM Marketing Software のアプ リケーション・データベースを識別するデータ・ソース・プロパティーを構成済み です。レポート SQL ジェネレーターは、以下のタスクを実行するためにアプリケ ーション・データベースに接続します。

- ビューまたは具体化されたビューを作成するスクリプトの検証
- レポート・テーブルを作成するスクリプトで使用するための正しいデータ型の判別

JNDI データ・ソース名が正しくないか欠落している場合、レポート SQL ジェネレ ーターは、レポート・テーブルを作成するスクリプトを検証できません。

#### レポート配置オプション

レポート SQL ジェネレーター・ツールの実行時に、配置オプションを選択できます。

レポート SQL ジェネレーター・ツールを実行する場合は、スクリプトでビュー、 実体化ビュー、またはテーブルを作成するかどうかを指定します。使用する配置オ プションは、システムに含まれるデータの量によって異なります。

- 小規模な実装環境の場合は、必要に応じて、実稼働データを直接照会するレポート・ビューを効率的に実行することができます。効率がよくない場合は、具体化されたビューを試してみてください。
- 中規模の実装環境の場合は、実稼働システム・データベースで具体化されたビュ ーを使用するか、またはレポート・テーブルを別のデータベースにセットアップ します。
- 大規模の実装環境の場合は、別個のレポートデータベースを構成します。

すべての実装環境で、Cognos Connection Administration を使用して、大量のデー タを取得するレポートを業務外の時間帯に実行するようにスケジュールすることが できます。

#### 具体化されたビューおよび Microsoft SQL Server

レポート・アプリケーションは、Microsoft SQL Server の具体化されたビューをサ ポートしていません。

SQL Server では、具体化されたビューは「インデックス・ビュー」と呼ばれていま す。しかし、SQL Server 上のビューにインデックスを作成する定義では、特定の集 計、関数、およびレポート・ビューが含まれているオプションを使用することがで きません。したがって、SQL サーバー・データベースを使用している場合は、ビュ ーまたはレポート・テーブルを使用してください。

注: eMessage の場合、ビューを使用する必要があります。

#### eMessage および Oracle

ご使用のシステムに eMessage があり、データベースが Oracle である場合は、具 体化されたビューまたはレポート・テーブルを使用する必要があります。

#### eMessage および IBM DB2

ご使用のシステムに eMessage があり、データベースが IBM DB2 である場合は、 具体化されたビューまたはレポート・テーブルを使用する必要があります。

#### データ同期

実体化ビューまたはレポート・テーブルと一緒に配置する場合、データを実稼働シ ステムのデータと同期する頻度を決定します。その後、データベース管理ツールを 使用して、データの同期化処理をスケジュールに入れ、定期的にレポート・データ を最新表示してください。

eMessage の場合、eMessage デルタ・リフレッシュ・ストアード・プロシージャー を実行するときに、具体化されたビューは自動的に最新表示されます。詳しくは、 41 ページの『eMessage の場合のみ: ストアード・プロシージャーをスケジュール して実行する方法』を参照してください。

### レポートのコントロール・グループおよびターゲット・グループ

レポート・パッケージの IBM Cognos BI レポートの例には、ターゲット・グルー プとコントロール・グループの両方からのデータが含まれています。

これらのレポートをサポートするために、レポート・スキーマには、デフォルトの コンタクトおよびレスポンス履歴メトリックとデフォルトのレスポンス・タイプそ れぞれについて 2 つの列が含まれています。1 つの列にはコントロール・グループ からのレスポンスが表示され、もう 1 つの列にはターゲットグループからのレスポ ンスが表示されます。

サンプルのレポートの拡張や、独自のレポートの作成を行う予定の場合、ターゲット・グループとコントロール・グループの両方からのレスポンス情報を組み込むか どうかを決定します。組み込む場合は、メトリックまたはレスポンス・タイプを追加するため、レポート・スキーマにターゲット用と制御用の2つの列を作成します。組み込まない場合は、レポート・スキーマにターゲット・グループの項目用の列のみを作成します。

# オーディエンス・レベルとレポート

正しいオーディエンス・レベルのシステム・テーブルを参照するようにパフォーマ ンス・スキーマとレスポンス・スキーマを編集することで、レポートのオーディエ ンス・レベルを変更することができます。

デフォルトの状態では、レポート・スキーマは、Campaign に付属の単一の定義済 みオーディエンス・レベル「顧客」のシステム・テーブルを参照します。デフォル トでは、パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴レポートは「顧客」オー ディエンス・レベルを参照します。

正しいオーディエンス・レベルのシステム・テーブルを参照するようにパフォーマ ンス・スキーマとレスポンス・スキーマを編集することで、レポートのオーディエ ンス・レベルを変更することができます。

さらに、Campaign および Interact については、追加のオーディエンス・レベル用 のレポート・スキーマを追加することができます。レポート・スキーマは、「設 定」 > 「構成」ページにあるテンプレートから作成します。レポート・ビューを Cognos データ・モデルに追加し、Cognos レポートを変更して、追加のオーディエ ンス・レベルに対応できるようにします。

### レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キー

パフォーマンス・レポートとレスポンス履歴のオーディエンス・レベルを構成する 場合、または追加のオーディエンス・レベルのレポート・スキーマを作成する場合 は、オーディエンス・レベルのオーディエンス・キーを指定する必要があります。

キーに複数のデータベースの列が含まれている場合 (マルチキー・オーディエン ス・キーと呼ばれることがある)、列名の間にはコンマを使用してください。例え ば、ColumnX,ColumnY と指定します。

レポート・スキーマの「オーディエンス・キー」フィールドに入力できるストリン グの最大長は、255 文字です。オーディエンス・キーが 255 文字より長い場合は、 生成済みの SQL でこの制限を回避することができます。「オーディエンス・キ ー」フィールドにキーの最初の 255 文字を入力して、通常どおりに SQL スクリプトを生成します。次に、生成されたスクリプトをエディターで開き、切り捨てられたオーディエンス・キー参照のそれぞれを完全なストリングに置換します。

# パーティションとレポート・スキーマ

Campaign が複数のパーティションを使用する場合は、パーティションごとにレポ ート・スキーマを追加できます。レポート・スキーマは、スキーマ構成ページにあ るテンプレートから作成します。

Campaign が複数のパーティションを使用する場合は、システムの実装者が Cognos システムでパーティションごとにレポート・パッケージを構成していま す。ご使用のシステムのデータ設計が実装された後で、パーティションごとにレポ ート・ビューまたはテーブルを再表示する必要があります。

# Framework Manager データ・モデル

Cognos モデルは、物理データベース・オブジェクトと、照会サブジェクトおよび 照会項目に対する物理データベース・オブジェクトの関係を記述するレポート・メ タデータです。IBM Cognos 10 BI Report Authoring を使用する場合は、デー タ・モデルに記述された照会サブジェクトおよび項目からレポートを作成します。

IBM Marketing Software アプリケーションのデータ・モデルは、IBM Marketing Software アプリケーション・データベース内のレポート・ビューを参照します。そのデータは、IBM Marketing Software レポート・パッケージで提供される Cognos 10 レポートで利用できるようになります。

レポート・ビューを構成して追加の属性、メトリック、レスポンス・タイプを組み 込むときは、Cognos レポート・モデルとレポート・ビューを同期させ、Cognos コ ンテンツ・ストアに改訂済みモデルを公開します。これで、新規属性が Report Authoring で使用可能になり、それらの属性を IBM Marketing Software レポート に追加することができます。

IBM Marketing Software レポート・パッケージの IBM Cognos 10 モデルでは、 以下の 3 つのフォルダーで IBM Marketing Software アプリケーション・メタデ ータを提供しています。

- 「インポート・ビュー」は、IBM Marketing Software アプリケーション・デー タベース内のレポート・スキーマのデータを表示します。データ・ソース接続を 介して、データ・モデルと IBM Marketing Software データベース・ビュー、具 体化されたビュー、またはレポート・テーブルを同期化するには、このビューを 使用します。
- 「モデル・ビュー」は、基本的なメタデータ変換を実行する作業域です。照会サ ブジェクトによって表されるオブジェクト・エンティティー間の関係をセットア ップして、「ビジネス・ビュー」で使用可能な構成要素を作成します。
- 「ビジネス・ビュー」は、ビジネス・オブジェクトの観点から照会サブジェクト を編成して、レポート作成を単純化します。これは、Report Authoring で IBM Marketing Software アプリケーションのレポートを開いたときに表示される情 報です。

Campaign モデルおよび eMessage モデルには、モデル・ビューからビジネス・ビ ューへのショートカットが含まれています。Interact モデルでは、その照会サブジ ェクトの一部が 2 つのデータ・ソースにまたがるため、同じ方法のショートカット を使用しません。

注: IBM Cognos Configuration でプロジェクトを作成する場合は、「プロジェクト を開く」を選択してプロジェクトを作成します。「プロジェクトを開く」オプショ ンを使用すると、照会モードが「互換」に設定されます。「新規プロジェクトの作 成」オプションは使用しないでください。このオプションを選択すると、照会モー ドが「動的」に設定されるデフォルト・テンプレートが使用されます。

# **Report Authoring** u # - k

それぞれの IBM Marketing Software レポート・パッケージには、IBM Cognos Report Authoring で作成された、アプリケーション用のレポートがいくつか含まれ ています。

サンプル・レポートは、IBM Marketing Software スイートの共通ユーザー・イン ターフェースで以下の場所から実行できます。

- 「分析」メニューから、複数オブジェクト・レポートを実行します。
- キャンペーンやオファーなどの項目の「分析」タブで、単一オブジェクト・レポ ートを実行します。
- Campaign、Marketing Operations、eMessage、および Interact のダッシュボードで、事前構成レポートを実行します。ダッシュボードについては、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

# フォルダー、サブフォルダー、およびアクセス設定

各 IBM Marketing Software アプリケーションのレポートは、パブリック・フォル ダー領域でフォルダーとサブフォルダーとして編成され、それらにはアプリケーシ ョンとそのレポートの目的の両方を表す名前が付いています。

各 IBM Marketing Software アプリケーションの Cognos Connection レポートの アーカイブが、システムの実装者によってインストール時にパブリック・フォルダ ー領域にインポートされています。

また、これらのフォルダーとサブフォルダーは、Campaign、Interact、および eMessage のセキュリティー・アクセス制御モデルでも使用されます。セキュリティ ー・アクセス制御モデルには、フォルダー別のレポートのセキュリティー設定が含 まれています。これらのアプリケーションのセキュリティー・ポリシーによって、 ユーザーにフォルダー内のすべてのレポートに対するアクセス権限が付与されま す。Marketing Operations のアクセス制御モデルはこのレベルのアクセス権限を提 供しません。Marketing Operations では、すべてのレポートに対してアクセス権限 があるか、どのレポートに対してもアクセス権限がないかのいずれかです。

ベスト・プラクティスとして、IBM Cognos Connection インターフェースのフォ ルダーまたはサブフォルダーを名前変更しないようにしてください。名前を変更す る場合は、変更されたフォルダー名を認識するように IBM アプリケーションを構 成する必要があります。

- Campaign、eMessage、および Interact では、「設定」 > 「構成」を選択します。「Campaign」 > 「partitions」 > 「[partition name]] > 「reports」で、フォルダーの名前と一致するようにレポート・フォルダーのプロパティーの 値を編集します。
- Marketing Operationsの場合は、plan\_config.xml ファイルを開き、 reportsAnalysisSectionHome および reportsAnalysisTabHome 構成設定の値を 編集してください。

# レポートのスタイルと外観

GlobalReportStyles.css スタイル・シートを使用して、すべての IBM Marketing Software アプリケーションのレポートに共通のレポート・スタイルを設定します。

スタイルについて詳しくは、 145 ページの『第 12 章 Cognos レポートの書式設 定』を参照してください。これらのトピックは、レポートに関する以下の情報を提 供します。

- GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル
- レポートの作成時に手動で行う必要のあるスタイルの書式設定(特定のスタイル はスタイル・シートを使用して実装することができない)

IBM Marketing Software レポートでは、ダッシュ文字(「-」)には特殊な意味が あります。これは、計算が適用されないことを示します。例えば、合計を示す行の 中の固有のカウントを計算できない場合は、「-」が表示されます。

一部のレポートは、データがほとんどまたはまったくない場合、システムで最良の 状態では表示されません。例えば、データ・ポイントが1つの折れ線グラフは、線 を表示することができないため、グラフが空のように見えることになります。ま た、サマリー・データのグラフィカル表現では、データのないデータ・ポイントの 日付や時刻はリストされません。例えば、指定した日付範囲にデータのある日が1 日だけ含まれている場合、グラフにはその日付のみが表示されます。

レポートをカスタマイズして、ご使用のシステムからのデータに最適なチャートや グラフの種類を使用することができます。

# レポート生成スケジュールのセットアップ

IBM Cognos Connection では、レポートの自動実行をスケジュールすることがで きます。レポートごとに、実行頻度、フォーマット・オプション、配信方法、およ び保存場所を選択できます。

例えば、毎週月曜日の午前 9:00 にレポートを実行し、そのレポートを、指定された 受信者グループに自動生成 E メールを使用して配布するようスケジュールすること ができます。

レポートのスケジューリングと配布について詳しくは「IBM Cognos Connection User Guide」のスケジュールの章を参照してください。

### レポート・スキーマのカスタマイズ方法

カスタム・データが組み込まれるようにレポートをカスタマイズできます。変更す るレポート・スキーマは、カスタマイズする予定のレポートに応じて決まります。

レポート・パックに用意されているサンプル・レポートをサポートするレポート・ スキーマについては、 161 ページの『第 14 章 製品別のレポートおよびレポー ト・スキーマ』を参照してください。

カスタマイズする予定のレポートを決定し、該当するレポートからレポート・スキ ーマへのマップを参照してください。

- 164 ページの『eMessageレポートおよびレポート・スキーマ』
- 164 ページの『Interact レポートおよびレポート・スキーマ』

注: eMessage レポート・スキーマをカスタマイズすることはできませんが、 eMessage レポートを変更および作成することはできます。

#### コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加

キャンペーン・パフォーマンスおよびオファー・パフォーマンスのレポート・スキ ーマにコンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックを追加することがで きます。

#### 始める前に

以下について明確にします。

- メトリックを追加したいレポートをサポートしているレポート・スキーマ。詳しくは、161ページの『第14章 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ』を参照してください。
- ターゲット・グループに加えて、コントロール・グループのレポート・スキーマに列を追加する必要があるかどうか。 72 ページの『レポートのコントロール・グループおよびターゲット・グループ』を参照してください。
- メトリックの計算方法。例えば、メトリックの合計、平均、カウントを出すことができます。

#### このタスクについて

コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックを追加するには、以下のス テップを実行します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「Campaign」 > 「適切なレポート・スキー マの名前」を展開します。
- 3. 「列」ノードを展開し、「コンタクト・メトリック」または「レスポンス・メ トリック」のいずれかを選択します。
- 右のフォームで、「新しいカテゴリー名」をクリックして、コンタクト・メト リックまたはレスポンス・メトリックの名前を入力します。

- 5. 「列名」には、レポート・スキーマで使用する属性の名前を入力してくださ い。すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
- 6. 「機能」には、メトリックの計算方法または判別方法を指定します。
- 7. 「入力列名」には、IBM アプリケーション・データベースにある適切なテーブ ルから、この属性用の列の名前を入力してください。 入力列名では、大文字と 小文字が区別されます。
- 8. 「制御処理フラグ」には、数値 0 を入力します。数値 0 は、レポート・スキ ーマのこの列がターゲット・グループを表すことを示します。
- 9. 「変更の保存」をクリックします。
- オプション:必要に応じ、このタスクを繰り返して、レポート・スキーマにコントロール・グループ列を追加します。今度は、数値1を入力してください。
   数値1は、この列がコントロール・グループを表すことを示します。

#### カスタム属性の追加

カスタム・キャンペーン属性、オファー属性、およびセル属性をカスタム・キャン ペーン属性レポート・スキーマに追加することができます。

#### 始める前に

以下について明確にします。

- UA\_CampAttribute、UA\_CellAttribute、または UA\_OfferAttribute のうちの適切なテーブルにある、属性の AttributeID 列の値。
- 属性のデータ型:ストリング値、数値、または日付/時刻値

#### このタスクについて

カスタム属性を追加するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「Campaign」 > 「キャンペーン・カスタム 属性」 > 「列」を展開します。
- 3. 追加する属性のタイプに一致する列のタイプを選択します。
- 4. 右のフォームで、「新しいカテゴリー名 (New category name)」をクリックしてカスタム属性の名前を入力します。
- 5. 「列名」には、レポート・スキーマで使用する属性の名前を入力してください。 すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
- 6. 「属性 ID」には、この属性の ID を入力します。
- 7. 「値タイプ」には、属性のデータ型を指定します。

注:通貨値を保持する属性を追加する場合は、「値タイプ」フィールドに NumberValue を指定します。Campaign で、「フォーム要素タイプ」が「選択 ボックス - 文字列」に設定されている属性を追加する場合は、「値タイプ」フ ィールドに StringValue を追加します。

8. 「変更の保存」をクリックします。

### レスポンス・タイプの追加

キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スキーマにレスポンス・タイプを追加 することができます。

#### 始める前に

以下について明確にします。

- コントロール・グループおよびターゲット・グループの列をレポート・スキーマに追加する必要があるかどうか。 72 ページの『レポートのコントロール・グループおよびターゲット・グループ』を参照してください。
- UA UsrResponseType テーブルからのレスポンス・タイプ・コード。

#### このタスクについて

レスポンス・タイプを追加するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「Campaign」 > 「キャンペーン・オファ ー・レスポンスの詳細」 > 「列」 > 「レスポンス・タイプ」を展開します。
- 3. 右のフォームで、「新しいカテゴリー名 (New category name)」をクリックしてレスポンス・タイプの名前を入力します。
- 「列名」には、レポート・スキーマで使用するレスポンス・タイプの名前を入力 してください。
- 5. 「レスポンス・タイプ・コード」には、このレスポンス・タイプの 3 文字のコ ードを入力します。 レスポンス・タイプ・コードでは、大文字と小文字が区別 されます。
- 6. 「制御処理フラグ」には、数値ゼロを入力します。数値ゼロは、レポート・スキ ーマのこの列がターゲット・グループを表すことを示します。
- 7. 「変更の保存」をクリックします。
- オプション:必要に応じてこの手順を繰り返して、レポート・スキーマにコント ロール・グループ列を追加します。今度は、数値1を入力してください。数値 1は、この列がコントロール・グループを表すことを示します。

#### コンタクト・ステータス・コードの追加

キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータス詳細スキーマにコンタクト・ス テータス・コードを追加することができます。コンタクト・ステータス・コード は、UA ContactStatus テーブルから判別できます。

#### このタスクについて

コンタクト・ステータス・コードを追加するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

1. 「設定」 > 「構成」を選択します。

- 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「Campaign」 > 「キャンペーン・オファー のコンタクト・ステータスの詳細」 > 「列」 > 「コンタクト・ステータス」 を展開します。
- 3. 右のフォームで、「新しいカテゴリー名 (New category name)」をクリックしてコンタクト・ステータス・タイプの名前を入力します。
- 「列名」には、レポート・スキーマで使用するコンタクト・ステータス・タイプ の名前を入力してください。
- 「コンタクト・ステータス・コード」には、このコンタクト・ステータスの3
   文字のコードを入力します。 コンタクト・ステータス・コードでは、大文字と 小文字が区別されます。
- 6. 「変更の保存」をクリックします。

#### パフォーマンス・レポートのカレンダー期間の指定

Campaign および Interact の標準レポートには、どちらにも、カレンダーの周期で データを要約したパフォーマンス・レポートが含まれています。

#### このタスクについて

これらのレポートで使用されている期間が、デフォルトの「時間経過に伴う変動」 以外のものであることを指定するには、以下の手順を実行します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 「レポート」 > 「スキーマ」を展開し、「Campaign」または「Interact」のい ずれかを選択します。
- 3. 目的の実績スキーマを選択します。
- 4. 「設定の編集」をクリックします。
- 5. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプション・ リストを選択します。
- 6. 「変更の保存」をクリックします。

# パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエン

# ス・レベルの構成

Campaign および Interact のレポート・スキーマをカスタマイズして、レポートに 表示するカスタム・データを組み込むことができます。

#### 始める前に

以下について明確にします。

- 目的のオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴 テーブル、およびレスポンス履歴テーブルの名前。
- コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルに対するオーディエンス・キー。 72 ページの『レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キー』を参照してください。

#### このタスクについて

該当するそれぞれのレポート・スキーマに対して、以下のステップを実行します。

- Campaign の場合: オファー・パフォーマンス、キャンペーン・パフォーマン ス、キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細、キャンペーン・オファーのコ ンタクト・ステータスの詳細
- Interact の場合: 対話実績

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 2. 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「製品名」 > 「スキーマ名」を展開します。
- 3. 右のフォームで、「設定の編集」をクリックします。
- 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キ ーのシステム・テーブルを確認します。

注: マルチキー・オーディエンス・キーの列名を区切るには、コンマを使用して ください。詳しくは、 72 ページの『レポート・スキーマにおけるオーディエン ス・キー』を参照してください。

5. 「変更の保存」をクリックします。

追加のオーディエンス・レベルまたはパーティションのレポート・スキーマ <sup>追加のオーディエンス・レベルおよびパーティションのレポート・スキーマを作成</sup> できます。

追加のレポート・スキーマの作成が必要となる可能性があるのは、次の場合です。

- 複数のオーディエンス・レベルでレポートを作成する必要がある。複数のオーディエンス・レベルのデータを示すレポートを作成する場合や、複数のオーディエンス・レベルのいずれかを指定するようユーザーに求めるフィルターを追加する場合があります。そのため、追加の一連のコンタクトとレスポンス履歴テーブルを指すスキーマが必要です。
- 複数のパーティションのレポートを構成しており、それぞれのパーティションのシステム・テーブルのセットに対して異なるスキーマのカスタマイズを実装する必要がある。

始める前に、以下の情報を判別してください。

- 作成するレポート・スキーマ
  - Campaign の場合: キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細、オファー・ パフォーマンス、キャンペーン・パフォーマンス、オファーのコンタクト・ ステータスの詳細、およびキャンペーン・カスタム属性
  - Interact の場合:対話パフォーマンス
- このオーディエンス・レベルのテーブルの名前
  - Campaign の場合: コンタクト履歴テーブル、詳細なコンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブル
  - Interact の場合: 詳細なコンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブ ル

- このオーディエンス・レベルの、1 つ以上のオーディエンス・キー列の名前
- オーディエンス・レベルの名前を表す2文字か3文字の短いコード。新規レポ ート・スキーマのテーブル名またはビュー名を指定する場合は、このコードを使 用します。

#### キャンペーン・オファーのレスポンスの詳細スキーマの作成

複数のオーディエンス・レベルまたは複数のパーティションのレポートを構成する には、レポート・スキーマを作成します。

#### このタスクについて

キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スキーマを作成するには、以下のステ ップを実行します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 2. 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「Campaign」 > 「キャンペーン・オファ ー・レスポンスの詳細スター・スキーマ」を展開します。
- 3. 「新しいカテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエ ンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。 例えば、キャ ンペーン・オファーのレスポンス世帯と指定します。
- 4. 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンス・レベルのレスポンス 履歴テーブルの名前を入力して、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更でき ません。

5. 新規ノードの下で、「列」 > 「レスポンス・タイプ」を選択し、次に該当の オーディエンス・レベルのレスポンス・タイプを構成します。

このステップのヘルプについては、 78 ページの『レスポンス・タイプの追加』を参照してください。

- 新規ノードの下で、「SQL 構成」 > 「キャンペーンのレスポンスの詳細」を 選択して「設定の編集」をクリックします。
- フォームで、「テーブル/ビューの名前」フィールドの名前を編集して、オーデ ィエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 例えば、オーディエンス・レベルの名前が 「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC CRB0 HH。

テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、 127 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

- 8. 「変更の保存」をクリックします。
- 9. 新規ノードの下で、「**SQL**構成」 > 「キャンペーン・オファー・レスポンス の詳細」を選択して「設定の編集」をクリックします。
- 10. 「テーブル/ビュー名」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベル のコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必 要があります。 例えば、UARC\_CORBO\_HH\_ と指定します。
- 11. 「変更の保存」をクリックします。

# キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細スキーマ の作成

複数のオーディエンス・レベルまたは複数のパーティションのレポートを構成する には、レポート・スキーマを作成します。

#### このタスクについて

キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細スキーマを作成するに は、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 2. 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「Campaign」 > 「キャンペーン・オファ ー・レスポンスの詳細スター・スキーマ」を展開します。
- 3. 「新しいカテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエ ンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。 例えば、キャ ンペーン・オファーのコンタクト・ステータス世帯と指定します。
- 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンス・レベルのレスポンス 履歴テーブルの名前を入力して、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更でき ません。

5. 新規ノードの下で、「列」 > 「コンタクト・ステータス・コード」を選択 し、該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・ステータスを構成します。

このステップのヘルプについては、 78 ページの『コンタクト・ステータス・ コードの追加』を参照してください。

- 6. 新規ノードの下で、「**SQL**構成」>「キャンペーン・コンタクト・ステータス のコンタクト履歴」を選択して「設定の編集」をクリックします。
- フォームで、「テーブル/ビューの名前」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 例えば、オーディエンス・レベルの名前が 「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC CCSB0 HH。
- 8. 「変更の保存」をクリックします。
- 9. 新規ノードの下で、「**SQL**構成」>「キャンペーン・オファーのコンタクト・ ステータスのコンタクト」を選択して「設定の編集」をクリックします。
- 10. 「テーブル/ビューの名前」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 例えば、UARC COCSBO HH と指定します。
- 11. 「変更の保存」をクリックします。

#### オファー・パフォーマンス・スキーマの作成

オファー・パフォーマンス・スキーマを作成するには、「オファー・パフォーマン ス・スター・スキーマ」を使用します。 このタスクについて

オファー・パフォーマンス・スキーマを作成するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 2. 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「**Campaign**」 > 「オファー・パフォーマン ス・スター・スキーマ」を展開します。
- 「新しいカテゴリー名 (New category name)」で、オーディエンス・レベル を示すレポート・スキーマの記述名を入力します。 例えば、オファー・パフォ ーマンス世帯と指定します。
- 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・ キーをサポートするテーブルを確認します。
- 5. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプション を選択して、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更でき ません。

構成ツリーの新規ノードの下で、「列」 > 「コンタクト・メトリック」を選択し、該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、 76 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加』を参照してください。

 新規ノードの下で、「列」 > 「レスポンス・メトリック」を選択し、該当の オーディエンス・レベルのレスポンス・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、 76 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加』を参照してください。

- 8. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (オファーのコンタク ト履歴) を選択して「設定の編集」をクリックします。
- 9. フォームで、「テーブル/ビュー名」フィールドの値を編集して、オーディエン ス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以 下である必要があります。 例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」 である場合は、次のように指定します。UARC OCH HH 。
- 10. 「変更の保存」をクリックします。
- 11. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている 各項目に対して、ステップ 8 から 10 を繰り返します。

#### キャンペーン・パフォーマンス・スキーマの作成

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマを作成するには、「キャンペーン・パフ オーマンス・スター・スキーマ」を使用します。 このタスクについて

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマを作成するには、以下のステップを実行 します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 2. 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「**Campaign**」 > 「キャンペーン・パフォー マンス・スター・スキーマ」を展開します。
- 「新しいカテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。 例えば、キャンペーン・パフォーマンス世帯と指定します。
- 4. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・ キーをサポートするテーブルを確認します。
- 5. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプション を選択して、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更でき ません。

 新規ノードの下で、「列」 > 「コンタクト・メトリック」を選択し、該当の オーディエンス・レベルのコンタクト・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、 76 ページの『コンタクト・メトリックま たはレスポンス・メトリックの追加』を参照してください。

7. 新規ノードの下で、「列」 > 「レスポンス・メトリック」を選択し、該当の オーディエンス・レベルのレスポンス・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、 76 ページの『コンタクト・メトリックま たはレスポンス・メトリックの追加』を参照してください。

- 8. 新規ノードの下で、「**SQL**構成」を展開し、最初の項目 (キャンペーンのコン タクト履歴) を選択します。
- 9. フォームで、「テーブル/ビュー名」フィールドの値を編集して、オーディエン ス・レベルのコードを含めます。 名前は、すべての文字が大文字で、18 文字 以下である必要があります。 例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世 帯」である場合は、次のように指定します。UARC CCH HH 。
- 10. 「変更の保存」をクリックします。
- 11. 新規レポート・スキーマの「**SQL** 構成」セクションの下にリストされている 各項目に対して、ステップ 9 と 10 を繰り返します。

#### キャンペーン・カスタム属性スキーマの作成

それぞれのパーティションでは、キャンペーン・カスタム属性スキーマが1つだけ 必要です。すべてのオーディエンス・レベルに同一のスキーマが使用されます。

このタスクについて

キャンペーン・カスタム属性スキーマを作成するには、以下のステップを実行しま す。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「Campaign」 > 「キャンペーン・カスタム 属性」を展開します。
- 3. 「新しいカテゴリー名 (New category name)」で、パーティションを示すレポ ート・スキーマの記述名を入力します。 例えば、キャンペーン・カスタム属性 パーティション 2 と指定します。
- 構成ツリーの新規ノードの下で、「列」を展開し、レポート・スキーマを作成するパーティションで必要なカスタム・セル、オファー、およびキャンペーン属性を追加します。

このステップのヘルプについては、 77 ページの『カスタム属性の追加』を参照 してください。

- 5. オプション: ビューまたはテーブルの名前を編集できます。新規ノードの下で、 「SQL 構成」を展開し、各項目を選択してビュー名またはテーブル名を調べま す。名前を変更する場合は、長さを 18 文字以下にし、すべての文字を大文字に する必要があります。また、名前にスペースを含めることはできません。
- 6. 「変更の保存」をクリックします。

#### 対話実績スキーマの作成

対話実績スキーマを作成するには、「対話実績スター・スキーマ」 を使用します。

このタスクについて

対話実績スキーマを作成するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「Interact」 > 「対話実績スター・スキー マ」を展開します。
- 「新しいカテゴリー名 (New category name)」フィールドで、オーディエン ス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。 例えば、対話パ フォーマンス世帯と指定します。
- 4. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キ ーをサポートするテーブルを確認します。
- 5. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションを 選択して、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できま せん。

- 6. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (対話式チャネル・オ ファーのコンタクト履歴サマリー) を選択します。
- 7. フォームで、「テーブル/ビュー名」フィールドの値を編集して、オーディエン ス・レベルのコードを含めます。 名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以 下である必要があります。 例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」 である場合は、次のように指定します。UARI OCH HH 。

- 8. 「変更の保存」をクリックします。
- 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各 項目に対して、ステップ 7 と 8 を繰り返します。

# **IBM Cognos** モデルのカスタマイズ方法

IBM Marketing Software レポート・スキーマをカスタマイズして追加のメトリック、属性、またはオーディエンス・レベルを組み込み、レポート・ビューまたはテーブルをそのスキーマに基づいて変更する場合は、IBMIBM Cognos BI モデルも編集する必要があります。

IBM Cognos Framework Manager 機能を使用して、ビューまたはテーブルへの照 会を実行し、追加項目をデータ・モデル内にインポートします。

Cognos モデルの更新方法は、IBM Marketing Software のレポート・ビューまた はレポート・テーブルに加えられた変更に応じて異なります。

- 属性、メトリック、またはレスポンス・タイプの列を追加して既存のビューを変 更した場合は、関連ビューを表す照会オブジェクトを更新することによって新規 列をインポートしてください。
- パフォーマンス・レポートまたはランタイム・レポートの「時間経過に伴う変 動」を変更した場合、または追加のオーディエンス・レベルの新しいレポート・ スキーマを作成した場合は、新しいビューが追加されています。この場合は、 Framework Manager MetaData Wizard を使用して、ビューをデータ・モデル にインポートしてください。

以下のトピックでは、Cognos モデルをカスタマイズする場合にガイドラインとし て使用できる例を示します。詳しくは、「*IBM Cognos BI Framework Manager* ユー ザー・ガイド」および Framework Manager のオンライン・ヘルプを参照してくだ さい。

# データ・モデルにある既存のビューまたはテーブルへの属性の追加

IBM Cognos Report Authoring を使用して、データ・モデル内の既存のビューまたはテーブルに属性を追加できます。

#### 始める前に

以下のタスクを完了したことを確認してください。

- UA\_OfferAttribute テーブルでオファー属性を作成する。
- オファー属性をキャンペーン・カスタム属性レポート・スキーマに追加する。
- レポート SQL ジェネレーターを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、オファー・カスタム 属性レポート・ビュー (UARC OFFEREXTATTR) を更新する。

#### このタスクについて

次のタスク例は、IBM Cognos モデルの既存のビューに項目を追加する方法を示し ています。この例では、Campaign データベースにカスタム・オファー属性を追加 して、レポートに含める必要があるとします。 Cognos Campaign モデルに新規オファー属性を追加するには、以下のステップを 実行します。

#### 手順

- Campaign モデルのバックアップを作成します。Cognos/models ディレクトリ ーを参照し、CampaignModel サブディレクトリーをコピーします。 分散 Cognos 環境では、models ディレクトリーは、Content Manager を実行して いるシステム上にあります。
- Framework Manager では、Campaign.cpf ファイル (プロジェクト) を開い て、「インポート・ビュー」ノードを展開します。
- 「インポート・ビュー」の下で、カスタム・オファー属性(「インポート・ビ ユー (Import View)」>「キャンペーン・カスタム属性 (Campaign Custom Attributes)」>「UARC\_OFFEREXTATTR」)のレポート・ビューを表示す る照会オブジェクトを選択します。
- 4. 「ツール」 > 「オブジェクトの更新 (Update Object)」を選択します。

Cognos は、ビューのノードの下にリストされている列を最新表示して、 Campaign データベース内の UARC\_OFFEREXTATTR レポート・ビューに現在存 在する列をすべて反映します。

- 「モデル・ビュー」を展開し、このビュー内のカスタム・オファー属性(「モデル・ビュー」>「キャンペーン・カスタム属性 (Campaign Custom Attributes)」>「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」)を 表すノードを選択します。
- 「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」ノードをダブルクリ ックして、「照会サブジェクト定義 (Query Subject Definition)」ダイアロ グ・ボックスを開きます。
- 7. 新規列を見つけて、「モデル・ビュー」に追加します。
- 8. 照会項目の名前を編集して、読みやすくします。 例えば、Campaign デー タ・モデルの「インポート・ビュー」にある LASTRUNDATE という名前の列は、 「モデル・ビュー」で「前回実行日」として表示されます。

注:「ビジネス・ビュー」には、「モデル・ビュー」にある「オファー・カス タム属性 (Offer Custom Attributes)」ノードへのショートカットが含まれて います。これは、「ビジネス・ビュー」で現在使用可能な新規照会項目です。

- 9. モデルを保存します。
- 10. パッケージを Cognos Content Store に公開します。

IBM Cognos Report Authoring を使用して、適切なレポートに属性を追加することができます。

# IBM Cognos データ・モデルへのビューの追加

IBM Cognos データ・モデルにビューまたはテーブルを追加できます。IBM Cognos Framework Manager 機能を使用して、ビューまたはテーブルへの照会を 実行し、データ・モデル内の追加項目をインポートしてください。

#### 始める前に

以下のタスクを完了していることを確認してください。

- 「時間経過に伴う変動」オプションに四半期単位を追加して、キャンペーン・パフォーマンスのスキーマを変更する。
- レポート SQL ジェネレーターを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。
   このスクリプトには、次の追加レポート・ビューを作成する指示が含まれています。UARC\_CCCH\_QU、UARC\_CCH\_QU、UARC\_CCH\_QU、UARC\_CORH\_QU、および
   UARC\_CRH\_QU
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、追加レポート・ビュ ーを作成する。

#### このタスクについて

以下のタスク例は、IBM Cognos データ・モデルに新しいビューまたはテーブルを 追加する方法を示します。この例では、キャンペーン実績のレポート・スキーマの 「時間経過に伴う変動」を変更したところで、この変更を Cognos モデルにインポ ートする必要がある状況を想定しています。

Cognos Campaign データ・モデルに新しいレポート・ビューを追加するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- Campaign モデルのバックアップを作成します。Cognos/models ディレクトリーを参照し、CampaignModel サブディレクトリーをコピーします。 分散 Cognos 環境では、models ディレクトリーは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。
- 2. Framework Manager では、キャンペーン・プロジェクトを開いて、「インポ ート・ビュー」ノードを展開します。
- 「キャンペーン・パフォーマンス」フォルダーを右クリックして、「メタデー タ・ウィザード」を選択します。
- メタデータ・ウィザードのステップに従って、新しいビューをインポートします。
- 「モデル・ビュー」 > 「キャンペーン・パフォーマンス」ノードを展開して、 「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」という名前の新規項目をモデル化します。

このステップのヘルプについては、リファレンスのその他のエントリーを調べて ください。必ず同一の構造と、他の「時間経過に伴う変動」ノードに含まれる関 係を維持してください。次のタスクについては、「*IBM Cognos BI Framework Manager* ユーザー・ガイド」を参照してください。

- 名前空間の作成
- スター・スキーマ・グループの作成
- 結合の追加

- 「ビジネス・ビュー」を展開して、「モデル・ビュー」にある「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」ノードへのショートカットを作成します。
- 7. モデルを保存します。
- 8. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
- Report Authoring を開き、作成した「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」スキーマのオブジェクトを使用して、レポートを作成します。

# **IBM Marketing Software** アプリケーション用に **Cognos** レポートをカス タマイズおよび作成する方法

独自のレポートを作成して、また、サンプル・レポートをカスタマイズして、カス タム・データを含めることができます。 Cognos Connection から、レポートのオ プションを構成したり、一定の時刻にレポートを実行するようにスケジュールした り、Report Authoring を使用してレポートをカスタマイズしたりすることができま す。

レポートを計画して実装する場合は、以下のソースを参照してください。

- IBM Marketing Software アプリケーションのユーザー・ガイドには、その製品の IBM Marketing Software レポート・パッケージにあるすべてのレポートの簡略説明が記載されています。
- IBM Marketing Software レポート・パッケージには、パッケージ内の各レポートの仕様と、レポートをサポートしている Framework Manager メタデータ・モデルについて説明した参照資料が付属しています。レポート・パッケージのインストール・ディレクトリー内の <*Reports Pack* インストール・ディレクトリー>/cognos10/<製品>Docs の下に、参照資料があります。

例えば、IBM Marketing Software Campaign レポート・パッケージの資料は、 Reports Pack インストール・ディレクトリー内の /IBM/IMS/ ReportsPackCampaign/cognos10/CampaignDocs の下にあります。

モデルやレポートをカスタマイズする前に、これらの資料を調べてください。必 ず、レポートの構成方法について理解してから、レポートの変更を行ってくださ い。

- IBM Cognos レポートの作成および編集に関する詳細な資料については、IBM Cognos BI の資料 (特に「IBM Cognos Report Authoring プロフェッショナル ユーザー ガイド」) を参照してください。
- レポートのスタイルについては、145 ページの『第12章 Cognos レポートの 書式設定』を参照してください。
- Marketing Operations レポートのカスタマイズについては、「Marketing Operations 管理者ガイド」を参照してください。

# Campaign レポートの作成に関するガイドライン

Campaign の IBM Marketing Software レポート・パッケージには、レポート例が 含まれています。レポートを作成および変更するには、IBM Cognos Report Authoring を使用します。 IBM Cognos Report Authoring で Campaign のレポートを作成するには、以下の ガイドラインを使用してください。

- Campaign メタデータ・モデルとレポート・パッケージからのレポート例の仕様 について説明している参考資料を調べます。この資料は、レポート・パッケージ のインストール・ディレクトリーの CampaignReportPack¥cognosN¥docs サブデ ィレクトリーにあります。N は、Cognos インストール済み環境のバージョン番 号です。
- Report Authoring を使用して、レポートを作成、コピー、変更します。詳しくは、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。
- レポートのコピーまたはレポート自体を変更する場合は、必ず、レポートの構成 をよく理解してください。その後、Report Authoring のツールバーと「プロパ ティー」ペインを使用して、カスタム属性およびメトリックを追加し、オブジェ クトと照会項目を変更することができます。 Report Authoring 使用方法につい ては、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。レポート例の中 のオブジェクトと照会項目については、レポート・パッケージにある参考資料を 参照してください。
- 「分析」タブに表示されるオブジェクト固有のレポートを得るには、オブジェクトから渡された値を受け入れるパラメーター ID を作成します。「分析」ページ に表示されるシステム全体のレポートを得るには、キャンペーンまたはオファーのすべてのオブジェクト値を含んだプロンプトを作成します。詳しくは、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。
- レポートを Campaign で表示できるようにするには、「パブリック・フォルダー (Public Folders)」の下の適切なフォルダーにレポートを保存します。
  - レポートを「分析」タブに表示するには、「Campaign オブジェクト固有の レポート」フォルダーに保存します。
  - レポートを「分析」ページに表示するには、「Campaign」フォルダーに保存 します。
  - ダッシュボード・ポートレットにレポートを追加するには、「Unica ダッシ ュボード¥キャンペーン」フォルダーに保存します。

# インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボード・ ポートレットの構成方法

Interact には、インタラクション・ポイント別サマリーという 1 つの IBM Cognos ダッシュボード・レポートがあります。ダッシュボード・レポートは、照会パラメ ーターについてのプロンプトをユーザーに出さないため、インタラクション・ポイ ント・パフォーマンス・レポートの対話式チャネルのチャネル ID は静的値です。 デフォルトでは、このレポートのチャネル ID は 1 に設定されます。チャネル ID が実装環境に適していない場合は、レポートをカスタマイズして、レポートのフィ ルター式でチャネル ID を変更することができます。

IBM Cognos レポートをカスタマイズするには、IBM Cognos レポートのオーサリ ング・スキルが必要です。IBM Cognos BI レポートの作成および編集方法の詳細に ついては、IBM Cognos BI の資料を参照してください。特に、使用している Cognos バージョン用の 「*IBM Cognos BI Report Authoring* プロフェッショナル ユーザー ガイド」を参照してください。 インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの照会およびデータ項目 については、Interact レポート・パッケージに含まれている参考資料を参照してく ださい。

複数の対話式チャネルのグラフをダッシュボードに表示するには、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードのコピーを作成してチャネル ID を変更してください。そして、新規レポート用の新規ポートレットを作成し、それ をダッシュボードに追加します。

# カスタム・ダッシュボード・レポートの作成に関するガイドライン

Campaign、Interact、eMessage、および Marketing Operations の IBM Marketing Software レポート・パッケージには、IBM Marketing Software ダッシ ュボードで使用できるように特別に書式設定された事前構成レポート (ポートレッ ト) が含まれています。

ダッシュボードの扱いについての詳細、およびこれらの事前構成ポートレットの使用については、「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

Cognos Report Authoring でカスタム・ダッシュボード・レポートを作成する場合 は、以下のガイドラインを使用してください。

- メタデータ・モデルとレポート・パッケージからのレポート例の仕様について説 明している参考資料を調べます。この資料は、レポート・パッケージのインスト ール・ディレクトリーの <製品名>ReportPack¥cognos/V¥docs サブディレクト リーにあります。N は Cognos インストール済み環境のバージョン番号です。
- メインの Unica Dashboards フォルダーの下の該当する製品サブディレクトリーに、すべてのダッシュボード・レポートを保存します。
- ダッシュボード・ポートレットに適切に収まるように、レポートを書式設定し、 サイズを調整します。使用する必要のある書式設定については、152ページの 『ダッシュボード・レポートのスタイル』を参照してください。
- ダッシュボード・レポートにはタイトルを含めないでください。ダッシュボード・レポートが表示されるポートレットによって、レポートにそのタイトルが指定されます。
- ダッシュボード・レポートにはハイパーリンクを含めないでください。
- ダッシュボード・レポートにはページ番号を含めないでください。

ダッシュボード・ポートレットを作成してそれにレポートを追加するには、「IBM Marketing Software Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

# 第 7 章 Cognos のフォルダーおよびレポートに対するユーザー 権限

カスタム Java 認証プロバイダー (CJAP) は、Cognos のレポート・フォルダーお よびレポートにアクセスするユーザーに対して権限を提供します。この機能を実装 する前に、IBM Marketing Software 認証プロバイダーを実装して、IBM Marketing Software アプリケーションおよび Cognos の間のシングル・サインオ ン認証を提供する必要があります。

#### **IBM Marketing Software** 認証プロバイダーの制限

IBM Marketing Software 認証プロバイダーを使用するように Cognos を構成する と、ユーザーが IBM Marketing Software アプリケーション内でレポートにアクセ スする際に、ユーザーは Cognos で自動的に認証されます。 IBM Marketing Software 製品にアクセスするために使用したブラウザー・セッション内でユーザー が Cognos URL にアクセスした場合、Cognos はユーザーに再度ログインするよう には求めません。

Cognos のユーザー・インターフェースでログインするユーザーは、Cognos の Everyone グループのメンバーになります。これがデフォルトの Cognos 名前空間 の実装です。 Cognos の Everyone グループは、デフォルトで System Administrator 特権を持っています。これでは、すべてのユーザーが admin ユーザ ーになるため、セキュリティー・リスクになります。悪意のあるユーザーがこの権 限を利用してパブリック・フォルダーにあるレポートを削除または編集することが できるからです。

IBM Marketing Software 認証プロバイダーは、Cognos 内でユーザーを認証しま すが、それらのユーザーに権限を与えることはしません。この制限を解決するため に、CJAP を実装して、Cognos 名前空間のセキュリティー・セクションにユーザー が表示されるようにします。これが行われると、ユーザーの役割と権限を Cognos で管理できるようになります。

#### **CJAP** 実装の概要

CJAP 実装は、レポート・アクセス権限を持つ IBM Marketing Software アプリケ ーション内のすべてのユーザーを、指定の Cognos 名前空間に組み入れます。 CJAP は、IBM Marketing Software ユーザーを、それらのユーザーの IBM Marketing Software 製品へのアクセス権限に基づいて Cognos グループに関連付 けます。 IBM Marketing Software で **ReportsUser** 役割を持つユーザーには、 Cognos のフォルダーおよびレポートに対して読み取り専用の限定的なアクセス権 限が与えられます。IBM Marketing Software で **ReportsSystem** 役割を持つユー ザーには、Cognos での管理者権限が与えられます。 Cognos のカスタム・レポー トおよびレポート・フォルダーをセキュリティーで保護するために、グループと役 割をカスタマイズすることもできます。

#### **CJAP** の前提条件

CJAP を実装する前に、IBM Marketing Software 認証プロバイダーが実装され、 テスト済みであることを確認してください。

#### CJAP セキュリティーを実装する方法

CJAP セキュリティーを実装するには、このセクションのタスクをこの順序で実行 します。

実装タスクを開始する前に、このトピックを読んで、ご使用の環境に該当する可能 性のある特別な考慮事項を理解しておいてください。

#### 認証モード

IBM Marketing Software 認証プロバイダーを構成するときは、「認証モード」プ ロパティーの値として「認証済み」または「ユーザーごとに認証済み」のいずれか を選択して設定できます。

「認証済み」を選択した場合は、すべてのユーザーが同じユーザー・アカウントを 使用して認証されます。「認証済み」オプションを使用する場合は、以下の考慮事 項に注意してください。

- デフォルトでは、システムが認証のために使用するユーザー・アカウントは Cognos\_admin です。 CJAP 認証を実装するときは、Cognos\_admin ユーザー に IBM Marketing Software の ReportUser 役割を与えることをベスト・プラ クティスとしてお勧めします。
- 以下のタスクは実行する必要がありません。これらのタスクは、IBM Marketing Software 認証プロバイダーに対して「ユーザーごとに認証済み」を選択した場合 にのみ適用されます。
  - すべての Reports ユーザーに対するパブリック・フォルダーの読み取り専用 アクセス権の付与
  - パブリック・フォルダーのセキュリティー保護
  - Cognos でのユーザー権限の検証

# CJAP に備えて Cognos 環境をバックアップする

CJAP を実装する前に、Cognos 環境をバックアップします。

#### このタスクについて

Cognos 環境をバックアップするには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. Cognos サービスを停止します。
- Cognos 構成をバックアップするには、「Cognos 構成ファイル (Cognos Configuration File)」メニューから、エクスポート・オプションを選択しま す。
- 3. コンテンツ・データベースをバックアップします。

4. Cognos インストール済み環境にある webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA フォルダーを 手動でバックアップします。

# プロパティー・ファイルの編集と同期

プロパティー・ファイルにより、IBM Marketing Software のどのグループが Cognos で複製されるかが決まります。プロパティー・ファイルを編集して、 Cognos に同期させる Marketing Platform グループを指定します。

始める前に

Marketing Platform で、グループを作成してそれぞれに役割を関連付け、これらの グループのユーザー・メンバーを作成することにより、レポート・アクセス権限を 設計します。

Cognos サービスを停止します。プロパティー・ファイルを編集した後にサービス を再始動します。

このタスクについて

プロパティー・ファイルを編集して同期させるには、以下のステップを実行しま す。

#### 手順

- 1. Cognos インストール済み環境にある ¥webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥1ib¥ を参照 します。
- 2. ReportSecurityConfig.properties をテキスト・エディターで開きます。
- 3. プロパティーを設定するには、このファイル内の説明に従ってください。

例えば、次のようにプロパティーを設定できます。

- useFolderSecurity=true
- createEMMProductReportGroupsToSecureCognosReportFolders=Campaign

Cognos では、サブフォルダーは、ここで指定したフォルダーの下に作成されます。

- createCampaignReportsSyncFolderPermissionGroups=true
- createUserGroupInCognosSameAsPlatformGroup=Test\_grp

ここで指定するグループは、Marketing Platform 内に存在している必要があります。

createUserGroupInCognosWithPlatformUserRole=User\_Defined\_Role01

ここで指定する役割は、Marketing Platform 内に存在している必要があります。

- 4. Cognos サービスを再始動します。
- 5. プロパティー・ファイルを同期させるには、IBM Marketing Software ユーザ ー・インターフェースで、「設定」 > 「レポート・フォルダー権限の同期」を 選択します。

# Cognos での新しい名前空間プロバイダーの構成

CJAP のために Cognos で新しい名前空間プロバイダーを構成します。

このタスクについて

名前空間プロバイダーを構成するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- Cognos Configuration で「セキュリティー」 > 「認証」フォルダーにナビゲ ートします。
- 2. 「認証」フォルダーに名前空間リソースを追加します。
- 3. 名前空間に名前を指定します。
- 4. 「タイプ」 > 「カスタム Java プロバイダー」を選択して、「OK」をクリッ クします。

これにより、セキュリティー CJAP のための名前空間が作成されます。

- 5. 名前空間を選択し、名前空間に付けた名前をプロバイダーの ID として入力します。
- 6. クラス名として com.ibm.emm.cognos.provider.EMMSuiteSecurityCJAP を入力 します。

先頭と末尾にはスペースを使用しないでください。

- 7. 「認証で選択可能」プロパティーに、テストの目的で「True」を設定します。
  - True を設定すると、ユーザーは IBM Marketing Software の資格情報を使用して Cognos にログインできます。

外部ユーザーはパスワードなしでログインできるので、これは実稼働時には お勧めできません。

• False を設定すると、この名前空間は Cognos UI 上での認証には使用でき ませんが、IBM Marketing Software との統合は機能します。

テスト完了後、この設定を変更してください。

 IBM Marketing Software で Report\_System 役割を持つ IBM Marketing Software アカウントを使用して、新しい名前空間の下で Cognos にログイン します。

URL は、http://host:port/ibmCognos/cgi-bin/Cognos.cgi のようになりま す。

Cognos アプリケーションが表示されたら、認証プロバイダーは機能しています。

- 9. IBM Marketing Software で、「設定」 > 「構成」にナビゲートし、「レポ ート | 統合 | Cognos 10 | 認証の名前空間 (Autentication namespace)」 構成プロパティーを、Cognos で設定した名前と同じ名前に設定します。
- 10. Cognos レポートが IBM Marketing Software で正常に実行されることを確認 します。

グループ、ユーザー、および役割が Cognos 名前空間内に想定どおりに存在してい ることを検査します。

このタスクについて

同期を検査するには、以下のステップを実行します。

手順

- 1. Cognos Connection で、「起動」 > 「Cognos Administration」を選択しま す。
- 「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
- 3. 作成した名前空間を選択します。
- 4. Groups フォルダーをクリックし、グループが正しく同期されていることを、次 のようにして確認します。
  - 次の3つのデフォルト・グループが存在しており、想定どおりのメンバーが 設定されていることを確認します。
    - EMM\_Report\_System\_Admin\_User

IBM Marketing Software の **ReportsSystem** 役割を持つユーザーがこの グループのメンバーです。

– EMM\_Report\_User\_Role\_Users

IBM Marketing Software の **ReportsUser** 役割を持つユーザーがこのグ ループのメンバーです。

- EMM\_Report\_Access\_All\_Users

IBM Marketing Software の **ReportsUser** 役割を持つユーザーがこのグ ループのメンバーです。

- ReportSecurityConfig.properties ファイルに指定したグループが存在して おり、想定どおりのメンバーが設定されていることを確認します。
- Users フォルダーをクリックし、Marketing Platform の ReportsSystem および ReportsUser 役割を持つすべてのユーザーがこのフォルダー内にリストされていることを確認します。

重要: グループ・メンバーシップを通じてレポート権限を付与されるユーザー は、そのユーザーが IBM Marketing Software でレポートにアクセスした後 に、Cognos に表示されるようになります。また、新しいユーザーは、Cognos が再始動した後、またはユーザーが IBM Marketing Software でレポートにア クセスした後にリストされるようになります。

- 6. Roles フォルダーをクリックし、次に挙げる役割メンバーが想定どおりに存在 することを確認します。
  - Marketing Platform で ReportsSystem 役割を持つすべてのユーザーが、 Cognos で Reports\_System\_Role 役割を持っていること。
  - Marketing Platform で ReportsUser 役割を持つすべてのユーザーが、 Cognos で Reports\_User\_Role 役割を持っていること。

# 新しい役割に対する Cognos の権限の割り当て

Cognos の **Reports\_System\_Role** 役割および **Report\_User\_Role** 役割に、Cognos で権限を割り当てます。これらの役割はそれぞれ、Marketing Platform の **ReportSystem** 役割および **ReportUser** 役割に相当します。

このタスクについて

新しい役割に Cognos の権限を割り当てるには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. Cognos Connection で、「起動」 > 「**IBM Cognos Administration**」を選択 します。
- 「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
- 3. 「ディレクトリー」 > [使用している名前空間] > 「役割」にナビゲートしま す。
- 4. 「**Report\_User\_Role**」アイコンをクリックし、次のように操作してこの役割に 読み取り専用の権限を付与します。
  - a. 「権限」タブで、「追加」 > 「Cognos 名前空間」を選択します。
  - b. 「すべての認証ユーザー」グループを選択し、「追加」をクリックし、 「**OK**」をクリックします。
  - c. 「読み取り」、「実行」、および「全探索」権限を付与します。
  - d. 「書き込み」および「ポリシー設定」権限を拒否します。
  - e. 「**OK**」をクリックします。
- 5. 「**Reports\_System\_Role**」アイコンをクリックし、次のように操作してこの役割 にすべての権限を付与します。
  - a. 「権限」タブで、「追加」 > 「**Cognos** 名前空間」を選択します。
  - b. 「すべての認証ユーザー」グループを選択し、「追加」をクリックし、 「**OK**」をクリックします。
  - c. 「読み取り」、「書き込み」、「実行」、「ポリシー設定」、および「全探 索」権限を付与します。
  - d. 「**OK**」をクリックします。

# **Cognos** の System Administrators 役割からの Everyone グル ープの削除

デフォルトでは、認証されるすべてのユーザーが、Cognos の Everyone グループ のメンバーです。このグループのメンバーは、Cognos の System Administrators 役割を持ちます。そのため、デフォルトでは、すべてのユーザーに Cognos の管理 者権限が付与されます。

#### このタスクについて

このタスクを使用して、Cognos で **EMM\_Report\_System\_Admin\_User** グループ または **Reports\_System\_Role** 役割を管理者として割り当て、Cognos の System Administrators 役割から **Everyone** グループを削除します。

#### 手順

- 1. Cognos Connection で、「起動」 > 「**IBM Cognos Administration**」を選択 します。
- 「セキュリティー」タブで、「ユーザー、グループ、および役割」をクリックします。
- 3. 「Cognos」名前空間をクリックします。
- 4. 「System Administrators」役割を探して、「プロパティーの設定」アイコンを クリックし、次のようにして「Everyone」グループを変更します。
  - a. 「メンバー」タブをクリックします。

「Everyone」グループがリストされます。

- b. 「追加」をクリックし、使用する名前空間をクリックします。
- c. 「EMM\_Report\_System\_Admin\_User」グループ、または 「Reports\_System\_Role」役割を追加します。
- d. 「**OK**」をクリックします。
- e. 「Everyone」グループを選択して、「削除」をクリックします。

# パブリック・フォルダー内の読み取り専用アクセス権をレポート・ ユーザーに付与する

**EMM\_Report\_Access\_All\_Users** グループの Marketing Platform **ReportSystem** 役割メンバーおよび **ReportUser** 役割メンバーを設定したユーザーを作成します。 このグループのメンバーには、Cognos のパブリック・フォルダーに対する読み取 り専用アクセス権限を与えます。

#### このタスクについて

注: EMM\_Report\_System\_Admin\_User グループは、Cognos でのシステム管理者 権限を持っています。 IBM Marketing Software ユーザーに Cognos でのこのレ ベルのアクセス権を付与するには、そのユーザーを

EMM\_Report\_System\_Admin\_User グループのメンバーにします。

パブリック・フォルダー内の読み取り専用アクセス権をレポート・ユーザーに付与 するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- Cognos Connection で、「パブリック・フォルダーのプロパティーの設定 (Set properties for Public Folders)」アイコンをクリックします。
- 2. 「権限」タブで「追加」をクリックし、使用する名前空間をクリックし、「グル ープ」をクリックします。
- 3. 使用する名前空間から「EMM\_Report\_Access\_All\_Users」グループを追加しま す。
- 4. この権限から他のすべての役割およびグループを削除します。
- 5. 「読み取り」、「実行」、および「全探索」権限を付与します。
- 6. 「書き込み」および「ポリシー設定」権限を拒否します。
- 7. 「**OK**」をクリックします。

# パブリック・フォルダーのセキュリティー保護

Cognos のパブリック・フォルダーへのアクセスを確実に制御できるようにするに は、IBM Marketing Software 製品の各レポート・パック用に作成したフォルダー を含めて、すべてのパブリック・フォルダーに対してこのタスクを実行します。

#### このタスクについて

注: 下記の例で、*ff* は、使用する名前空間のユーザー・グループに割り当てる必要 のある任意のパブリック・フォルダーを表します。

パブリック・フォルダーを保護するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

「*fff* フォルダーのプロパティーを設定 (Set properties of *fff* folder)」を選択し、「権限」タブをクリックします。

デフォルトでは、権限は、すべてのフォルダーに対して指定した EMM\_Report\_Access\_All\_Users グループ権限です。

- 2. 「親エントリーから取得したアクセス権をオーバーライド」チェック・ボックス をクリックし、次のようにして異なるグループを指定します。
  - a. 「追加」をクリックし、使用する名前空間をクリックし、「グループ」をク リックし、「選択」をクリックし、必要なグループを追加します。
  - b. 必要なグループを追加して、「OK」をクリックします。
  - c. 他のすべてのグループを削除し、必要なアクセス権を新しいグループに付与 します。
  - d. 「**OK**」をクリックします。
- 選択したグループのユーザーがフォルダーに対する想定どおりのアクセス権限を 持っていることを確認します。そのグループのメンバーでないユーザーがこのフ ォルダーに対するアクセス権限を持っていないことを確認します。

# Cognos でのユーザー権限の検証

CJAP の実装が想定どおりに機能していることを確認します。

#### 始める前に

Cognos の認証は、cookie に基づいて実行されます。以下のテストを実行する場合、ユーザーを切り替える際は Cognos の cookie を削除し、新しいブラウザー・ウィンドウを開いてください。

#### このタスクについて

ユーザー権限を検証するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. **Report\_User\_Role** 役割を持つアカウントを使用して Cognos にログインしま す。
- 2. このユーザーのアクセス権限が次のようになっていることを確認します。
  - IBM Cognos Administration へのアクセス権限がないこと。

- セキュリティーで保護したパブリック・フォルダーへのアクセス権限がない こと。
- 「切り取り」、「貼り付け」、および「削除」ボタンが使用不可になっていること。
- コピーを実行できること。ただし、貼り付けは「個人用フォルダー」の下に あるそのユーザーのフォルダーに対してのみ実行できること。
- 「個人用フォルダー」の下にフォルダーを追加できるが、「パブリック・フォルダー」の下には追加できないこと。
- プロパティー・ファイルに指定した Marketing Platform グループのメンバー が、想定どおりのグループに含まれており、想定どおりの権限を持っていること を確認します。
- 4. 問題を解決するには、以下の情報が役立ちます。
  - ユーザーがレポートを使用できない場合は、そのユーザーが Cognos の Report\_User\_Role または Reports\_System\_User 役割を持っていることを 確認します。
  - ログを有効にするためにプロパティー・ファイルにログ・ファイルへのパス を指定します。
- Cognos Configuration で、「セキュリティー」 > 「認証」にナビゲートし、 CJAP 用に使用した名前空間で、「認証で選択可能」プロパティーを「False」 に設定します。

#### 環境からの CJAP 実装の削除

このタスクは、CJAP セキュリティーを実装した後に環境をロールバックして IBM Marketing Software 認証プロバイダーを使用することにした場合のみ、実行してください。

このタスクについて

CJAP 実装を削除するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 1. 以下のようにして、CJAP を実装するために実行した手順を逆に行います。
  - a. バックアップから reportSecurityConfig.properties ファイルをリストア します。
  - b. プロパティー・ファイルを同期させるには、IBM Marketing Software ユー ザー・インターフェースで、「設定」 > 「レポート・フォルダー権限の同 期」を選択します。
  - c. Cognos 名前空間の「**Everyone**」グループに「**Cognos Administrators**」役 割を追加します。

CJAP を構成した際には、この役割を Cognos 名前空間の「Everyone」グ ループから削除しました。この役割を再度 Cognos に追加する必要があり ます。そうしないと、Cognos の管理者権限を持つユーザーが存在しなくな ります。そのような状態になった場合は、新しいコンテンツ・データ・スト ア・データベースをセットアップするか、コンテンツ・ストアをバックアッ プ・データベースから復元する必要があります。 2. Cognos サービスを停止し、再始動します。
# 第8章 複数のパーティションに対応する IBM Cognos レポートの構成方法

Campaign、eMessage、または Interact を複数のパーティションで使用する場合 は、パーティションごとに IBM Cognos レポート・パッケージを構成する必要があ ります。 Campaign および eMessage でパーティションを構成した後、複数のパ ーティションでレポートを設定できます。

注: Campaign および eMessage におけるパーティションの構成については、 「*IBM Campaign* 管理者ガイド 」を参照してください。

レポートを複数のパーティション用に構成するには、partition\_tool.sh ユーティ リティーを使用します。 partition\_tool.sh ユーティリティーは、以下のタスクを 実行します。

- 元のレポート .zip アーカイブから XML ファイルをコピーします。
- XML ファイル内のパッケージ参照を、指定した新しいフォルダーの下にある新 しいパッケージを参照するように置換します。
- 新規ファイルを新しい .zip アーカイブに圧縮し、新規パーティション名をファ イル名の末尾に追加します。

partition\_tool.sh ユーティリティーの実行後、Cognos Connection 内に、指定し た名前を使用してフォルダーを作成し、新しいアーカイブをそのフォルダーにイン ポートします。次に、元のプロジェクト・ファイル (モデルが含まれるファイル) を コピーします。新規パーティションを指すようにそのデータ・ソースを変更してか ら、新しいフォルダーにこのモデルを発行できます。

# 複数パーティションのための前提条件

レポート・パーティション・ユーティリティー partition\_tool.sh は、UNIX シェ ル・スクリプトです。 IBM Cognos レポート・パッケージを複数のパーティション 用に構成するには、partition\_tool.sh ユーティリティーを使用します。

このユーティリティーを実行する前に、以下の手順を実行してください。

入力パラメーターの値の決定

レポート・パーティション・ツールには、2 つの入力パラメーターがあります。1 つは Cognos で作成するパーティション・フォルダーの名前、もう 1 つはコピー するレポート・アーカイブの場所です。

- Cognos で作成する予定の最上位パーティション・フォルダーの名前を決定します。この名前は、Cognos でパッケージ参照のために使用されます。例えば、「Partition2」とします。
- 元のレポート・アーカイブへのパスをメモします。例: IBM¥Unica¥ReportsPacksCampaign¥cognos<*version*>¥Unica Reports for Campaign.zip

Windows のみ: シェル・スクリプト・シミュレーターを入手します。

Cognos が Windows で実行されている場合、スクリプトをシェル・スクリプト・ シミュレーター (Cygwin など) から実行する必要があります。

Cognos Content Manager を実行しているコンピューターにシェル・スクリプト・ シミュレーターがインストールされていない場合には、そのダウンロードおよびイ ンストールを実行してから続行する必要があります。

## ファイル圧縮ユーティリティーがインストールされていることの確認

レポート・パーティション・ツールによって、新しいパーティション・レポート用 の .zip アーカイブが作成されます。この機能を有効にするには、ファイル圧縮ユー ティリティーが Cognos システムにインストールされていなければなりません。

Cognos Content Manager を実行しているコンピューターにファイル圧縮ユーティ リティーがインストールされていない場合には、そのダウンロードおよびインスト ールを実行してから続行する必要があります。

# レポート・パーティション・ツールを実行してレポート・アーカイブ **.zip** ファイルのコピーを作成する

レポートのアーカイブ .zip ファイルのコピーを作成する場合は、パーティションご とに partition\_tool.sh ユーティリティーを実行する必要があります。

#### このタスクについて

システム内のパーティションごとに、以下のステップを実行してください。

#### 手順

- シェルまたはシェル・シミュレーターで、 IBM¥Unica¥Platform¥tools¥cognos<*version*>¥bin ディレクトリーを参照しま す。
- パーティション名およびアーカイブ・パスのパラメーターに値を指定して、 partition tool.sh ユーティリティーを実行します。

例

**Campaign** レポート・アーカイブの場合

partition\_tool.sh Partition2
"IBM¥Unica¥ReportsPacksCampaign¥cognos<version>¥Unica Reports for
Campaign.zip"

eMessage レポート・アーカイブの場合

partition\_tool.sh Partition2
"IBM¥Unica¥ReportsPackseMessage¥cognos10¥Unica Reports for eMessage.zip"

注: パラメーター値にスペースが含まれる場合は、上記のアーカイブ・パスのように、パラメーター値を引用文字で囲む必要があります。

3. 新しい各 .zip ファイルを Cognos 配置ディレクトリーにコピーします。

上記の例で指定したパーティション名を使用する場合、新しい .zip ファイルの 名前は以下のようになります。

- Campaign の場合: Unica Reports for Campaign\_Partition2.zip
- eMessage の場合: Unica Reports for eMessage\_Partition2.zip
- 4. Cognos Connection を開きます。
- 5. 「パブリック・フォルダー」の下に、レポート・パーティション用のフォルダー を作成します。 例えば、Campaign Partition 2 を作成します。
- ステップ 5 で作成したフォルダーをインポート・ウィザードでターゲットの場所として選択して、新しい各.zip アーカイブをインポートします。

例に従った場合は、「Campaign Partition 2」フォルダーがターゲットになります。

# **Campaign** 用の Cognos モデルのコピーの作成

複数のパーティションで Campaign レポートを使用することを計画している場合 は、新しい Campaign レポート用に IBM Cognos データ・モデルのコピーを作成 する必要があります。また、正しいデータ・ソース名をモデルが参照するようにす る必要があります。

このタスクについて

Campaign 用の Cognos モデルのコピーを作成するには、以下のステップを実行します。

#### 手順

- 目的のパーティションの IBM Cognos データ・ソースが作成されていることを 確認します。そのパーティションのデータ・ソースがまだ作成されていない場合 は、15 ページの『IDBC データ・ソースの作成』を参照してください。
- 2. Framework Manager を使用して、Campaign プロジェクト・ファイルの CampaignModel.cpf を開きます。
- 「名前を付けて保存」を使用して CampaignModel プロジェクトをコピーし、それが使用されるパーティションを表す新しい名前を付けます。 例えば、 CampaignModelPartition2 にします。
- 4. 「プロジェクト・ビューアー」で、「データ・ソース」ノードを展開し、 「CampaignDS」を選択します。

「プロパティー」ペインがデフォルトで表示されない場合は、「表示」 > 「プ ロパティー」を選択してください。

5. 「名前」フィールドをクリックします。デフォルト値 (CampaignDS) を、この Campaign パーティションの正しいデータ・ソース名に変更します。 例えば、 CampaignDS\_partition2 にします。

- 「Content Manager データ・ソース」フィールドをクリックします。デフォルト値 (CampaignDS) を、ステップ 5 で指定した値に変更します。 例えば、CampaignDS\_partition2 にします。
- 7. 変更を保存します。
- パッケージを Content Store に公開します。公開ウィザードで「場所タイプを 選択」ウィンドウが表示されたら、前のタスクで Cognos Connection にレポー ト・アーカイブをインポートしたフォルダーを参照して選択します。

この例では、フォルダーは Campaign Partition 2 です。

# eMessage 用の Cognos モデルのコピーの作成

複数のパーティションで eMessage レポートを使用することを計画している場合 は、新しい eMessage レポート用に IBM Cognos モデルのコピーを作成する必要 があります。また、正しいデータ・ソース名をモデルが参照するようにする必要が あります。

このタスクについて

eMessage 用の Cognos モデルのコピーを作成するには、以下のステップを実行します。

### 手順

- 目的のパーティションの IBM Cognos データ・ソースが作成されていることを 確認します。そのパーティションのデータ・ソースがまだ作成されていない場合 は、15 ページの『IDBC データ・ソースの作成』を参照してください。
- Framework Manager を使用して、eMessage プロジェクト・ファイルの eMessageModel.cpf を開きます。
- 「名前を付けて保存」を使用して eMessageModel プロジェクトをコピーし、それが使用されるパーティションを表す新しい名前を付けます。 例えば、 eMessageModelPartition2 にします。
- 4. 「プロジェクト・ビューアー」で、「データ・ソース」ノードを展開し、 「eMessageTrackDS」を選択します。

「プロパティー」ペインがデフォルトで表示されない場合は、「表示」 > 「プロパティー」を選択してください。

- 「名前」フィールドをクリックします。デフォルト (eMessageTrackDS) を、この eMessage パーティションの新しいデータ・ソース名に変更します。 例えば、eMessageTrackDS\_partition2 に変更します。
- 「Content Manager データ・ソース」フィールドをクリックします。デフォル ト値 (eMessageTrackDS) を、ステップ 5 で指定した値に変更します。 例え ば、eMessageTrackDS\_partition2 に変更します。
- 7. 変更を保存します。
- パッケージを Content Store に公開します。公開ウィザードで「場所タイプを 選択」ウィンドウが表示されたら、前のタスクで Cognos Connection にレポー ト・アーカイブをインポートしたフォルダーを参照して選択します。

この例では、フォルダーは Campaign Partition 2 です。

# **IBM Marketing Software**「構成」ページでの各パーティションのレポー

# ト・プロパティーの更新

パーティションごとに、レポート・フォルダーの場所を指定するレポート・プロパ ティーのセットがあります。新しい最上位パーティション・フォルダーを表すスト リングを挿入することにより、各パーティションのレポート・プロパティーの値を 編集して、フォルダーの実際のパスを反映させる必要があります。

#### このタスクについて

レポート・プロパティーを更新するには、パーティションごとに以下のステップを 実行します。

#### 手順

- 1. IBM Marketing Software に platform\_admin ユーザーとしてログインしま す。
- 2. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 「キャンペーン」 > 「パーティション」 > partitionName > 「レポート」と 展開します。
- 各プロパティーの値を、レポート・フォルダーへの実際のパスを反映するように 編集します。

#### Campaign の例

Cognos Connection の新しいパーティション・フォルダーの名前が Campaign Partition 2 であれば、レポート・プロパティーの設定を以下のように編集します。

folder[@name='Campaign Partition 2']/

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティーを更新するには、次の値を変更します。

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']

変更後の値は、次のとおりです。

/content/folder[@name='Campaign Partition 2']/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/ folder[@name='cached']

#### eMessage の例

Cognos Connection の新しいパーティション・フォルダーの名前が Campaign Partition 2 であれば、レポート・プロパティーの設定を以下のように編集します。

folder[@name='Campaign Partition 2']/

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティーを更新するには、次の値を変更します。

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/
folder[@name='eMessageReports']

変更後の値は、次のとおりです。

/content/folder[@name='Campaign Partition 2']/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']

- 5. 変更を保存します。
- 6. パーティションごとに、ステップ3からステップ5までを繰り返します。

# 第9章 レポートをアップグレードする方法

IBM Marketing Software レポートの現行バージョンをアップグレードして、最新の機能を備えた状態に更新することができます。

IBM Marketing Software では、レポートは Marketing Platform が提供するコン ポーネントの 1 つです。

アップグレードする際、インストーラーおよびデータベース・スクリプトによって レポート機能のアップグレードも行われます。その際、Campaign および Interact レポート・スキーマの構成設定は保持されます。

## アップグレード・シナリオ

IBM Marketing Software アプリケーションをバージョン 8.x または 9.x からアッ プグレードするには、以下のトピックで説明されている手順を実行します。

- 『アップグレードの前提条件』
- 117 ページの『第 10 章 8.x または 9.x モデルのアップグレードおよび新しい レポートのインストール』

eMessage では、以下のアップグレード・パスがサポートされています。

- バージョン 8.6.0.4 以降のフィックスパックからバージョン 9.1 へ
- バージョン 9.0 以降のフィックスパックからバージョン 9.1 へ

注: eMessage レポートをカスタマイズしている場合は、8.6.0.4 以降のフィックスパ ックを使用するよりも 9.0 にアップグレードしたほうが、レポートのカスタマイズ 作業が少なくなります。

Oracle または IBM DB2 で eMessage を使用する場合は、マテリアライズ・ビュ ーを使用する必要があります。

# アップグレードの前提条件

IBM Marketing Software レポートのバージョンをアップグレードするには、その 前に、特定のタスクを実行する必要があります。

# ReportsSystem 役割を持つユーザー

バージョン 8.x からアップグレードするときに、ReportsSystem 役割を持つユーザーが既に存在する場合があります。このレポート作成ユーザーを構成する必要がある場合は、 13 ページの『ReportsSystem 役割を持つユーザーの構成』を参照してください。

#### IBM Cognos BI のアップグレード要件

ご使用の IBM Cognos BI のバージョンを、インストールしているレポート・パッ クでサポートされているバージョンにアップグレードする必要があります。サポー トされる IBM Cognos BI のバージョンについて詳しくは、「IBM Marketing Software Recommended Software Environments and Minimum System Requirements」 資料を参照してください。

このタスクのヘルプについては、IBM Cognos BI の資料を参照してください。

Cognos をアップグレードした後、このガイドのインストールに関する章で説明されている Cognos 構成タスクを実行してください。

# Cognos モデルおよびレポート・アーカイブのバックアップ要件

IBM Cognos BI システムで、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- モデル・サブディレクトリーのバックアップ: IBM Marketing Software レポート・パッケージ・インストーラーによってインストールされたアプリケーション・モデルを見つけ、モデル・サブディレクトリー全体をコピーしてバックアップを作成します。
- Cognos Connection の配置仕様エクスポート機能を使用して、アプリケーション・レポート・アーカイブのバックアップを作成します。 Content Store 全体をエクスポートします。
- Cognos ユーザー・インターフェースから、古いモデルおよびフォルダーを削除 します。これらをファイル・ディレクトリー構造や Cognos Framework Manager から削除しないでください。

#### eMessage レポートの追加要件

eMessage レポートの追加要件については、 11 ページの『eMessage レポートの前 提条件』を参照してください。

# ビュー、具体化されたビュー、またはテーブルをドロップする SQL の生成 および製品データベースでの SQL の実行

レポート SQL ジェネレーターを使用して、drop table SQL コマンドを生成し、そ れらを該当する製品システムのテーブル・データベースに対して実行します。レポ ート・スキーマをアップグレードする前に、この作業を実行します。

このタスクについて

注: この手順は、Campaign、eMessage、および Interact に適用されます。

以下の表に、Oracle、DB2、SQL Server を使用する場合に Campaign、eMessage、Interact でサポートされるオブジェクト・タイプを示しま す。

表 14. サポートされるオブジェクト・タイプ

	Campaign	eMessage	Interact
Oracle	ビュー	具体化されたビュー	ビュー
	具体化されたビュー		具体化されたビュー
	テーブル		テーブル

表 14. サポートされるオブジェクト・タイプ (続き)

	Campaign	eMessage	Interact
DB2	ビュー	具体化されたビュー	ビュー
	具体化されたビュー		具体化されたビュー
	テーブル		テーブル
SQL Server	ビュー	ビュー	ビュー
	テーブル		テーブル

## 手順

SQL コマンドを生成して実行するには、以下の作業を実行します。

- IBM Marketing Software に platform\_admin ユーザー (または「レポート SQL ジェネレーター」メニュー項目へのアクセス権限を持つ別のユーザー) と してログインします。
- オプション:前のステップで作成した JDBC データ・ソースにデフォルトの JNDI 名を使用しなかった場合のみ、以下を行います。
  - a. 「設定 | 構成 | レポート | スキーマ | *ProductName*」を選択します。
  - b. 前のステップで JDBC 接続に付けた JNDI 名に対応する JNDI プロパテ ィーのデフォルト値を変更します。
- 3. 「設定 | レポート SQL ジェネレーター」を選択します。
- 4. 「製品」フィールドで、適切な IBM アプリケーションを選択します。
- 5. 「スキーマ」フィールドで1つ以上のレポート・スキーマを選択します。
- 6. 「データベース・タイプ」を選択します。
- 「生成タイプ」フィールドで、適切なオプション (ビュー、具体化されたビュー、またはテーブル)を選択します。

注:

- 「データベース・タイプ」が Microsoft SQL Server に設定されている場合、具体化されたビューというオプションはありません。
- JNDI データ・ソース名が正しくないか、構成されていない場合、SQL ジェ ネレーターは、テーブルを作成する SQL スクリプトを検証できません。
- 8. 「Drop 文を生成しますか?」が「はい」に設定されていることを確認します。
- オプション: 生成される SQL を調べるには、「生成」をクリックします。
   SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ブラウザー・ウィンドウにその スクリプトが表示されます。
- 10. 「ダウンロード」をクリックします。

SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所の指定 を求めるプロンプトが出されます。「スキーマ」フィールドから単一のレポー ト・スキーマを選択した場合、スクリプト名はスキーマの名前と一致します (例えば eMessage\_Mailing\_Performance.sql)。複数のレポート・スキーマを選 択すると、スクリプト名には製品名のみ (Campaign.sql など) が使用されま す。名前の詳細なリストについては、 30 ページの『データソース別の SQL スクリプト』を参照してください。

- スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合は、 必ず、選択したスキーマを明確に示すものを使用してください。次に、「保 存」をクリックします。
- 12. 生成する必要があるテーブル削除スクリプトごとにステップ 5 から 11 を繰り 返します。

注: Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。デ ータ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

スクリプトの検証を無効化することが必要な場合があります。例えば、おそら く Marketing Platform は IBM アプリケーション・データベースに接続でき ないものの、とにかくスクリプトは生成する場合などです。検証を無効にする には、データ・ソース・フィールドからデータ・ソース名を消去します (上記 ステップ 3 を参照)。スクリプトを生成する際に、データ・ソースに接続でき ないという警告を SQL ジェネレーターが表示しますが、それでも SQL スク リプトは生成されます。

テーブル削除 SQL を、製品のシステム・テーブル・データベースで実行します。この作業を、レポートをアップグレードしている製品ごとに繰り返します。

# Marketing Platform でのレポート・スキーマのアップグレード

IBM Marketing Software マスター・インストーラーをレポート・パック・インス トーラーと共に実行し、レポート・スキーマおよびレポート統合構成プロパティー をアップグレードする必要があります。

このタスクについて

Marketing Platform がインストールされているコンピューター上で IBM Marketing Software マスター・インストーラーと、該当するレポート・パッケー ジ・インストーラーを実行し、インストール・オプションとして「IBM Marketing Software 製品 レポート・スキーマ」を選択します。

レポート・スキーマをアップグレードした後で、以下のステップを実行してアップ グレードを検証できます。

#### 手順

- 1. IBM Marketing Software システムに platform\_admin ユーザーとしてログイ ンします。
- 2. 「設定」 > 「構成」を選択します。
- 3. 「レポート」 > 「スキーマ」 > 「製品名」を展開します。

アプリケーションのスキーマ構成カテゴリーがアップグレードされなかった場 合、Marketing Platform でレポートはまだアップグレードされていません。 注: Marketing Operations をアップグレードする場合、このステップをスキッ プしてください (Marketing Operations にはレポート・スキーマがありません)。

4. 「レポート」 > 「統合」を展開します。

スキーマ構成カテゴリーがアップグレードされていて、使用している現行レポー ト・インストールが 8.6.0 より前である場合、Cognos 10 構成の新しいカテゴ リーが表示されます。「Cognos 8」カテゴリーは無効になっていますが、 Cognos 10 の構成プロパティーの設定を支援するために、参照の目的で保持さ れています。レポートのアップグレードを完全に構成およびテストした後、「カ テゴリーの削除」リンクを使用して、Cognos 8 構成カテゴリーを削除してくだ さい。

# Marketing Platform でのレポート・テンプレートのアップグレード

レポートをアップグレードするには、その前に、Marketing Platform でレポート・ テンプレートをアップグレードする必要があります。 Marketing Operations のレ ポートをアップグレードしている場合、Marketing Operations にはレポート・スキ ーマがないので、レポート・テンプレートのアップグレードは行わないでくださ い。

このタスクについて

レポート・パック・インストーラーを実行した後で、以下の手順を実行します。

#### 手順

- Unica¥製品ReportsPack¥schema ディレクトリーを参照して、 templates\_sql\_load.sql スクリプトを見つけ、そのスクリプトを Marketing Platform システム・テーブル・データベースで実行します。
- 2. Marketing Platform が実行中であることを確認します。
- 3. 管理者特権を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログインしま す。
- 4. 「設定」>「ユーザー」の下で、自分に「**ReportsSystem**」役割を付与します。 その後、ログアウトして、再びログインします。

# IBM Marketing Software 統合コンポーネントのアップグレード

IBM Marketing Software 統合コンポーネントをアップグレードするには、Cognos Content Manager がインストールされているコンピューター上で、インストーラー を実行する必要があります。

このタスクについて

IBM Marketing Software 統合コンポーネントをアップグレードするには、以下の 手順を実行します。

## 手順

- Cognos Content Manager が実行されている IBM Cognos BI システムで、次の IBM Marketing Software インストーラーを単一のディレクトリーにダウン ロードまたはコピーします。
  - IBM Marketing Software マスター・インストーラー
  - Marketing Platform インストーラー
  - IBM Marketing Software アプリケーション・レポート・パッケージ・イン ストーラー
- IBM Marketing Software マスター・インストーラーを実行します。 Marketing Platform およびレポート・パッケージのサブインストーラーが順番 に起動されます。
- 3. 最初の「製品」ウィンドウで、Marketing Platform およびレポート・パッケー ジの両方のオプションが選択されていることを確認します。
- 4. 「Platform データベース接続」ウィンドウで、Marketing Platform システム・ テーブルに接続するために必要な情報を指定します。
- 「プラットフォーム・インストール・コンポーネント (Platform Installation Components)」ウィンドウで、「Reports for IBM Cognos」オプションを選択 し、その他のオプションの選択を外します。
- Marketing Platform インストーラーで、JDBC ドライバーへのパスの入力を求 めるプロンプトが出されたら、レポートの初回インストール時に Cognos シス テムにコピーした JDBC ドライバーの絶対パスを入力してください。

詳しくは、 21 ページの『Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手』を参照してください。

 Marketing Platform インストーラーで IBM Cognos インストール済み環境の 場所の入力を求めるプロンプトが出されたら、IBM Cognos インストール済み 環境の最上位ディレクトリーを入力するか、参照します。

このフィールドで提供されるデフォルト値は、ご使用の IBM Cognos システム のファイル構造に基づかない静的な値です。

- レポート・パッケージ・インストーラーにインストール・オプションが表示されたら、「IBM Marketing Software [製品] 用の IBM Cognos パッケージ」オプションを選択し、レポート・スキーマのオプションの選択を外します。このインストール・オプションにより、レポート・アーカイブが Cognos コンピューターにコピーされます。このアーカイブは、後ほど手動でインポートします。
- 9. インストーラーが終了したら、Marketing Platform データベースの JDBC ドラ イバーを、IBM Cognos の webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥1ib ディレクトリーに コピーします。

ドライバーは必ずコピーしてください。ドライバーのカット・アンド・ペースト は行わないでください。

# eMessage および Interact のルックアップ・テーブルの更新

eMessage および Interact のレポートを使用する場合、ルックアップ・テーブルを 更新する必要があります。データベース・クライアントを使用して、システム・テ ーブル・データベースに対して特定のアップグレード・スクリプトを実行します。

このタスクについて

使用している製品に応じて、以下のいずれかの手順を実行します。

#### 手順

 eMessage をバージョン 8.6.0.4 または 9.0 からアップグレードする場合: レポ ート・パック・インストール済み環境の ReportsPackCampaign¥tools ディレク トリーから、uare\_lookup\_create\_DB\_type.sql スクリプトを実行します。

DB\_type は、Campaign のインストール済み環境に該当するデータベース・タイプです。

- Interact の場合、以下の手順を実行します。
  - レポート・パック・インストール済み環境の ReportsPackInteract¥tools ディレクトリーで、uari\_lookup\_create\_DB\_type.sql スクリプトを見つけます。

DB\_type は、Campaign のインストール済み環境に該当するデータベース・ タイプです。

2. Interact 設計時データベースに対して、スクリプトの該当するバージョンを 実行します。

# 製品データベースでのビューまたはテーブルのアップグレード

レポートのバージョンをアップグレードするには、更新した SQL を生成し、製品 データベース内のビューまたはテーブルをアップグレードする必要があります。

#### このタスクについて

注: eMessage の場合、この作業はスキップしてください。

製品データベース内のビューまたはテーブルをアップグレードするには、以下の手 順を実行します。

#### 手順

- 1. 28 ページの『ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成』の説明に従っ て、更新 SQL を生成します。
- 2. 以前に生成した SQL スクリプトを製品システム・テーブル・データベースに対して実行します。
- 3. Campaign および Interact では、レポート・パックに付属している新しい SQL および SQL スクリプトを使用して、レポート・ビューまたはレポート・テーブ ルを作成します。

# 第 10 章 8.x または 9.x モデルのアップグレードおよび新しいレ ポートのインストール

レポートをアップグレードするために実行する必要のある最初のステップは、8.x または 9.x モデルのアップグレードと新しいレポートのインストールです。

#### このタスクについて

注:以下の手順で、CognosN は Cognos のバージョン番号を指しています。

8.x または 9.x モデルをアップグレードし、新しいレポートをインストールするに は、以下の手順を実行します。

#### 手順

- 1. Unica¥ProductNameReportsPack¥CognosN ディレクトリーを参照します。
- 2. レポート・アーカイブ .zip ファイル (Unica Reports for Campaign.zip など) を Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。

デフォルトの場所は IBM Cognos インストール済み環境の下の配置ディレク トリーです。このディレクトリーは Cognos Content Manager と一緒にイン ストールされた Cognos Configuration ツールで指定されます (例: cognos¥deployment)。

分散 IBM Cognos 環境では、このディレクトリーは Content Manager を実 行しているシステム上にあります。

- 3. Campaign モデルのアップグレード前のバージョンを Framework Manager がインストールされているサーバー上のディレクトリーにコピーします。
  - a. Reports Pack インストール・ディレクトリーと Framework Manager が 異なるサーバー上にある場合、アップグレード後の cognos10¥model ディ レクトリーを Reports Pack インストール・ディレクトリーの下で見つけ ます。
  - b. 該当する upgrade.xml ファイルを Framework Manager がインストール されているサーバー上のディレクトリーにコピーします。
  - c. (旧モデルから) 更新したモデルの translation フォルダーを、Framework Manager がインストールされているサーバー上のディレクトリーにコピー します。
  - d. 置換を求めるプロンプトが出されたら、「はい」をクリックします。
- オプション: IBM Marketing Software 製品を Windows のデフォルトの C:¥Unica ディレクトリーにインストールしなかった場合は、アップグレード・ スクリプトを更新する必要があります。

ユーザーにとって必要な言語ごとに、各スクリプト内のファイル・パスを変更 します。例えば、次のようにします。

#### インストール・ディレクトリー

¥ReportsPackCampaign¥cognosN¥CampaignModel¥
translations¥L¥translations.txt

L は、以下に示すような 2 文字の言語標識です。

- fr
- de
- es
- it
- ja
- ko
- pt
- ru
- zh
- zh-tw

以下に示す、製品のアップグレード・スクリプトを編集します。

#### Campaign

- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade911to9112.xml
- upgrade912to100.xml

#### eMessage

- upgrade86to90.xml
- upgrade8604to91.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- バージョン 9.1.0.x.0.0 (x >= 2) からアップグレードする場合は、以下のア ップグレード・スクリプトを編集します。
  - 9.1.0.2 レポート・フィーチャー・パック 1 を適用していない場合: upgrade9102to911.xml
  - 9.1.0.2 レポート・フィーチャー・パック 1 を適用している場合: upgrade910201to911.xml

#### Interact

- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

upgrade911to9112.xml

#### Leads

- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml

#### Campaign **&** Marketing Operations

- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade911to9112.xml

#### Marketing Operations

- upgrade85to86.xml
- バージョン 8.6 からバージョン 9.0 にアップグレードする場合は、データ ベース・タイプに応じて以下のアップグレード・スクリプトを編集します。
  - DB2 の場合: upgrade86to90\_DB2.xml
  - Oracle の場合: upgrade86to90\_Oracle.xml
  - SQL Server の場合: upgrade86to90\_Sqlserver.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade911to9112.xml

#### **Distributed Marketing**

- upgrade86to90.xml
- upgrade911to9112.xml
- 5. Cognos Connection を開きます。
- 「Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)」 > 「設定」 > 「コンテンツの管理」の順に選択します。
- ア・ツールバーの「インポートの新規作成」ボタン をクリックし、レポート・フォルダーをインポートします。
- 8. Cognos Framework Manager を開いて、アップグレード元のバージョンのプ ロジェクトを開きます。
- 9. 「プロジェクト」 > 「スクリプトの実行」を選択します。
- 新しいバージョンの製品のスクリプトを実行します。すべてのスクリプトは、 IBM Marketing Software 製品インストール済み環境の *ProductName*ReportsPack¥cognos*N*¥*ProductName*Model ディレクトリー内にあり ます。

注: アップグレード元である 8.x または 9.x バージョンについて、以下の点を 検討する必要があります。

- 8.6 以外のどのバージョンからのアップグレードでも、 preUpgrade\_86\_fromanyversion.xml スクリプトを実行する必要があります。
- レポートをソース・バージョンから宛先バージョンにアップグレードできません。例えば、レポートをバージョン 9.0.0 からバージョン 9.1.1 にアップグレードするには、まずバージョン 9.0.0 からバージョン 9.1 にアップグレードし、次にバージョン 9.1 からバージョン 9.1.1 にアップグレードする必要があります。
- eMessage レポートの場合のみ、バージョン 8.6.0.4 以降から 9.1 に直接ア ップグレードする必要があります。

#### Campaign

- preUpgrade\_86\_fromanyversion.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade911to9112.xml
- upgrade912to100.xml

#### eMessage

- upgrade86to90.xml
- upgrade8604to91.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- バージョン 9.1.0.x.0.0 (x >= 2) からアップグレードする場合は、以下のア ップグレード・スクリプトを編集します。
  - 9.1.0.2 レポート・フィーチャー・パック 1 を適用していない場合: upgrade9102to911.xml
  - 9.1.0.2 レポート・フィーチャー・パック 1 を適用している場合: upgrade910201to911.xml

#### Interact

- preUpgrade\_86\_fromanyversion.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade911to9112.xml
- upgrade912to9121.xml

#### Leads

- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml

upgrade91to911.xml

### Campaign & Marketing Operations

- upgrade86to90.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade911to9112.xml

#### Marketing Operations

- upgrade85to86.xml
- バージョン 8.6 からバージョン 9.0 にアップグレードする場合は、データ ベース・タイプに応じて以下のアップグレード・スクリプトを編集します。
  - DB2 の場合: upgrade86to90\_DB2.xml
  - Oracle の場合: upgrade86to90\_Oracle.xml
  - SQL Server の場合: upgrade86to90\_Sqlserver.xml
- upgrade90to91.xml
- upgrade91to911.xml
- upgrade911to9112.xml

#### **Distributed Marketing**

- upgrade86to90.xml
- upgrade911to9112.xml
- 11. eMessage の場合のみ: eMessage レポートをアップグレードするには、以下の 手順を実行します。

注: データベースが DB2 である場合、ステートメントの終了文字を; (セミコ ロン) から! (感嘆符) に変更します。

- a. *Campaign\_ReportPack\_Installer\_Home*¥Cognos10¥emessage-dd1¥*DB Type*¥Upgrade を参照します。
- b. 以下のスクリプトを、示されている順序で実行します。
  - 8.6.0.4 以降から 9.1 にアップグレードする場合:

acer\_tables\_upgrade\_DB 名.sql 基本バージョン名を検索して、以下の スクリプトを実行します。

#### --8.6.0.4 Updates--

• 9.0 以降から 9.1 にアップグレードする場合:

acer\_tables\_upgrade\_DB 名.sql 基本バージョン名を検索して、以下の スクリプトを実行します。

#### --9.0.x Updates--

acer\_indexes\_upgrade\_DB 名.sql 基本バージョン名を検索して、以下 のスクリプトを実行します。

#### --9.0.x Updates--

• 9.1.0.x.0.0 (x >= 0) から 9.1.1 にアップグレードする場合:

acer\_tables\_upgrade\_DB 名.sql 基本バージョン名を検索して、以下の スクリプトを実行します。

--9.1.0.x 更新 (9.1.0 Feature Pack 1 アップグレードは適用外)--

注: 9.1.0 フィーチャー・パック 1 を適用した場合、テーブルや索引の アップグレード・スクリプトを実行する必要はありません。

c. Campaign\_ReportPack\_Installer\_Home¥Cognos10¥emessage-dd1¥DB Type を 参照し、以下のスクリプトを実行します。

acer\_tables\_upgrade\_DB 名.sql

注: acer\_scripts\_DB 名.sql スクリプトは、レポートのフレッシュ・イン ストールおよびアップグレードのどちらの場合にも実行する必要がありま す。

注: Microsoft SQL Server を使用している場合は、このステップを実行す る前に、8.6.0.4 バージョンのプロシージャーを削除する必要があります。

- d. Reports SQL Generator を使用して、レポート・ビュー・スクリプトを生成します。 Microsoft SQL Server の場合、ビューを生成します。 Oracle および IBM DB2 の場合、具体化されたビューを作成します。
- e. ストアード・プロシージャーを実行およびスケジュールします。

注: レポートのパフォーマンスを適切なものにするには、ストアード・プロ シージャーが定期的に実行されるようにスケジュールする必要がありま す。 eMessage ストアード・プロシージャーについて詳しくは、 41 ペー ジの『eMessage の場合のみ: ストアード・プロシージャーをスケジュール して実行する方法』を参照してください。

- 12. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
- 13. すべての IBM Marketing Software 製品の場合、以下のステップを実行しま す。
  - a. 「ファイル」 > 「レポート・パッケージ」を参照します。
  - b. ご使用の製品に従って、該当するレポート・パッケージを選択し、「**OK**」 をクリックします。
  - c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
  - d. レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリック します。
- 14. レポートを実行して、アップグレードをテストします。

# 第11章 レポート作成の構成プロパティー

IBM Marketing Software のレポート作成の構成プロパティーは、「設定」 > 「構 成」 > 「レポート」にあります。

レポートを生成するために、IBM Marketing Software スイートを、ビジネス・イ ンテリジェンス・アプリケーション IBM Cognos と統合できます。「統合」 > 「Cognos」プロパティーを使用して、IBM Cognos システムを識別します。また、 Campaign、eMessage、Interact で追加のプロパティーを構成して、レポート作成ス キーマをセットアップし、カスタマイズする必要があります。

# レポート | 統合 | Cognos [バージョン]

IBM Marketing Software スイートは、IBM Cognos と統合してレポートを生成します。

このページには、この IBM システムで使用される URL などのパラメーターを指 定するプロパティーが表示されます。

#### 統合名

説明

読み取り専用です。レポートを表示するために IBM Marketing Software によって使用されるサード・パーティーのレポート作成/分析ツールが IBM Cognos となるように指定します。

デフォルト値

Cognos

## ベンダー

説明

読み取り専用です。IBM Cognos が、「統合名」プロパティーで指定した アプリケーションを提供する会社名であることを示します。

デフォルト値

Cognos

#### バージョン

説明

読み取り専用です。「統合名」プロパティーによって指定されるアプリケー ションの製品バージョンを示します。

デフォルト値

<version>

# 有効

説明

```
Suite で IBM Cognos を有効にするかどうかを指定します。
```

```
デフォルト値
```

False

有効な値

True | False

## 統合クラス名

説明

読み取り専用です。「統合名」プロパティーで指定されたアプリケーション に接続する際に使用する統合インターフェースを作成する Java クラスの完 全修飾名を示します。

デフォルト値

com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration

#### ドメイン

説明

Cognos サーバーが実行されている、完全修飾の会社ドメイン・ネームを示 します。例: myCompanyDomain.com

会社でサブドメインを使用している場合には、このフィールドの値には該当 するサブドメインも含める必要があります。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

1024 文字未満のストリング。

## ポータル URL

説明

IBM Cognos Connection ポータルの URL を指定します。「ドメイン」プ ロパティーで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメ イン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: http:// MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos<*version*>/cgi-bin/ cognos.cgi

この URL は、IBM Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で確認できます。

デフォルト値

http://[CHANGE ME]/cognos<バージョン>/cgi-bin/cognos.cgi

有効な値

適切な形式の URL。

# ディスパッチ URL

説明

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。「ドメイン」プロ パティーで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: http:// MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch

この URL は Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

## デフォルト値

http://[CHANGE ME]:9300/p2pd/servlet/dispatch

Cognos Content Manager のデフォルトのポート番号は 9300 です。指定 したポート番号が、Cognos インストール済み環境で使用されているポート 番号と同じであることを確認してください。

## 有効な値

適切な形式の URL。

## 認証モード

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Authentication Provider を使用す るかどうか、つまり認証を Marketing Platform で行うかどうかを指定しま す。

デフォルト値

#### 匿名

有効な値

- 匿名:認証が無効であることを意味します。
- 認証済み: IBM システムと Cognos システムとの間の通信はマシン・レベルで保護されます。1 人のシステム・ユーザーを構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。慣例的に、このユーザーには「cognos\_admin」という名前が付きます。
- ユーザーごとに認証済み:システムによって、個別のユーザー資格情報が 評価されます。

## 認証名前空間

説明

読み取り専用です。IBM Authentication Provider の名前空間です。

デフォルト値

UNICA

## 認証ユーザー名 (Authentication user name)

#### 説明

レポート作成システム・ユーザーのログイン名を指定します。IBM アプリ ケーション、Cognos が Unica Authentication Provider を使用するよう構 成されている場合に、このユーザーとして Cognos にログインします。こ のユーザーは、IBM Marketing Software へのアクセス権も持っています。

この設定は、「認証モード」プロパティーが 認証済み に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

cognos\_admin

# 認証データ・ソース名 (Authentication datasource name)

説明

Cognos ログイン資格情報を保持するレポート作成システム・ユーザーのデ ータ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

Cognos

## フォーム認証を有効にする

説明

フォームに基づく認証を有効にするかどうかを指定します。次のいずれかの 条件に当てはまる場合に、このプロパティーを True に設定します。

- IBM Marketing Software が IBM Cognos アプリケーションと同じドメ インにインストールされていない。
- IBM Marketing Software アプリケーションと IBM Cognos の両方が同 じマシンにインストールされている場合であっても、IBM Cognos が (IBM Marketing Software アプリケーションへのアクセスに使用されて いる) 完全修飾ホスト名の代わりに、(同じネットワーク・ドメイン内の) IP アドレスを使用してアクセスされている場合。

ただし、値が True の場合には、Cognos Connection へのログイン・プロ セスによってログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBM Cognos と IBM Marketing Software で SSL 通信を使用するように構成されていな いと、機密保護機能がない状態になってしまいます。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示 すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表 示されます。このため、IBM Cognos と IBM Marketing Software は、同 じドメインにインストールする必要があります。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

# レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成

SQL スクリプトは、レポート・スキーマに関するビューやテーブルを作成します。 「レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成」プロパティーは、 ビューやテーブルの名前に関する情報を提供します。

## テーブル**/**ビューの名前

#### 説明

このレポート作成スキーマに生成される SQL スクリプトによって作成され ることになるビューまたはテーブルの名前を指定します。標準またはデフォ ルトのテーブル名/ビュー名を変更しないのが、ベスト・プラクティスとな ります。変更する場合には、IBM Cognos Framework Manager の Cognos モデルにあるビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンス・レベルに新しいレポート作成スキーマを作成する場 合には、新しいレポート作成テーブル/ビューすべての名前を指定しなけれ ばなりません。

デフォルト値

スキーマによって異なります。

#### 有効な値

以下の制約事項を満たすストリング。

- 18 文字より長くすることはできません。
- すべて大文字を使用する必要があります。

以下の命名規則を使用する必要があります。

- 名前の先頭は「UAR」でなければなりません。
- IBM Marketing Software アプリケーションを表す 1 文字のコードを追 加します。コードのリストについては、後続部分を参照してください。
- 下線文字を追加します。
- テーブル名を追加します。テーブル名には、オーディエンス・レベルを 示す1つ以上の文字コードを含めます。
- 末尾は、下線文字にします。

SQL ジェネレーターは、適切な場合には時間ディメンション・コードを追加します。以下のコードのリストを参照してください。

例えば、UARC\_COPERF\_DY は Campaign のオファー・パフォーマンスの日単 位のレポート作成ビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM Marketing Software アプリケーション・コードのリストを示 します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレーターによって追加される時間ディメンション・コードの リストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY
- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU
- 年: YR

# レポート | スキーマ | Campaign

「レポート | スキーマ |Campaign」プロパティーは、Campaign データベースを識別するデータ・ソースに関する情報を提供します。

## 入力データ・ソース (JNDI)

説明

Campaign データベース、特にシステム・テーブルを示す JNDI データ・ ソースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用してレポート作成テー ブルを作成するスクリプトを生成する場合には、このデータ・ソースがなけ ればなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポ ート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証 を実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、Campaign ビューまたはレ ポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベ ース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

# レポート | スキーマ | Campaign | オファー・パフォーマンス

オファー・パフォーマンス・スキーマでは、すべてのオファーに関する、およびキャンペーンごとのオファーに関するコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。デフォルトでは、このスキーマは、すべての期間における「サマリー」ビュー(またはテーブル)を生成するように構成されています。

## オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レ ベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 : ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ContactHistory

#### 詳細なコンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_DtlContactHist

#### レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

**UA ResponseHistory** 

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期 間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | **Campaign** | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メト リック]

> レポート | スキーマ | **Campaign** | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリッ ク] プロパティーは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまた はオファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマにコンタクト・メトリックを 追加する場合に使用します。

# 列名

説明

「入力列名」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたは テーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

## 関数

説明

コンタクト指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count, count distinct, sum, min, max, average

### 入力列名

説明

このレポート作成スキーマに追加するコンタクト指標が入っている列の名前 です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルの列の名前。

#### 制御処理フラグ

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・ グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成 スキーマのそれぞれのコンタクト指標には 2 つの列がなければなりませ ん。1 つの列はコントロール・グループのメトリックを表し、もう 1 つの 列はターゲット・グループのメトリックを表します。「制御処理フラグ」の 値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲッ ト・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

# レポート | スキーマ | **Campaign** | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メト リック]

レポート | スキーマ | **Campaign** | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリッ ク] プロパティーは、レポートに含めるレスポンス・メトリックをキャンペーン・ パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファー・パフォーマンス・レポー ト作成スキーマに追加する場合に使用します。

#### 列名

#### 説明

「入力列名」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたは テーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

## 関数

## 説明

レスポンス指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

count

#### 有効な値

count, count distinct, sum, min, max, average

### 入力列名

説明

このレポート作成スキーマに追加するレスポンス指標が入っている列の名前 です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

レスポンス履歴テーブルの列の名前。

#### 制御処理フラグ

#### 説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グル ープが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキ ーマのそれぞれのレスポンス指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンスを表し、もう 1 つの列はタ ーゲット・グループのレスポンスを表します。「制御処理フラグ」の値によ って、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グル ープを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

# レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・パフォーマンス

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマでは、キャンペーン、キャンペーン・オ ファー、キャンペーン・セルの各レベルにおけるコンタクトとレスポンスの履歴指 標が提供されます。

## オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レ ベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

#### 有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 : ColumnX,ColumnY

## コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ContactHistory

## 詳細なコンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_DtlContactHist

#### レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ResponseHistory

#### 時間経過に伴う変動

#### 説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期 間を指定します。

デフォルト値

## 日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

# レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細

キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スキーマは、キャンペーン詳細レスポ ンスをレスポンス・タイプとオファー・データごとに詳細化した、レポート作成を サポートしています。このスキーマ・テンプレートでは、カスタムのレスポンス・ タイプごとに、キャンペーンと、キャンペーンによってグループ化されたオファー に関して別々のレスポンス数が提供されます。

このスキーマ

## レスポンス履歴テーブル

#### 説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ResponseHistory

# レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 | 列 | [レスポンス・タイプ]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 | 列 | [レスポンス・タイプ] プロパティーは、レポートに含めるカスタム・レス ポンス・タイプをレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

#### 列名

説明

「レスポンス・タイプ・コード」フィールドで指定した列に関して、レポー ト作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

## レスポンス・タイプ・コード

説明

指定したレスポンス・タイプのレスポンス・タイプ・コードです。この値 は、UA\_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列で保持されま す。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

レスポンス・タイプ・コードの例を次に示します。

- EXP (調査)
- CON (考慮)
- CMT (コミット)
- FFL (実行)
- USE (使用)
- USB (アンサブスクライブ)
- UKN (不明)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのレスポンス・ タイプ・コードもさらに使用できます。

#### 制御処理フラグ

#### 説明

IBM Marketing Software Reports Pack で提供されている標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれ るカスタム・レポートを使用する場合には、レポート作成スキーマのそれぞ れのレスポンス・タイプには 2 つの列がなければなりません。1 つの列は

コントロール・グループのレスポンス・タイプを表し、もう 1 つの列はタ ーゲット・グループのレスポンス・タイプを表します。「制御処理フラグ」 の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲッ ト・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・ グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

# レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・オファーのコンタク ト・ステータスの詳細

「キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細」スキーマは、キャン ペーン詳細コンタクトをコンタクト・ステータスのタイプとオファー・データごと に詳細化した、レポート作成をサポートしています。このスキーマ・テンプレート では、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプごとに、キャンペーンと、キャ ンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のコンタクト数が提供さ れます。

デフォルトでは、このスキーマを使用する Campaign レポートのサンプルは存在しません。

## オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例: ColumnX,ColumnY

## コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ContactHistory

## 詳細なコンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_DtlContactHist

# レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細 | 列 | [コンタクト・ステータス]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステ ータスの詳細 | 列 | [コンタクト・ステータス] は、レポートに含めるコンタク ト・ステータスをレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

#### 列名

説明

「コンタクト・ステータス」フィールドで指定した列に関して、レポート作 成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

## コンタクト・ステータス・コード

説明

コンタクト・ステータス・コードの名前です。この値は、UA\_ContactStatus テーブルの ContactStatusCode 列で保持されます。

#### デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

コンタクト・ステータス・タイプの例を次に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのコンタクト・ ステータス・タイプもさらに使用できます。

# レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [ キャンペーン・カスタム列]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [キャ ンペーン・カスタム列] プロパティーは、レポートに含めるカスタム・キャンペー ン属性をレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

## 列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

#### 属性 ID

説明

```
UA_CampAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。
```

デフォルト値

0

#### 値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

#### 有効な値

StringValue, NumberValue, DatetimeValue

このキャンペーン属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボ ックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

# レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [ オファー・カスタム列]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [オフ アー・カスタム列] プロパティーは、レポートに含めるカスタム・オファー属性を レポート・スキーマに追加する場合に使用します。

追加するために使用するフォーム

## 列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

#### デフォルト値

[CHANGE ME]

### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

# 属性 ID

説明

```
UA_OfferAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。
```

デフォルト値

0

#### 値タイプ

説明

```
オファー属性のデータ型です。
```

デフォルト値

StringValue

#### 有効な値

StringValue、 NumberValue、 DatetimeValue

```
このオファー属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。
```

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボック ス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。
# レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [ セル・カスタム列]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [セ ル・カスタム列] プロパティーは、レポートに含めるカスタム・セル属性をレポー ト・スキーマに追加する場合に使用します。

#### 列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

#### 有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペー スを入れることはできません。

#### 属性 ID

説明

```
「UA_CellAttribute」テーブルの属性の「AttributeID」列の値です。
```

デフォルト値

0

#### 値タイプ

説明

セル属性のデータ型です。

```
デフォルト値
```

StringValue

#### 有効な値

StringValue, NumberValue, DatetimeValue

# レポート | スキーマ | Interact

Interact レポート作成スキーマは、設計時、実行時、学習の 3 つの異なるデータベースを参照します。「レポート | スキーマ | Interact」プロパティーは、これらの データベースのデータ・ソースの JNDI 名を指定する場合に使用します。

SQL レポート生成ツールを使用してレポート作成テーブルを作成するスクリプトを 生成する場合には、このページで指定するデータ・ソースがなければなりません。 SQL 生成ツールは、こうしたデータ・ソースがなくともレポート作成ビューを作成 するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。 データ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成のテーブル に SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと一致しなけれ ばなりません。

#### 対話設計データ・ソース

説明

Interact 設計時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定しま す。このデータベースは、Campaign システム・テーブルでもあります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

#### 対話ランタイム・データ・ソース

説明

Interact 実行時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

### 対話学習データ・ソース

説明

Interact 学習データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractLearningDS

### レポート | スキーマ | Interact | 対話実績

対話実績スキーマは、チャネル、チャネル・オファー、チャネル・セグメント、チ ャネル・インタラクション・ポイント、対話式セル、対話式セル・オファー、対話 式セル・インタラクション・ポイント、対話式オファー、対話式オファー・セル、 対話式オファー・インタラクション・ポイントの各レベルにおいて、コンタクトと レスポンスの履歴指標を生成します。

#### オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

#### 有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 : ColumnX,ColumnY

詳細なコンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル の詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベル のレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA\_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期 間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効な値

時間、日、週、月、四半期、年

# レポート | スキーマ | eMessage

レポート | スキーマ | eMessage プロパティーは、eMessage トラッキング・テ ーブルを示すデータ・ソースの名前を指定します。このトラッキング・テーブル は、Campaign システム・テーブル内にあります。

### eMessage トラッキング・データ・ソース (JNDI)

説明

eMessage トラッキング・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指 定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル 内にあります。SQL レポート生成ツールを使用して、レポート作成テーブ ルを作成するスクリプトを検証する場合には、このデータ・ソースがなけれ ばなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポー ト作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を 実行できません。 このデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成 のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイ プと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

### Campaign | partitions | partition[n] | reports

**Campaign** | partitions | partition[n] | reports プロパティーは、さまざまなタ イプのレポートのフォルダーを定義します。

#### offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペイン の「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上 にリストされる満杯の (拡張された) オファー・レポートの仕様を入れるフ ォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されま す。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']

#### segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、セグメントの「分析」タブにリストされるセグメント・レポートを入れるフォルダーの場所を 指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']

#### offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、オファーの「分析」タ ブにリストされるオファー・レポートを入れるフォルダーの場所を指定しま す。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']

#### segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ

上にリストされる満杯の (拡張された) セグメント・レポートの仕様を入れ るフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定され ます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']

#### analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティーは、レポート仕様を格納するルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']

#### campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分析」タブにリストされるキャンペーン・レポートを入れるフォルダーの場所 を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']

#### campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の(拡張された)キャンペーン・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']

#### campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage
Reports']

### campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

```
Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。
```

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールする場合のみ適用可能です。

### interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

「対話式チャネル」分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダ ー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific
Reports']/folder[@name='interactive channel']

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールする場合のみ適用可能です。

# 第 12 章 Cognos レポートの書式設定

IBM Cognos レポート統合コンポーネントには、グローバル・レポート・スタイ ル・シート (GlobalReportStyles.css) が含まれています。

これらのスタイルを、手動での追加書式設定とともに、IBM Marketing Software アプリケーションのレポートに対して使用してください。この方法により、新規レ ポートのスタイルを、IBM Marketing Software レポート・パッケージ内のレポー トで使用されているスタイルと一致させることができます。

レポートを作成するとき、スタイルによってはスタイル・シートで提供できないこ とがあるため、スタイルを手動で書式設定する必要があります。

スタイルは、以下のさまざまなタイプのレポート用に定義されます。

- リスト・レポート
- クロス集計レポート
- チャート
- ダッシュボード・レポート

### グローバル・レポートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれ ているスタイルを使用して、新規の IBM Cognos レポートを書式設定します。新規 レポートのスタイルは、IBM Marketing Software レポート・パッケージ内のレポ ートのスタイルと一致していなければなりません。

表 15. グローバル・レポートのスタイル

	CSS クラス	
項目	名	スタイル
一般フォント・ファミリ ー	pg, pp	font-family: Arial,
レポート・タイトル	ta	font-size: 10pt;
ページ - ヘッダー	ph	padding-bottom:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
ページ - フッター	pf	padding-top:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
フィールド・セット・ラ ベル	fs	<pre>font-size:8pt;</pre>
テーブル	tb	border-collapse:collapse

表 15. グローバル・レポートのスタイル (続き)

	CSS クラス	
項目	名	スタイル
テーブル - リスト列のタ イトル・セル	lt	text-align:left; background-color:#F2F2F2; /*ライト・グレー*/ font-weight:bold; border-top:lpx solid silver; border-left:lpx solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:lpx solid silver; padding-top: 13px;
テーブル - リスト列のボ ディ・セル	lc、lm	border:1px solid silver;
テーブル - 外部ヘッダー	oh	background-color:#FFFFCC; /*ライト・イエロー*/
テーブル - リスト・フッ ター	of, os	border-top:1.5pt solid black;
クロス集計	xt	border-collapse:collapse;
クロス集計 - デフォルト 測定セル	xm	border-top:1px solid silver; border-left:1px solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:1.5pt solid black;
クロス集計 - メンバー・ ラベル・セル	ml	background-color: transparent; border:1px solid silver;
クロス集計 - 外部レベル の合計	ol	background-color:#F7F7F7; /*オフホワイト*/
クロス集計 - スペーサー	xs	background-color: transparent; font-weight: bold;
チャート	ch	border:1pt solid #E4E4E4;
チャート - タイトル	ct	<pre>font-size:10pt; font-weight:bold;</pre>
チャート - 軸ラベル	al	<pre>font-size:10pt;</pre>
チャート - 軸線	at	color:#939393;
チャート - チャート・パ レット	XML レポー ト仕様の場 合	XML レポート仕様のチャート・タグ () を閉じる前に、以下の行を 貼り付けます。 <chartpalette> <chartcolor value="#00a6a0"></chartcolor> <chartcolor value="#734098"></chartcolor> <chartcolor value="#774098"></chartcolor></chartpalette>
		<pre><chartcolor #a6266e"="" value="#cc/fit /&gt; &lt;chartColor value="></chartcolor> <chartcolor value="#d74108"></chartcolor> <chartcolor value="#efc100"></chartcolor> <chartcolor value="#aeb8b8"></chartcolor> <chartcolor value="#4178be"></chartcolor> </pre>

### レポートのページ・スタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれ ているスタイルを使用して、レポートのページを書式設定します。

表 16. レポートのページ・スタイル:

項目	スタイル
テキスト	Arial フォント
レポート・タイトル・テキスト	Arial 10 ポイント
ページ・フッター・テキスト	Arial 8 ポイント
フィールド・セット・ラベル	Arial 8 ポイント

### リスト・レポート・スタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれ ているスタイルを使用して、リスト・レポートを書式設定します。

以下の表に、リスト・レポートに対する GlobalStyleSheet.css スタイル・シート の書式設定を示します。

表 17. リスト・レポート・スタイル

項目	スタイル
セル	1 px のシルバーの境界線 (特に注記がない 場合)
列ヘッダー	ライト・グレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テ ーブルの残りの部分から列ヘッダーを分離さ せるためのもの)
サマリー・ヘッダー行 (リスト・ヘッダー)	ライト・イエローの背景
下部の合計行	ダーク・グレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テ ーブルの残りの部分から行を分離させるため のもの)

さらに、新規リスト・レポートを作成する場合は、以下のガイドラインに従って既 存のレポートに一致させてください。

- リスト・ヘッダー (リスト・フッターではなく)を使用して、集計をオブジェクト・レベルで表示します。
- リスト・ヘッダーに表示されている数字を手動で右寄せにします。リスト・フッ ターとは異なり、リスト・ヘッダーは、外部コンポーネントとサマリー・コンポ ーネントに分離されることはありません(両コンポーネントではデフォルトで右 寄せのスタイルが使用されます)。リスト・ヘッダーに情報を集計する場合は、追 加のステップを実行して値を右揃えにする必要があります。
- オプションで、グループ列に 1.5 pt の黒の実線で境界線を追加します。

以下の例は、グローバル・スタイルを使用しないリスト・レポートを示していま す。

#### Example List Report

Campaign Name	Offer Name	Number of Offers Given	Unique Recipients	Response Transactions	Unique Responders
Mortpage Multi-Channel Acquisition	Low Cost Refinance DM	3,973	3,973	1,239	1,117
Campaign	Low Cost Refinance TM	2,696	2,695	875	787
Multi - Wave Campaign		18,611	18,243	312	67
Multi - Wave Campaign	15 Pct Off \$75 Direct Mail	300	300		
	Buy One Get One 50 Pct Off Direct Mail	300	300		
	Money Market Savings	18,011	18,011	312	67
Multi-Channel Category Cross- Sell		19,672	19,672	4,825	2,541
Multi-Channel Category Cross-Sell	Bath Dmail	1,552	1,552	1,013	417
	Bath Email	2,260	2,260	1,281	528
	Clearance Dmail	145	145	26	16
	Clearance Email	200	200	33	22
	Electronics Dmail	207	207	47	30
	Electronics Email	270	270	59	39
	Home Care Dmail	71	71	20	12
	Home Care Email	92	92	22	13
	Home Decor Dmail	4,198	4,190	676	446
	Home Decor Email	6,250	6,250	931	605
	Juniors Dmail	11	11		
	Juniors Email	8	8		
	Kitchen Dmail	62	62	9	6
	Kitchen Email	86	85	15	11

以下の例は、グローバル・スタイルを使用するリスト・レポートを示しています。

Sunday of March Statester									
Office Ranne	Campanga Rama	Offers Green	Response Transactions	Response Rate	Unspection Stationards	Uniper Responders	Responder Kala	Ret Contacted Responders	Responses After Expection
(Her Maler (MINISTER)		14		124.17%	14		41.00%		
	Ad Groups (200000128)			0.0175	14		<.8%		
Offer, July (NERRORIE)		in		388.00%			136.36%		5
	tine (analysis) (20000000)			1 10.075			100.00%		1
	Test Cargospi (Children (2))			30.075	1	1	10.074		0
	Ad Group (20000012)			1 331-07%	,		101.075		1
	Shi (anang-hujariful, (anang-jan) (20000014)			8.8%			16.05		1
	Cargang Test 1 (20000000)								8
(Mart, July (Seesees)		20		311.04%	21	11	100.0076		
	Britanagehijadha, (anjage, tari (2000014)			5 55.07%			101-075		0
	Ad Geograph (2000000125)			30.075			10.075		8
	Text (arrange () (000000.01)			10.075			10.074		
	times (Langenge ). (Cited and and			4 (0.07h			75.075		8
Report Total			15	211.07%					

### グローバル化されたバージョンの日付形式

グローバル化されたバージョンの IBM Marketing Software レポート・パッケージ を使用する場合は、使用するロケールに応じてリスト・レポートの日付形式が異な ります。 Cognos リスト・レポートは、中程度の長さの日付スタイルを使用しま す。

次の表に、使用可能なすべてのロケールでのリスト・レポートの日付形式を示しま す。

表 18. グローバル化されたバージョンの Cognos リスト・レポートの日付形式

ロケール	Cognos リスト・レポートの日付形式の例
英語	Mar 18, 2014
ブラジル・ポルトガル語	18/03/2014
フランス語	18 mars 14
ドイツ語	18.03.2014
イタリア語	18/mar/2014
日本語	2014/03/18

表 18. グローバル化されたバージョンの Cognos リスト・レポートの日付形式 (続き)

ロケール	Cognos リスト・レポートの日付形式の例
韓国語	2014-03-18
ロシア語	18.03.2014
中国語 (簡体字)	2014-3-18
スペイン語	18-Mar-14

### クロス集計レポートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれ ているスタイルを使用して、クロス集計レポートを書式設定します。

以下の表に、クロス集計レポートに対する GlobalStyleSheet.css スタイル・シートの書式設定を示します。

表 19. クロス集計レポートのスタイル:

外部レベルの合計	グレー/オフホワイトの背景
測定セル (左上)	1.5 pt の黒い線 (クロス集計の残りの部分か らセルを分離するためのもの)
セル	透明背景: 1 px のシルバーの境界線
項目	スタイル

さらに、新規リスト・レポートを作成する場合は、以下のガイドラインに従って既 存のレポートに一致させてください。

- 1.5 pt の黒の境界線を使用して、測定値から集計を分離
- 1.5 の黒の境界線を使用して、論理列グループをグループ化
- 一般的なガイドラインとして、同じレポート内で列と行の両方を集計しないよう にしてください。

以下の例は、グローバル・スタイルを使用しないクロス集計レポートを示していま す。

	1		2		3		4		7		9
	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given								
	1,263	1,263	6,941	6,637	8,404	7,157	8,337	8,337			
Cross Sell	19,940	19,806	24,324	24,324				1.000000	9,563	9,563	
Loyalty	3,856	3,856			4,414	4,414					1
Retention	150	150			12,756	12,756					23,11
Acquisition					13,339	13,339	5,000	5,000			

#### **Example Crosstab Report**

以下の例は、グローバル・スタイルを使用し、列のグループを示すために 1.5 px の境界線が適用されたクロス集計レポートを示しています。



### チャートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css に組み込まれ ているスタイルを使用して、チャートを書式設定します。

以下の表に、チャートに対する GlobalStyleSheet.css スタイル・シートの書式設 定を示します。

チャートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

表 20. チャートのスタイル:

項目	スタイル
チャート	1 pt のライト・グレーの境界線
タイトルとラベル	10 ポイントの太字フォント

さらに、新規チャートを作成する場合は、以下のガイドラインに従って既存のチャ ート・レポートに一致させてください。

- レポートに複数のチャートがない限り、デフォルトの幅を使用します。単一のレポートに複数のチャートを組み込む場合は、チャート幅を 750px に設定します。
- グラデーションやカラー・パレットを使用するには、 145 ページの『グローバ ル・レポートのスタイル』のテーブルからストリングをコピーして、XML レポ ート仕様に貼り付けます。
- 一般的なガイドラインとして、返される予定のデータに基づいてチャート・タイプを選択します。
  - レポートが連続的なデータを取得すると保証できる場合にのみ、チャート・ タイプとして折れ線グラフを使用してください。
  - 複数の系列がある場合は、積み重ね棒グラフは、非積み重ね棒グラフより効果的です。
  - ベスト・プラクティスとして、パーセント合計が 100% に等しい場合にのみ、パーセントを使用してください。値が 100% に達していない場合、円グラフではユーザーを混乱させる場合があります。
- チャートにある系列が2つだけであり、Y1軸とY2軸の両方を表示する場合には、ベスト・プラクティスとして、色を軸ラベルの最初の2つのパレットの色に一致させる必要があります。

以下の例は、グローバル・スタイルを使用しないチャートを示しています。

Example Bar Chart Report







グローバル化されたバージョンの日付形式

グローバル化されたバージョンの IBM Marketing Software レポート・パッケージ を使用する場合は、使用するロケールに応じて表示されるチャート・レポートの日 付形式が異なります。Cognos チャート・レポートは、短い日付スタイルを使用し ます。

次の表に、使用可能なすべてのロケールでのチャート・レポートの日付形式を示し ます。

表 21. グローバル化されたバージョンの Cognos チャート・レポートの日付形式

ロケール	Cognos チャート・レポートの日付形式の例
英語	3/18/14
ブラジル・ポルトガル語	18/03/14
フランス語	18/03/14
ドイツ語	18.03.14
イタリア語	18/03/14
日本語	14/03/18

表 21. グローバル化されたバージョンの Cognos チャート・レポートの日付形式 (続き)

ロケール	Cognos チャート・レポートの日付形式の例
韓国語	14-03-18
ロシア語	18.03.14
中国語 (簡体字)	14-3-18
スペイン語	18/03/14

# ダッシュボード・レポートのスタイル

ダッシュボード・レポートでは、手動書式設定をいくつか備えたグローバル・スタ イルを使用します。

以下のガイドラインに従って、ダッシュボードに表示されるレポートがダッシュボ ード・ポートレットに適切に収まるようにしてください。

表 22. ダッシュボード・レポートのスタイル:

項目	スタイル
背景色	背景色は常にグレー (16 進値 F2F2F2) に設 定してください。
サイズ	できる限り、パーセントを使用してサイズを 指定します。パーセントのサイズ指定を使用 できない場合は、サイズを幅 323 ピクセ ル、高さ 175 ピクセルに設定してくださ い。
サブタイトル	左側にサブタイトルを置きます。
日付	右側に日付を置きます。
凡例	チャートの下の中央の凡例です。
線グラフの線	横線のみを表示します。縦線は表示しないで ください。
軸線の色	軸線は常に黒に設定します。
グリッド線の色	グリッド線は常にグレー (16 進値 D9D9D9) に設定します。
リスト (テーブル)	最大で 10 行を表示します。

# 第 13 章 Campaign、eMessage、および Interact の Cognos レポートの書式設定

Campaign、eMessage、および Interact の Cognos レポートには、追加の書式設定 が必要です。 Campaign、eMessage、および Interact のレポートのルック・アン ド・フィールを改善するために、グローバル・レポート・スタイルが変更され、既 存のクラスのスタイル設定をオーバーライドするクラスが追加されました。

ページ・クラス peretz は、Campaign、eMessage、および Interact のレポートの スタイル設定に使用します。ページ・スタイルに peretz クラスを使用するように すべてのレポートを修正しました。GlobalReportStyles.css および GlobalReportStyles\_10.css 内の peretz 親クラスに、いくつかの子クラスが追加 されました。

Campaign、eMessage、および Interact の Cognos レポートのスタイルを設定する ときに、新規レポート・ページを作成する場合は、新しいページ・クラス peretz を使用してください。

レポートを作成するとき、スタイルによってはスタイル・シートで提供できないこ とがあるため、スタイルを手動で書式設定する必要があります。

スタイルは、以下のさまざまなタイプのレポート用に定義されます。

- リスト・レポート
- クロス集計レポート
- チャート
- ダッシュボード・レポート

# グローバル・レポートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css および GlobalReportStyles\_10.css に組み込まれているスタイルを使用して、IBM Campaign、eMessage、および Interact の新規の Cognos レポートを書式設定しま す。

表 23. グローバル・レポートのスタイル

項目	<b>CSS</b> クラス名	スタイル
ページ - ヘッダー	ph	font-family: "Helvetica Neue", helvetica, arial, sans-serif;
ページ - フッター	pf	<pre>padding-top:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;</pre>

表 23. グローバル・レポートのスタイル (続き)

項目	CSS クラス名	スタイル
テーブル - リスト列 のタイトル・セル	lt	<pre>text-align:left; border: 1px solid #d9dbdc; background-color: #f7f7f7; background-image: none !important; font-weight:normal; vertical-align: top; padding: 10px 20px; font-family: "Helvetica Neue", Helvetica, Roboto, Arial, sans-serif; color: #58595b; font-size: 14px;</pre>
テーブル - リスト列 の本文セルの内側	lci	border: none; background-color: white !important; text-align: right; padding: 3px 5px; vertical-align: middle;
テーブル - リスト列 のボディ・セル	lc	<pre>border-top:1px solid #ddd ; border-bottom:1px solid #ddd ; padding: 3px 5px; text-align: left; vertical-align: middle; font-family: "Helvetica Neue", Helvetica, Arial, sans-serif;</pre>
テーブル - リスト列 の本文の測定セル	lm	<pre>vertical-align: top; border:1px solid #ddd; border-right: 0; border-left: 0; padding: 3px 5px; text-align: right;</pre>
クロス集計 - 合計を 示す先頭行	tr	border-left: 2px solid black; background-color: #bebebe !important; font-weight: bold; padding: 3px 5px;
複雑な表の合計 - 新 しいクラスを追加	ctth	color: #5a5a5a; background-color: #bebebe; border-bottom:2px solid black; padding: 3px 5px; border-left: 2px solid #bebebe;
テーブルの合計行	ttr	<pre>color: #5A5A5A; font-weight: bold; background-color: #E0E0E0; padding: 3px 5px;</pre>
テーブルの合計行	ctr	<pre>color: #000000; font-weight: bold; border-left:2px solid black; background-color: white; border-bottom:1px solid #a2a2a2;</pre>
テーブルの合計ヘッダ ー	cth	<pre>color: #000000; border-bottom:2px solid black; border-left:1.5px solid white; border-right:1.5px solid white; font-weight: 100;</pre>
リスト - 内部ヘッダ ー・セル	ih	<pre>border-top:1px solid #A0A0A0 ; border-bottom:1px solid #A0A0A0; padding: 3px 5px; vertical-align: middle;</pre>

表 23. グローバル・レポートのスタイル (続き)

項目	CSS クラス名	スタイル
リスト - 外部ヘッダ ー・セル	oh	<pre>font-weight: bold; vertical-align: top; border: 1px solid #CCCCCC; border-right: 0; border-left: 0; padding: 3px 5px; word-break:keep-all; background-color: #fff;</pre>
外部ヘッダー・セル、 上側に境界線	ohl	<pre>font-weight: bold; vertical-align: top; background-color: #ddd; padding: 3px 5px; word-break:keep-all; border-top:2px solid black; border-left:1.5px solid #ddd; border-right: 5pt solid #ddd; border-style:solid; border-bottom:none;</pre>
クロス集計	xt	<pre>border: 1px solid #d9dbdc; color: #6d6e70; empty-cells: show; font-size: 14px;</pre>
クロス集計 - メンバ ー・ラベル・セル	ml	<pre>font-style: normal !important; color: black; font-weight: 300; height: 30px; border-left: none; border-right: none; border-bottom:1px solid #a2a2a2;</pre>
クロス集計 - メンバ ー・ラベル・セル	cht	vertical-align: top; background-color:transparent; padding: 3px 5px; text-align: left;
クロス集計 - メンバ ー値セル	mv	<pre>vertical-align: top; white-space: nowrap; border: 1px solid #a2a2a2; padding: 3px 5px; text-align: right; border-left:none; border-right:none; vertical-align: top; white-space: nowrap; padding: 3px 5px; text-align: right;</pre>
フィールド・セット	fs	<pre>display: -moz-inline-block; display: inline; text-align: left; font-size:8pt; margin-bottom: 15px; color : #5a5a5a;</pre>
チャート	ch	border:1pt solid #E4E4E4;
チャート - タイトル	ct	<pre>font-size:10pt; font-weight:bold;</pre>
チャート - 軸ラベル	al	font-size:10pt;

表 23. グローバル・レポートのスタイル (続き)

項目	CSS クラス名	スタイル	
チャート - 軸タイト ル	at	<pre>font-weight:bold; text-align:center; font-size:10pt; color:#939393;</pre>	
チャート - チャー ト・パレット	XML レポート 仕様の場合	XML レポート仕様のチャート・タグ () を閉じる前 に、以下の行を貼り付けます。	
		<chartpalette> <chartcolor value="#00a6a0"></chartcolor> <chartcolor value="#734098"></chartcolor> <chartcolor value="#7cc7ff"></chartcolor> <chartcolor value="#a6266e"></chartcolor> <chartcolor value="#d74108"></chartcolor> <chartcolor value="#efc100"></chartcolor> <chartcolor value="#efc100"></chartcolor> <chartcolor value="#4178be"></chartcolor> </chartpalette>	
ハイパーリンク	.hy	color: #037bbf; font-size: 14px; font-family: "Helvetica Neue", helvetica, arial, sans-serif;	
合計を示す先頭列	tf	<pre>border-left: 2px solid black; background-color: #bebebe !important; font-weight: bold; padding: 3px 5px;</pre>	
複雑な表の合計	ctt	<pre>color: #000000; background-color: #bebebe !important; border-left:2px solid black; border-bottom: 1px solid #a2a2a2; padding-left: 5px 5px;</pre>	
複雑な表の合計行	cttr	color: #000000; background-color: #bebebe; font-weight: bold; border-bottom:1px solid #a2a2a2;	
リスト	ls	<pre>border: 1px solid #d9dbdc; color: #6d6e70; empty-cells: show; margin-top: 10px; font-size: 14px;</pre>	
吹き出し選択クラス	hoverSelection	background-color: transparent !important; color: #6d6e70 !important;	

# リスト・レポート・スタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css および GlobalReportStyles\_10.css に組み込まれているスタイルを使用して、リスト・レ ポートを書式設定します。

以下の表に、リスト・レポートに対する GlobalStyleSheet.css および GlobalReportStyles\_10.css スタイル・シートの書式設定を示します。

表 24. リスト・レポート・スタイル:

項目	スタイル
セル	上側と下側に 1 px の非常に薄いライト・グ レーの実線枠
列ヘッダー	白の背景、下側に 1.5 pt の黒線 (列ヘッダ ーを表の残りの部分と区切る)
サマリー・ヘッダー行 (リスト・ヘッダー)	ライト・グレーの背景
下部の合計行	ダーク・グレーの背景

以下の例は、グローバル・スタイルを使用するリスト・レポートを示しています。

Hide/Show Lift Information										_
Hide	•									
"Number of Offer(s) Selected	±4									
Offer Name	Campaign Name	Offers Given	Response Transactions	Response Rate	Unique Recipients	Unique Responders	Responder Rate	Not Contacted Responders	<b>Responses After Expiration</b>	
Offer Winter (00000046)	-	14	1	18 128.57%	34		42.86%		0	0
	Fall Campaign (C00000023)	14		18 128.57%	14		42.86%		0	0
Offer_Fall1 (000000024)		25	. a	2 288.00%	11	15	136.36%		5	0
	Winter_Campaign_1 (000000006)	6		500.00%	6		150.00%		3	0
	Test Campaign 1 (C00000020)	5		18 360.00%	5	1	200.00%		0	0
	Fail Campaign (C00000023)	5		16 320.00%	,		120.00%		1	0
	18H Campaign ProjectFall_Campaign_test1 (C000000018)	9		8 88.09%	3	1	140.00%		2	0
	Campaing Test 1 (C00000008)	0		• •	c	0	0		0	0
Offer_Fall2 (000000026)		27	2 <b>.</b>	4 237.04%	21	21	100.00%		•	0
	IBH Campaign ProjectPall_Campaign_test1 (C000000018)	3		15 500.00%			100.00%		0	0
	Fail Campaign (C00000023)	10		300.00%	30	20	100.00%		0	0
	Test Campaign1 (C00000020)	30		15 150.00%	30	50	100.00%		0	0
	Winter_Campaign_1 (C00000006)			4 100.00%		3	75.00%		٥	0
Report Total		65	15	4 233.33%					25	0

### グローバル化されたバージョンの日付形式

グローバル化されたバージョンの IBM Marketing Software レポート・パッケージ を使用する場合は、使用するロケールに応じてリスト・レポートの日付形式が異な ります。 Cognos リスト・レポートは、中程度の長さの日付スタイルを使用しま す。

次の表に、使用可能なすべてのロケールでのリスト・レポートの日付形式を示します。

表 25. グローバル化されたバージョンの Cognos リスト・レポートの日付形式

ロケール	Cognos リスト・レポートの日付形式の例
英語	Mar 18, 2014
ブラジル・ポルトガル語	18/03/2014
フランス語	18 mars 14
ドイツ語	18.03.2014
イタリア語	18/mar/2014
日本語	2014/03/18
韓国語	2014-03-18
ロシア語	18.03.2014
中国語 (簡体字)	2014-3-18
スペイン語	18-Mar-14

## クロス集計レポートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css および GlobalReportStyles\_10.css に組み込まれているスタイルを使用して、クロス集計 レポートを書式設定します。

以下の例は、グローバル・スタイルを使用するクロス集計レポートを示していま す。



### チャートのスタイル

グローバル・レポート・スタイル・シート GlobalReportStyles.css および GlobalReportStyles\_10.css に組み込まれているスタイルを使用して、チャートを 書式設定します。

新規チャートを作成する場合は、以下のガイドラインに従って既存のチャート・レ ポートに一致させてください。

- レポートに複数のチャートがない限り、デフォルトの幅を使用します。単一のレポートに複数のチャートを組み込む場合は、チャート幅を 750px に設定します。
- カラー・パレットを使用するには、153ページの『グローバル・レポートのスタイル』のテーブルからストリングをコピーして、XML レポート仕様に貼り付けます。
- チャートにある系列が2つだけであり、Y1軸とY2軸の両方を表示する場合には、ベスト・プラクティスとして、色を軸ラベルの最初の2つのパレットの色に一致させる必要があります。

以下の例は、グローバル・スタイルを使用するチャートで、追加の書式設定が適用 されています。



### グローバル化されたバージョンの日付形式

グローバル化されたバージョンの IBM Marketing Software レポート・パッケージ を使用する場合は、使用するロケールに応じて表示されるチャート・レポートの日 付形式が異なります。Cognos チャート・レポートは、短い日付スタイルを使用し ます。

次の表に、使用可能なすべてのロケールでのチャート・レポートの日付形式を示し ます。

表 26. グローバル化されたバージョンの Cognos チャート・レポートの日付形式

ロケール	Cognos チャート・レポートの日付形式の例
英語	3/18/14
ブラジル・ポルトガル語	18/03/14
フランス語	18/03/14
ドイツ語	18.03.14
イタリア語	18/03/14
日本語	14/03/18
韓国語	14-03-18
ロシア語	18.03.14
中国語 (簡体字)	14-3-18
スペイン語	18/03/14

### ダッシュボード・レポートのスタイル

ダッシュボード・レポートでは、手動書式設定をいくつか備えたグローバル・スタ イルを使用します。

以下のガイドラインに従って、ダッシュボードに表示されるレポートがダッシュボ ード・ポートレットに適切に収まるようにしてください。

表 27. ダッシュボード・レポートのスタイル:

項目	スタイル
サイズ	できる限り、パーセントを使用してサイズを 指定します。パーセントのサイズ指定を使用 できない場合は、サイズを幅 323 ピクセ ル、高さ 175 ピクセルに設定してくださ い。
サブタイトル	左側にサブタイトルを置きます。
日付	右側に日付を置きます。
凡例	チャートの下の中央の凡例です。
線グラフの線	横線のみを表示します。縦線は表示しないで ください。
軸線の色	軸線は常に黒に設定します。
グリッド線の色	グリッド線は常にグレー (16 進値 D9D9D9) に設定します。

表 27. ダッシュボード・レポートのスタイル (続き):

項日	スタイル
リスト (テーブル)	最大で 10 行を表示します。

# 第14章 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ

Campaign レポート・パッケージに含まれるレポート・スキーマをカスタマイズす るために、コンタクト、レスポンス・メトリック、属性、またはレスポンス・タイ プを追加できます。

次の方法で、Campaign レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイ ズすることができます。

- コンタクトまたはレスポンス・メトリックを追加する
- カスタムのキャンペーン、オファー、またはセル属性を追加する
- レスポンス・タイプを追加する
- パフォーマンス・レポートのオーディエンス・レベルを構成する
- 追加オーディエンス・レベル用のレポート・スキーマを作成する

以下の表では、Campaign レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートするレポート・スキーマにマップしてい ます。

表 28. IBM Cognos BI レポートからレポート・スキーマへのマッピング

		キャン			キャン	
	キャン	ペーン	キャンペー		ペーン	オファーのコ
	ペーン	カスタム	ン・パフォー	オファー・パ	オファー・レ	ンタクト・ス
	ビュー	属性	マンス・スキ	フォーマン	スポンスの詳	テータスの詳
	スキーマ	スキーマ	ーマ	ス・スキーマ	細	細
"What If"オフ ァー収支サマ リー・レポー ト	x	x		X		
キャンペーン 詳細オファ ー・レスポン スの詳細	X		X		X	
オファー・レ スポンスの詳 細 (ダッシュボ ード版)	X		X		X	
オファー別キ ャンペーン収 支サマリー (実 績)	X	X	X			
<ul><li>キャンペーン</li><li>投資収益率の</li><li>比較</li></ul>	X	X	X			

表 28. IBM Cognos BI レポートからレポート・スキーマへのマッピング (続き)

		キャン			キャン	
	キャン	ペーン	キャンペー		ペーン	オファーのコ
	ペーン	カスタム	ン・パフォー	オファー・パ	オファー・レ	ンタクト・ス
	レッー	屋供	コンフ・フセ	フォーフン	フポンフの詳	テータフの詳
		丙仁				
	X+- v	X+= v	- ~	ス・スキーマ	不田	が田
月単位のキャ	X		X			
ンペーン・オ						
ファー・パフ						
オーマンス						
+ ) ) ( ) )	X		X			
++)~-	X		X			
ン・パフォー						
マンス比較						
キャンペーン	X		X			
レスポンス率						
の比較						
	24		2			
収益を含むキ	X		X			
ャンペーン・						
パフォーマン						
スの比較						
イニシアチブ	X		x			
別のキャンペ						
ーン・パフォ						
ノーフレフレ転						
セル別のキャ	X		X			
ンペーン・パ						
フォーマン						
ス・サマリー						
収益を含むセ	x		x			
ル別のキャン						
ペーン・パフ						
サマリー						
セルおよびイ	X		X			
ニシアチブ別						
のキャンペー						
ン・パフォー						
マンス・サマ						
1) -						
オファー別の	X		X			
キャンペー						
ン・パフォー						
マンス・サマ						
リー						
収益を含むオ	x		x			
ファー別のモ						
ノノがのワイ						
7 / 1 - / .						
パフォーマン						
ス・サマリー						

表 28. IBM Cognos BI レポートからレポート・スキー	マヘのマッピング (続き)
------------------------------------	---------------

		キャン			キャン	
	キャン	ペーン	キャンペー		ペーン	オファーのコ
	ペーン	カスタム	ン・パフォー	オファー・パ	オファー・レ	ンタクト・ス
	ビュー	属性	マンス・スキ	フォーマン	スポンスの詳	テータスの詳
	スキーマ	スキーマ	-7	ス・スキーマ	細	細
オファー別の	x		x			
キャンペーン						
収益比較						
キャンペー	x					
ン・サマリー						
オファー・キ	x					
ャンペーン・						
リスト						
オファー・パ	X			X		
フォーマン						
ス・メトリッ						
ク						
日単位のオフ	X			X		
アー・パフォ						
ーマンス						
最終 7 日間の	X			X		
オファーレス						
ポンス						
オファー・パ	X			X		
フォーマンス						
の比較						
オファー・レ	x			x		
スポンス率の						
比較						
キャンペーン	x		x	x		
別のオファ						
ー・パフォー						
マンス・サマ						
リー						

次のレポートでは、Campaign で提供されるカスタムのコンタクトおよびレスポン ス・メトリック属性の標準セットを使用します。

- "What If"オファー収支サマリー
- キャンペーン詳細オファー・レスポンスの詳細
- オファー別のキャンペーン収支サマリー (実績)
- 収益を含むキャンペーン・パフォーマンスの比較
- 収益を含むセル別キャンペーン・パフォーマンス・サマリー
- 収益を含むオファー別キャンペーン・パフォーマンス・サマリー

# eMessageレポートおよびレポート・スキーマ

eMessage レポート・パッケージ内には、メッセージ概要レポート、詳細リンク・レ ポート、eMessage レポート処理の概要、SMS メッセージのサマリー・レポートな どのいくつかのレポートが用意されています。

以下の表では、eMessage レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートする IBM レポート・スキーマにマップ しています。

表 29. eMessage レポートおよびレポート・スキーマ

	メール配信パフォーマンス・
レポート名	スキーマ
メッセージ概要レポート	X
詳細リンク・レポート	X
セル別詳細リンク・レポート	X
詳細バウンス・レポート	X
A/B テスト・パフォーマンス・レポート	X
eMessage レポート処理の概要	X
SMS メッセージのサマリー・レポート	X

### Interact レポートおよびレポート・スキーマ

Interact のレポート・パッケージのレポートは、IBM レポート・スキーマによって サポートされます。スキーマをカスタマイズすれば、時間枠の指定、オーディエン ス・レベルの構成、追加のパフォーマンス・レポート・スキーマの作成を行うこと ができます。

次の方法で、Interact レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイズ することができます。

- パフォーマンス・レポートのカレンダーの時間枠を指定する
- パフォーマンス・レポートのオーディエンス・レベルを構成する
- 追加オーディエンス・レベルの追加パフォーマンス・レポート・スキーマを作成 する

以下の表は、Interact レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートする IBM レポート・スキーマにマップしています。

			対話 式		
		Interact パフォー	チャネル/	Interact ランタイ	Interact ラーニン
	対話式	マンス・ビュー・	キャンペーン配置	ム・ビュー・スキ	グ・ビュー・スキ
	ビュー・スキーマ	スキーマ	履歴	-7	ーマ
キャンペーン -	Х		Х		
対話式チャネル配					
置履歴					

			対話		
		Internet 18 7 about	式	Internet 51/24	Internet St. SV
	生祥状	Interact ハノオー	ナヤイル	Interact フノダイ	Interact フーーン
	ドュー・スキーマ	スキーマ	履歴	-7	-7
キャンペーン	v	v		v	
イャンペーン - 対話式セル・パフ	^	^		^	
オーマンス					
キャンペーン	v	v		v	
オファー別対話式	^	^		^	
ヤル・パフォーマ					
レス					
キャンペーン -	x	x		x	
時間経過に伴う対	<i>x</i>	~		~	
話式オファー・パ					
フォーマンス					
キャンペーン -	x	x		x	
セル別の対話式オ					
ファー・パフォー					
マンス					
キャンペーン -	X				Х
対話式オファー学					
習の詳細					
対話式セルの上昇	X	X		X	X
分析					
対話式チャネル -	X		х		
チャネル配置履歴					
対話式チャネル -	X			X	
チャネル・イベン					
ト・アクティビテ					
ィー・サマリー・					
レポート					
対話式チャネル -	X	X		X	
チャネル・インタ					
ラクション・ポイ					
レント・ハフオーマ					
シス・サマリー					
対話式チャネル -	X				
ナヤネル処理ルー					
計手ナレガリント	Y	v		v	
刈詰式セクメント	X	X		X	
上升万仞					
1ンダフクショ	X	X		X	
ノ・ホイント・ハ					

# IBM 技術サポートへのお問い合わせの前に

資料を調べても解決できない問題に遭遇した場合、貴社の指定の窓口担当者は IBM 技術サポートとの通話を記録することができます。問題を効率的かつ正しく解決す るために、以下のガイドラインを使用してください。

貴社の指定の窓口担当者でない方は、社内の IBM 管理者にお問い合わせください。

注: 技術サポートは、API スクリプトの書き込みまたは作成を行いません。 API オファリングの実装で支援が必要な場合は、IBM 専門サービスにお問い合わせください。

#### 収集する情報

IBM 技術サポートへのお問い合わせの前に、以下の情報をご用意ください。

- 問題の性質についての簡単な説明。
- 問題が生じたときに表示される詳細なエラー・メッセージ。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデー タ・ファイル
- 製品およびシステム環境に関する情報 (この情報は「システム情報」の説明に従って取得できます)。

#### システム情報

IBM 技術サポートにお問い合わせいただいた際に、お客様の環境に関する情報の提供をお願いすることがあります。

問題がログインの妨げになっていない場合、この情報の多くは「バージョン情報」 ページから得られます。このページでは、インストール済みの IBM アプリケーシ ョンに関する情報が提供されています。

「バージョン情報」ページにアクセスするには、「ヘルプ」>「バージョン情報」を 選択します。「バージョン情報」ページにアクセスできない場合、 version.txt フ ァイルをご確認ください。このファイルはアプリケーションのインストール・ディ レクトリーの下にあります。

#### IBM 技術サポートの連絡先情報

IBM 技術サポートへのお問い合わせ方法については、IBM 製品技術サポート Web サイト (http://www.ibm.com/support/entry/portal/open\_service\_request) を参 照してください。

注: サポート要求を入力するには、IBM アカウントを使用してログインする必要が あります。このアカウントは IBM カスタマー番号とリンクしていなければなりま せん。アカウントを IBM カスタマー番号に関連付ける方法については、サポート・ポータルの「サポート・リソース」>「ライセンス付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合 があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービス に言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能 であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を 侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用す ることができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの 評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を 保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実 施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わ せは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19番21号 日本アイ・ビー・エム株式会社 法務・知的財産 知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およ びその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供 し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべ ての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によって は、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を 受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的 に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。 IBM は予告なしに、随 時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を 行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜の ため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありま せん。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではあり ません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプロ グラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の 相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする 方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation B1WA LKG1 550 King Street Littleton, MA 01460-1250 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができま すが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、 IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれ と同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定された ものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。 一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値 が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一 部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があ ります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要がありま す。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公 に利用可能なソースから入手したものです。 IBM は、それらの製品のテストは行 っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の 要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの 製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回 される場合があり、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行 価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。よ り具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品 などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであ り、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎませ ん。

#### 著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を 例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されていま す。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラット フォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプ リケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式 においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを 経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、 利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。 これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態で提供されるも のであり、いかなる保証も提供されません。 IBM は、お客様の当該サンプル・プ ログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示さ れない場合があります。

### 商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞ れ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストに ついては、http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

### プライバシー・ポリシーおよび利用条件に関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エン ド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のた めに、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザーに送信できるデータで、お客様のコンピ ューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。 多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご 使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類する テクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体 的事項をご確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、 お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれ のお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie お よび持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無 効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはでき ません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令 等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie および さまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能 を提供する場合、 お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイ ドライン等を遵守する必要があります。これには、エンド・ユーザーへの通知や同 意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBMの使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関す る方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件 (例えば、プライバシ ー・ポリシー) への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧 者のコンピューターに、 Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置 することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明する こと、および(3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイ トへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置す る前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、 IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』 (http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/) の『クッキー、ウェブ・ビーコ ン、その他のテクノロジー』を参照してください。



Printed in Japan